永遠のラブストーリー　～片思い編～

余田史子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永遠のラブストーリー　～片思い編～

【Ｎコード】
Ｎ５３０５Ｌ

【作者名】
余田史子

【あらすじ】
「かけがえのない存在だから」の桃子が主人公のお話です。
桃子側からみた、桃子と聖の恋の物語。
「かけがえのない存在だから」の、のちの二人のストーリーも、書いていくので、どうぞ楽しみに見てみてください。

第1段階　好きな人が出来る

私は椎野桃子（しいのももこ）。今、高校1年生。彼氏いない歴、15年。つまり、まだ誰とも付き合ったことがない。

好きな人はいた。中学3年の時に。でも、好きっていっても、近くの高校に通ってる人で、名前も何もわからなくって、駅で時々見かけるだけ。

バレンタインにチョコレートを渡そうとして、一歩が出ずに、渡せなかった。友達の蘭（らん）と、菜摘（なつみ）が、

「なんで渡さなかったの？」

って言ってきたけど、どうしても、勇気が出なくって…。

「どうせ、ふられちゃうから」

って言ったら、そこが桃子の悪い癖って蘭に言われた。それに、

「なんで、悪い方に考えちゃうの？うまくいくって思えないの？」

と、菜摘にも言われた。

蘭と菜摘なら、「うまくいく」って、そう思えるかもしれない。だって、二人とも可愛くて、明るくて、私が男の子なら、絶対に好きになるだろうなって、そんな女の子だから。

私は、その真逆。背も小さくて、いるかいないかわからないような、内気で、可愛くもないし、美人でもないし、運動も苦手だし。どこも、男の子から見て、魅力のあるところなんてない、そんなだから。

バレンタインが過ぎた頃から、ぱたりとその人を見かけなくなった。どうやら、高校3年生だったみたいで、もう、学校に行く機会もなくなったのかもしれない。

そして、春休み。彼氏のいない、蘭と菜摘と私で、高校に入ったら、彼氏を作ろうねと、硬く決心をした。

中学からエスカレーター式の女子高に通っていて、私たちはまったくと言っていいほど、出会いがなくて…。私ならわかるけど、蘭と菜摘に彼氏がいないのは、不思議なことだった。でも、出会いがないのだからしかたがない。

うちの高校は私立で、けっこうきびしくて、バイトも禁止。バイトなら出会いもあるかもと思ってたけど、それも無理。

春休みにそう誓ったのに、あっという間に、夏休みになっちゃってた。

夏休みといっても、バイトもできないし、どうしようかって3人で話してて、まさか、海に行って声かけられるのを待ったり、逆ナンなんて、できないよね〜〜って、そんなことも言っていた。

それに、私は海は苦手。泳げないし、やくとすぐに真っ赤になり、痛くなるし、そばかすはできるし…。

それなのに、妹のひまわりが、海に絶対に行きたいって言って、家族で海水浴に行くことになっちゃって…。

私は嫌だって言ったけど、だったら、ずっと海の家でもいたら？って母にも言われて、強引に連れて行かれた。

場所は、江ノ島。道が混むと大変だからって、父が朝早くから車を出し、私以外の3人はおお張り切り。私は、暇だと嫌だから、文庫本を2冊も持って、仕方なくついて行った。

水着にはなったけど、その上に長袖のパーカーをはおり、膝丈のパンツもはいて、まったく泳ぐ気もゼロで、海の家で文庫本を読んでいた。

でも、やっぱり暑くって、カキ氷を買いに行くと、そこでバイトをしている人が、
「シロップは何をかけますか?!」
って、すごく元気に聞いてきて…。

私は、
「イチゴ…」
って答えたんだけど、声が小さかったからか、
「え?何?」
って、聞き返されて、もう一回、
「イチゴ」
と少し大きめに言うと、私の方にかなり顔を近づけて、
「イチゴ?」
って聞いてきて…。

「はい。そうです」
と答えると、ニコ!その笑顔が、ものすごく素敵で…。日に焼けてて、笑うと真っ白な歯が見えて、汗いっぱいかいてて、それでも、ニコニコずっと笑いながら答えてくれて。

カキ氷を持って、テーブルに戻って食べながら、私はずっと、その人のことを目で追ってた。
お客さんには、すごい素敵な笑顔で接してて、バイトの仲間とは、たまに冗談言って、大笑いをしてて…。でも、まじめに、ちゃんと働いてて、ときどき真剣な表情も見せる。
汗が額から流れると、それを拭いながら、また、にこって微笑んでる。

もう、その人から目が離せなくなっていた。私は、カキ氷を食べ終わっても、文庫本を読むふりをして、その場で、ずっとその人の

ことを見ていた。
もしかして…。ううん。確実に私は、この人のこと、好きになっちゃってる…。

恋っていうのは、こんなに突然やってくるのかな。でも、江ノ島なんて来る事もないし、まさか、今、話しかけることもできないし、好きになっても、もう、会うこともできないかもしれないのに…。
ガク…。その人のことを目で追いながら、そんなことも考えてて、嬉しいような悲しいような、切ないような…。

もう一回会えたらいいな。名前、わかったらいいな。そんなことを思いながら、家路に着いた。
その日の夜、蘭と菜摘に、江ノ島で素敵な人を見たんだって、メールを送った。
＞じゃ、また、会いに行かなくちゃ！
蘭からそんなメールが来た。
＞3人で行こうよ！江ノ島！
菜摘からも、メールが来た。
＞これは、チャンス到来！絶対にその恋は、逃がしちゃ駄目だよ。この前みたいに一歩も踏み出せず終わらせちゃ駄目だからね。
蘭から、そんなメール。

＞恋じゃない。素敵な人だったってだけで…。また会えるかわからないし…。
＞ほら。桃子の悪い癖。いい方に考えて、行動行動！よし！いつにする？早めに行こうよ！
蘭は、行動がいつも早くて、あっという間に、決めてしまう。菜摘もすぐに、のりのりで、盛り上げてくれる。
3日後に、江ノ島に行くことになり、その人にまた会えるのか、会ったらどうしたらいいのか、私はその間、夜もあまり眠れないほ

ど、ドキドキしてた。

そして、朝早くに小田急線に乗り、３人で片瀬江ノ島まで行った。
天気が良くて、暑い日で、二人はノリノリ、おおはしゃぎ。私は朝から、ううん、昨日からずっと、緊張しっぱなし。
いるかな?会いたいな。でも、会ってもどうしたらいいのかな…?

浜辺に着くと、蘭はすぐにパラソルを借りに行き、菜摘は、シートを広げた。それから、
「さて…。どの海の家?」
って二人して同時に、聞いてきた。
「え?」
「ほら、早く。どこの海の家?そこで、着替えようよ」
「うん。えっと、確かあそこだったと思う」
そんな曖昧な答え方をしたけど、本当は浜辺に来た瞬間から、
「あそこだ」
ってわかってたし、海の家の中に、あの彼はいないかって、ちょっと探したりしていたんだけど…。

「よっしゃ～。行くか～」
菜摘がそう言うと、さっさと荷物を持って、進み出した。そのあとを、蘭もどんどん歩いていっちゃって、私は慌ててその後ろを、
「待って!」
と、追いかけた。

二人の方が先に、海の家に到着し、
「すみません。着替えたいんですけど」
と、声をかけていた。でも、そのバイトの人は、あの彼じゃなかった。
「あ。はい、どうぞ」

優しい、大人しい感じの人。

更衣室に入ってから、小声で蘭が、
「今の人？」
って聞いてきた。
「ううん、違う。なんか、いなかったみたい」
「ええ？そうなの？本当にここなの？」
菜摘が大きな声で言うので、私は慌ててしまった。
「し～～！声、大きいよ」
「あ、ごめん」

私たちは、水着に着替え、更衣室を出た。
海の家を、見回しても、この前の人はいなくて、ああ、今日は休みなのかもとか、それとも、もうやめちゃったのかなとか、がっかりしながら、私はシートをしいた場所に戻った。
「いなかった？」
「うん…」
「そっか～～。あ、でもほら、他に出会いがあるかもしれないし！それよりも、桃子、日焼け止めぬってあげるよ」
菜摘が、明るくそう言ってくれた。

「さっきの人は、あまり私、好みじゃないしな～」
蘭がそう言うと、
「ええ？何それ。桃子のために来たんじゃないの？」
と、菜摘が…。
「そうだけど。でも、私たちもこのチャンスを逃す手はないでしょう。彼氏をこの夏にゲットする！ね。菜摘！」
と、蘭は張り切っていた。

それから、３人でしばらくビーチボールで遊んで、そのうちに、

二人は泳ぎに行った。私は荷物番。ビーチパラソルの影に入り、持ってきた文庫本を読む。

そのうちに、二人が戻ってきて、

「のど渇いたから、何か飲み物買ってくるよ。何がいい？」

って、蘭が言った。

「じゃ、私はコーラ」

菜摘がそう言って、

「私は、ポカリがいいな」

と、蘭に私も頼んだ。

「ＯＫ」

蘭は砂浜の砂もものともせず、海の家の方に走っていった。

でも、なかなか戻ってこなくて、

「何してるのかな？ちょっと見てくるね」

と、菜摘も行っちゃって…。

少しすると菜摘が戻ってきて、

「さっきの海の家、バイトが増えてる！もしかして、桃子の好きな人もいるかもよ。蘭が話をしているから、桃子もおいで！」

と…。

ドキ…。嘘…。もしかして、あの人？私は、ドキドキしながら、海の家に向かった。

「ほら。蘭が話してる二人。あのうちのどっちかじゃない？」

菜摘が小声で私に、聞いてきた。

「……！そ、そうだ…。あの人だ…」

「ええ？どっち？！」

「水色のＴシャツ着てるほう」

「え～～。ちょっとちょっと、めちゃかっこいいじゃん！」

菜摘が私の腕を、つっついてきた。

「話をしに行こうよ」
「え？」
「ほら、行くよ！」
菜摘は私の腕をひっぱって、蘭のところに行き、
「蘭！私の頼んだコーラは？」
と聞いた。
「あ、ごめんごめん。まだ、頼んでないや」
蘭は、そう言うと、
「ポカリとコーラ」
と、あの彼に注文した。
「はい、ポカリとコーラね」
にこってあの笑顔を見せながら、その人は答えた。

ああ。あの人だ。また、会えた！！！嬉しいよ～～～。顔が思い切りにやけそうになって、私はずっと、下を向いていた。
ポカリと、コーラを菜摘が受け取り、私に渡してくれた。それを持って、席の方に移動しようとしたけど、菜摘も、蘭もその場を離れなかった。

周りを見ると、そんなにお客さんもいなくて、あの彼ともう一人のバイトの人は、菜摘と蘭とずっと話をしていた。
４人でやけに盛り上がり、私はどうしたらいいかわからず、ずっと二人の影にいた。
「新百合ヶ丘から来たの。電車乗って。二人は？このへんに住んでるの？」
蘭は、二人に聞いていた。
「うん、すぐ近く」
もう一人の人が、そう言った。

他のお客が来て、カキ氷を注文した。あの彼が、注文を受けて、カキ氷を作りだした。
「あのさ、2時間したら、俺ら休憩なんだ。４５分だけなんだけど、そんとき話の続きしようよ」
もう一人のバイトの人が、そう蘭に言った。
「うん、いいよ。あ、私たちあのあたりにいる。見える？パラソルが立ってる」
「ああ、うん。わかるよ。じゃ、休憩になったら、ひじりと行くよ」

ひじり…。ひじりっていうのかな。あの人。年はいくつかな。年上っぽいな。ひじりってどんな漢字かな。聖かな？一文字かな？
私は、嬉しくて、ドキドキしてた。

シートに戻ると、蘭が、
「もしかして、あの二人のどっちか？」
と、聞いてきた。
「水色の方だって！」
と、菜摘が答えた。
「え～～。イケメン！面食いじゃん、桃子。そういえば、この前好きになった人も、イケメンだったっけ」
「そ、そんな面食いじゃないよ、私」

「そっか～～。ちょっとほっとしたりして～～」
蘭はそんなことを言った。
「ほっとしたって？」
そう聞くと、
「もう一人のオレンジのＴシャツ着てた、元気な方。タイプかもって思って。もし、桃子が好きな人だったらどうしようって思ってたんだよね」
と、蘭が答えた。

「ああ、なんかたくましい感じの人だよね？オレンジの方は…。体育会系の…」
菜摘がそう言うと、
「うん。そういう人がタイプなんだ。顔よりも、肉体美」
と、蘭が嬉しそうに答えた。
「え？そうだったの？知らなかった！」
私が驚くと、菜摘は、
「私はなんとなく、知ってた～～」
と笑った。

「ああ、なんだ。二人してタイプの人見つけちゃって。私だけじゃん、いないの」
と、菜摘が言った。
「菜摘のタイプは？」
私が聞くと、
「タイプはないよ。でも、そうだな。楽しい面白い人がいいな。一緒にいて、楽しめる人」
と、菜摘は言った。

私は面食いというよりも、雰囲気で好きになるみたい。何か一生懸命さだったり、笑顔が素敵だったり…。ああ、そうだ。あの彼も、えっと、ひじり君も、笑顔が素敵って思ったんだよね。

ドキドキしながら、2時間を待った。二人はまた、海に泳ぎに行ってた。
菜摘と蘭が戻ってきて、3人でのんびりしていると、
「お待たせ」
って、バイトの人がやってきた。

見てみると、3人いた。朝、更衣室を借りに行った時にいた人も一緒だった。
「あれ？3人なの？」
私と蘭、菜摘を見て、ひじり君がそう言った。
「え？お前3人いたの気づかないでいたの？」
オレンジのTシャツを着た人が、そう言った。
「あ、ごめん、全然…」
私だ。私の存在にまったく気づいていなかったんだ。
ガク…。思いきり落ち込んでしまった。

シートの横に3人は座って、
「自己紹介をします！」
と、突然オレンジのTシャツの人が、手を挙げた。
「え～～、俺、植田基樹（うえだもとき）っていいます。植える田んぼ。基地の基っていう字に樹液の樹」
「何？その漢字の説明。へたくそ」
「うっせえよ。じゃ、次はお前な」

「俺は榎本聖（えのもとひじり）。木ヘンに夏って書いて、ブックの本で、榎本。ひじりは、聖なる夜の聖ってかきま～～す」
ああ、やっぱり聖って一文字で、ひじりって読むんだ。
「ちなみに、聖なる夜生まれです！」
「聖なる夜？」
蘭が聞いた。
「そ、クリスマスイブなんだ。誕生日」
「え～。すごいね」
菜摘がそう言った。

「かわいそうだと思わね？誕生日プレゼントと、クリスマスが一緒なんだぜ」

「そうだよね～～」
基樹君と、蘭がそう言った。
「う～～ん、でもうちの家族、必ず二つずつくれるよ。プレゼント」
と、聖君が言うと、
「え?!まじ?うちなんて、もう、クリスマスも誕生日もプレゼントないよ」
って、基樹君が言った。
「あはは。基樹の方がかわいそうじゃん！」
蘭が、いきなり呼び捨てになってた。

「俺は、杉本葉一(すぎもとよういち)。杉って木の杉。ブックの本。ようは、葉っぱのよう。それから漢数字の一」
「基樹君と、聖君と、葉一君。よろしくね。私は、萩原菜摘(はぎわらなつみ)。草冠に秋で、萩。原っぱの原。菜の花の菜に、摘むってかいて、菜摘」
「へ～～。可愛い名前だね」
聖君が言った。

「私は、橘川蘭(きっかわらん)。橘川はね、木ヘンのきつっていう字。わかんなかったら、辞書でもひいて。それに三本川の川。蘭は花の蘭と同じ字」
「あはは…。何そのアバウトな説明～～。おもしれ～～！」
聖君が大笑いをした。

そして、みんなで私を見た。あ、私の番だ。
「椎野桃子です。椎っていう字に、野原の野。桃子は桃に子供の子」
ああ、なんか説明になってない。また、聖君に笑われるかな?
「しいって、どんな字だっけ?」
葉一君に聞かれて、自分の手に書いて説明をしていると、
「俺ら、高2なんだけど、蘭ちゃんたちは何年生なの?」
って、聖君は、蘭に聞いていた。

そこでも、ちょっとショックだった。私の名前なんて、あまり興味ないのかな。だって、明らかに二人が名前を言った時と、リアクションが違ってるもの。

「私らは、高1だよ」

と、蘭が答えた。

「え?まじで?大人っぽくない?タメかって思った」

聖君は、そう言った。

それから、聖君は、蘭とたくさん話をし出した。なんか、意気投合しているようにも見えて、私はますます落ち込んでしまった。

「あ、ビーチボールあるじゃん。ビーチバレーやらねえ?」

基樹君が、提案した。

「ああ、いいね。2対2に別れて」

と、聖君は言った。

「じゃ、みんなで交代でやる?」

菜摘がそう言うから、

「私はいい。ここにいるよ」

と断った。

「俺もパス。なんか疲れたから、ゆっくりしてたい」

葉一君も、断った。

「じゃ、ちょうど4人でいいじゃん」

聖君はそう言うと、ビーチボールを基樹君から取り、ふざけながら、広い場所にと移動した。

「ごめん、桃子!」

菜摘が、少し申し訳なさそうに言った。

基樹君と蘭は、ふざけあいながら、聖君のあとを追っかけていった。

「……」

私は、また落ち込んだ。もう、地球の裏側に行っちゃうんじゃないかな。
「もしかして、あんまり日に焼けるの得意じゃない方？」
葉一君が、聞いてきた。
「あ、うん。肌弱くて…」
「色白いもんね。赤くなっちゃうんじゃない？気をつけないと」
「うん。ありがとう。でも、パーカー着てるし、平気だと思う」

「海、苦手なんじゃないの？」
「え？…うん」
「じゃ、なんで来たの？」
わあ。ストレートに聞いてくるんだな。葉一君は…。
「えっと…。でも、海を見てるのは好きだし…。本、読んだりするのも、好きだし…」
「本読みに来たんだ」
「……」
私は黙ってしまった。葉一君もしばらく黙ってたけど、
「あ、悪い。俺そろそろあがる時間だ。俺、早番だったんだよね」
と言って、海の家の方に、行ってしまった。

「は～～」
男の人と話すのは、緊張するからほっとした。
私は、一人で海を眺め、それから、遠くの方で、ビーチボールを楽しんでる４人を見た。すごく楽しそうだった。遠いけど、聖君の笑顔ははっきりと見える。

ああ、素敵な笑顔だな。でも、あの笑顔、私には今日、向けられてないや…。
だけど、落ち込みまくったから、これ以上落ち込まないってところまで、きたようだ。

「あの笑顔が、見れただけでもいいかな。もし、みんなで仲良くなれたら、また、会えるかもしれないし…」
開き直っていた。もともと、告白する気もないし、彼女になろうなんて、夢のまた夢だって思ってたし。好きな人ができた。それだけでも、私には、すごいことだったから。

しばらくすると、４人は戻ってきた。
「じゃ、仕事戻るよ。また、江ノ島遊びに来る？」
基樹君が聞いてきた。蘭が、
「う～～ん、来たいけど…」
と、私の方をちらっと見た。
「あ、じゃ、帰る前に海の家に寄ってって。メアド交換しとこうよ」
基樹君が、蘭にそう言った。
「うん。いいよ！」
蘭が、基樹君にそう答えた。
「あっち～～～～～！」
聖君は、そう言って、さっさと海の家の方に向かって行ってしまった。

夕方になり、私たちはまた着替えに海の家に行き、そのあと、基樹君と、聖君のところに行った。
「じゃ、赤外線通信で…」
みんなで携帯を出した。私は、ぼ～～ってそれを眺めていると、
「何やってんの？桃子の携帯も出して！」
と、蘭に言われた。
「え？うん」

私のメアドなんて教えても、誰もメールよこさないだろうにな…。
そんなことを考えながら、携帯を出した。
だけど、メールが来なくても、聖君のメアドを知れたのは、すご

いことかもしれない。
「じゃ、今度会う日を決めようよ。あとで、メールすっから」
基樹君が、そう言った。

「あ、花火大会あるじゃん。もうすぐ」
と、聖君が言った。
「花火大会、来たい！」
菜摘が、喜んだ。それから、
「ね？桃子。浴衣とか着てさ、来たいよね？」
と、私にふってきた。
「え？うん…」
「浴衣？すっげえ」
聖君が、そう言って、
「じゃ、花火大会、決まりね！」
と笑った。

そうか。浴衣か…。
また、会えるのも嬉しかったし、聖君が、浴衣で反応したから、
絶対浴衣を着てこようって、私は思っていた。

第2段階　好きな人のことを知る

花火大会、当日。少しだけ怪しい天気…。でも、私も蘭も菜摘も浴衣を着て、電車に乗り、江ノ島に行った。

駅の改札口に、聖君たちはいた。時間や、待ち合わせ場所は、聖君、基樹君、それから蘭で決めたらしい。3人は、ちょくちょくメールのやりとりをしているようだった。

蘭は、大人っぽい浴衣を着ていた。顔も雰囲気も大人っぽいし、スタイルもいいし、とても高1には見えない。

菜摘は、白っぽい浴衣だった。日に焼けた肌に似合ってて、元気で可愛い感じのする浴衣だ。

私はといえば…。紺で、子供っぽい柄の浴衣で、ああ…、まるで、小学生みたいじゃない？って自分でも思った。

男性陣は、まず、蘭に目がいってた。それから、菜摘にも…。

「へえ。なんか雰囲気変わるね」

聖君は、そう菜摘に言った。

「え？どんなふうに？」

菜摘が聞くと、

「え？どんなふうにって言われてもな…」

と、聖君は困っていた。

聖君は、蘭とよく話をしてる。時々、菜摘とも話をするけど、まとを得ていないことを言ったり、口ごもっていたりする。なんでかな？

私には…。まったく、話しかけてこない。

私は、いつも5人から一歩後ろの方を歩いてた。背が1番小さく

て、歩くのも遅いっていうのもあったんだけど、みんなの輪にいまいち、入れていなかったっていうのもある。

電車の中で、菜摘と蘭に、

「もっと、積極的に聖君に話しかけなよ！」

って言われた。でも、どうやって、話しかけたらいいのか、何を話したらいいのかもわからなかったし、そんな勇気もなかった。

そばにいるだけで、ドキドキしてたし、たまに目が合いそうになると、私は絶対に視線をそらしていた。

恥ずかしくて、目を合わせることもできなかったから。だけど、やっぱり聖君のことを、目で追ってて…。

嫌だな。こんなうじうじした性格。菜摘や、蘭が羨ましい。どうして、あんなにどうどうと男の子と話せるのかな。

海岸について、石段にみんなで座った。しばらくすると、花火が上がり出した。

「うわ～～。綺麗！」

みんなで、花火を見た。そのうちに、蘭と基樹君が、ふざけだした。菜摘もおもしろがって、二人に混じっていた。その横で、葉一君も、楽しそうに笑っていた。

めずらしいのは、聖君だ。そんな４人とふざけることもしないで、花火をただ、見ていた。だから、二人の間はちょっと離れていたけど、私は、しばらくの間、聖君と二人で並んで、花火を見ることができた。

時々、聖君の方を見ると、こっちはまったく向かずに、空を見上げてて、

「すげ～～」

って、目を細めたり、丸くしたりして、喜んでた。

花火、好きなんだな…。

「これ！柳っていうんだっけか？これが1番綺麗だよね」
突然、話しかけてきた。
「え？え？」
「今の、見なかった？」
聖君が私の方を見て、聞いてきた。
「見たよ。綺麗だった」
私はドキドキしながら、そう答えた。

「小さい頃から、毎年見に来てるけどさ。毎年感動するね、花火」
聖君がそう言った。すごい。私に話しかけているんだ。頭の中が真っ白で、心臓がドキドキで…。
「私は、海岸で見るのは初めて…」
私は、震えるような声しか出なかった。

え…？気がつくと少し合間があいていたのに、すぐ横に聖君はいた。びっくりした。なんで？
「他の場所では見たことあるの？」
と、聖君が、私に聞いてくる。
「う、うん。両親と、みなとみらいで」
「ああ、そっか。あそこも花火やるのか」
「うん…」
ドキドキだった。すぐ横に聖君がいる。

ヒュ～～～～～。
また、花火が上がり、ドンって大きな音を立てた。
「わ、今のもでけ～～！」
私は、つい、聖君の方を見てしまっていた。
「え？俺の方見てもしょうがないじゃん。花火見ようよ。花火」

と言われて、慌てて空の方を見た。

「…あれ？もしかして今のが最後かなあ…」

しばらく待っても、花火はあがらなかった。

「あ～～あ。ほら、最後だったのに、桃子ちゃん、見れなかったでしょ？」

えっ？！ドキン！！

桃子ちゃんって呼ばれて、心臓が飛び出るかと思った。私の名前、覚えてたんだ。

「お～～い、聖！もう花火終わったみたいだぞ！」

基樹君が、だいぶ遠くからそう叫んだ。

「おお！今そっち行くよ」

聖君はそう言うと、さっさと立ち上がり、行ってしまった。

私も慌てて、立って歩いたけど、はきなれない下駄で、鼻緒のところがすれて痛くて、あっという間に、聖君と差がついてしまった。

それどころか、花火が終わったからいっせいに人が動き出し、私の前にいっぱいの人が流れ込んできて、聖君の姿も、他のみんなの姿も見えなくなった。

「あ、あれ？」

どうにか、人混みを抜けようとするけど、なかなか抜けられない。

それどころか、流されて行ってしまう。

「ど、どうしよ…」

みんなと、はぐれちゃうかもしれない。

やっと人混みを抜け出せ、少し広いところに出られたけど、辺りを見回しても、みんなが見当たらなかった。

暗いし、よくわからないし、私はいきなり、不安が押し寄せてきた。

どうしようか…。駅に行った方がいいんだろうか？

その時、携帯がなった。

「もしもし…」

「桃子～～？今どこにいるの？！」

菜摘からだった。

「どこって…。まだ、海岸」

「海岸なの？私たち、歩道の方にいるんだけど…。今、海岸の方、聖君たちが探しに行ってるから、そこで、待っててね」

菜摘はそう言うと、携帯を切った。

ああ、私、みんなを困らせてる。申し訳なさと、会えなかったらどうしようって不安で、その場に私は立ちすくんでいた。

「どうしたの？友達とはぐれた？」

二人連れの男性が、声をかけてきた。

ど、どうしよう…。怖い。

「それとも、家族で来てるのかな？迷子？」

「いえ…。だ、大丈夫です…」

と、言う声が、震えてしまった。

「一緒に探そうか？」

「いえ…。だ、大丈夫…」

「桃子ちゃん！いた！」

振り返ると、聖君が私の方へかけてきていた。

「あ、友達？良かったね、会えて。じゃ」

その二人の男性は、その場を立ち去った。な、なんだ。ほんとに、親切で言ってくれてたのか…。

「何？今のやつら」

聖君が、聞いてきた。

「あ、友達とはぐれたのって聞いてきて、それで、一緒に探してくれるって…」
「駄目だよ、そんなのについていっちゃ！」
「うん。ついていってない」
「はあ…。良かった、見つかって。あ、そうだ。みんなに知らせないと！」
聖君は、いっせいメールで、私が見つかったってメールをした。

「ごめんなさい…」
「え？」
「みんなに迷惑かけて…」
「こっちこそ。俺が、さっさと行っちゃったから…。おいていって、ごめん！」
「そんな…。聖君は悪くない…」
私は、震える声でそう言った。

「とにかく、みんなのところに行こう」
「うん…」
「もう、はぐれないようにしてね。俺についてきて」
「う、うん…」
少しだけ、ゆっくりと聖君は歩いてくれた。でも、鼻緒のところが痛くて、それでも私は遅れてしまう。

「足、痛いの？怪我した？」
聖君は、私が変な歩き方をしているのを、気づいたみたいだ。
「下駄、はきなれてなくて、すれちゃって痛くて…」
「なんだ、そっか。大丈夫？歩ける？」
「大丈夫…」
聖君の声が優しくて、私はすごく嬉しくなって、気持ちがまいあがった。

「じゃ、ゆっくり行こうね」
聖君は、本当にスピードを落として歩いてくれた。私は、痛かったけど、どうにか我慢をして、歩いた。

「あ…」
聖君は、いきなり立ち止まった。
「え？」
「俺がおんぶすればいいのか」
「え？！」
おんぶ？！
「桃子ちゃん、軽そうだし」
「重いよ！」
「そうかな～。俺の妹よりは軽そうだよ」
「駄目、重い」

「じゃ、試しに…」
そう言うと、聖君は、私の前に背中を向けて、かがみこんだ。
「や、駄目。無理！」
私は必死で、顔を横に振った。
「俺じゃ、頼りにならないとか？まあ、基樹に比べたら体格よくないけど、おんぶくらいできるよ」
「そうじゃなくて、浴衣だし、はだけたら嫌だし、駄目！」
「あ…。そっか」
聖君は、体制を直した。

「じゃ、ゆっくり歩こうか。あ、下駄脱いじゃえば？でも、素足じゃあぶないか」
「うん。ゆっくりなら、歩けるから」
ほとんど、ケンケンをしているみたいに、私は歩いた。聖君は、
「じゃ、おんぶは無理でも、肩はつかまれるでしょ？」

と言って、私の手を自分の肩に乗せた。
わ〜〜〜〜！
私は顔が思い切り、熱くなった。掴まれた手も、肩に乗せてる手のひらも、熱くなった。でも、聖君の優しさを無駄にしたら悪いって思って、そのまま肩につかまってケンケンをした。

やっと、みんながいる場所まで、着くことができた。
「どうしたの？怪我？」
菜摘が、心配そうに聞いてきた。
「鼻緒のところがすれちゃって…」
「わ、痛そう！皮向けてるよ！」
蘭が、私の足の指を見て、そう言った。
「私ばんそうこうあるから、貼ってあげる」
菜摘はそう言うと、ばんそうこうを取り出し、貼ってくれた。

「へえ。そういうのいつも、持ち歩いてるの？」
聖君が、菜摘に聞いた。
「うん。私もおっちょこちょいだから、怪我が多くって」
と、菜摘は笑った。
ばんそうこうを何枚も重ねたおかげで、少しさっきよりは痛みがひいた。

そこからみんなで駅に向かい、改札口で、別れた。
別れる時に、私は聖君にお礼を言った。
「さっきは、ありがとう…」
「ああ、全然、全然」
って聖君は、最高の笑顔を見せてくれた。

帰りの電車で、
「良かったね。大接近だったね」

と、菜摘が言ってきた。
「……」
私は、みんなに迷惑をかけてしまったし、何も言えなかった。
「今度は、いよいよ告白する?」
蘭が言ってきた。
「え?無理だよ!」
「無理ってことはないでしょ。告白しなかったら、進展はないよ?」
蘭にそう言われたけど、
「私、絶対にふられるから」
と、私は蘭に言った。
「でもね、さっき桃子がいなくなった時、聖君、すごく慌てて探しに行ったんだよ?」
「それは、きっと、責任感とか、そういうのだよ。先に私をおいて行っちゃったっていう…。聖君も言ってたもん。おいていってごめんって」
「そうかな~~。でも、肩を貸してくれたり、優しかったじゃない」
「あれはきっと、誰に対してもだよ」
「そうかな~~」
蘭はずっと、そうかなって言い続けて、私はずっと、そうだよって言い続けた。
家に帰り、浴衣を脱ぎお風呂に入ると、今日皮がむけたところが、ひりひりとしみた。でも、聖君の優しさや、肩のぬくもりを思い出して、湯船で幸せに浸っていた。
お風呂から出ると、タイミングよく、菜摘が電話をくれた。
「どう?足、大丈夫?」
「うん。お風呂入ったらしみたけど、大丈夫」
「そっか~~」

「うん。ごめんね、みんなに迷惑かけて」
「大丈夫だよ。迷惑なんて思ってないよ」
「うん、ありがとう…」

菜摘は、ちょっとそのあと、言葉をにごしていた。
「どうしたの？」
「いや、あのね…。蘭が帰りに、告白しなよって言ってたでしょ？桃子どうするのかと思って」
「しないよ、告白なんて、できないよ」
「どうして？」
「私、聖君は蘭のことが、好きなんじゃないかって思うんだ。１番話してるし、楽しそうだし」
「あ、桃子も思ってた？」
「え？」
「いや、私もそうかなって…」
「……」
やっぱり、菜摘から見てもそうなんだな。

「あ、わかんないよ！本人に聞いてみるまでは」
「うん…。あ、でもね、私の気持ちは絶対に、聖君には言わないで」
「なんで？」
「だって、絶対なんとも思ってないし…。もし、知られたら、気まずくなるだけだし…」
「でも、言わなかったら、何も始まらないよ？」
「いいの。今の関係さえ壊れるくらいなら、言わないほうがいいの…」
「ほんと？でも…」
「いいの。お願いだから黙っててね」
「わかった」
菜摘とは、それで電話を切った。

聖君は、きっと優しい。あれが私でなく、菜摘でも、同じことをすると思う。

私のことを、好きだからとか、そういうわけじゃない。それどころか、花火を見終わって、さっさと私をおいていってしまったのは、私のことを、そんなに思ってないからだと思った。

もし、好きだったとしたら、私だったら、そばにいることが嬉しくて、あんなにさっさとみんなのところには、行かないだろうし…。見ててわかる。聖君を見てたらわかる。私のことは、なんとも思っていないことを。

それでも、そばにいられる今の関係がいい。告白なんかしたら、そばにすらいられなくなる。このまま、今日みたいに、ちょっとでもいい。聖君と話せて、聖君のことを一つでも多く知ることができたらそれでいい。

私は自分にそう言い聞かせ、ベッドに潜り込んだ。足がまだ、痛んだ。それは少し、胸の痛みとリンクした。

聖君の笑顔を思い出した。その笑顔も、見られたら、それでいい。今日はちょっとだけでも、その笑顔は私に向けられていた。それだけでも、すごいことだ。そう思って、私は、眠りについた。

第3段階　好きな人のために

次の週、蘭からメールが来た。夏が終わる前に一回、またみんなで会おうってなったって。

夏の最後の週の、聖君たちのバイトの休みの日、みんなでまた、海に行くことになり、蘭と菜摘と新百合ヶ丘で待ち合わせをして、電車に乗り込んだ。

「桃子、今日こそ、アタックだよ」

蘭に言われた。

「……」

私が黙っていると、菜摘が、

「もう、夏休みも終わるね。今年最後の海かな。楽しもうよ」

って言った。

「うん」

片瀬江ノ島の駅で、聖君たちは待っていた。6人で合流し、浜辺へと移動した。

「お～！今日は思い切り、泳ぐぞ～～！」

聖君は、浜辺に着くとそう叫んだ。

「じゃ、私たち着替えてくるね」

私たちは、海の家の更衣室に入った。

「なんか、聖君、張り切ってたね」

「一緒に泳ぎなよ～、桃子」

「でも、私泳げないから…」

「あ、じゃあ、浮き輪、借りない？」

「いいよ。いいよ。そんな…」

「借りていこうよ。大き目の。楽しそうじゃん！」

菜摘と蘭とで、浮き輪を借りてしまった。

浜辺に戻ると、葉一君がシートに寝そべってて、残りの二人はいなかった。
「あれ？聖君と基樹は？」
蘭が聞くと、
「泳ぎに行ったっきり」
って、葉一君は答えた。
「葉一君、荷物番？」
「うん。あ、みんな行ってきていいよ」

「じゃ、私が荷物番してるから、葉一君も行って…」
と、私が言うと、
「何言ってるの。なんのために浮き輪を借りたと思ってるの。さ、行くよ！」
と、蘭が強引に、私を引っ張った。
「ごめん、葉一君。もう少ししたら、戻って荷物番変わるね」
菜摘はそう言うと、後ろから私を押した。

浮き輪なんてなんか、恥ずかしい。それにできれば、パーカーも着ていたい。海に入るから水着でいないとならないし…。ああ、海に入っちゃえば見られないか。この貧弱な、うすべったい体。

蘭は私に浮き輪をつけた。そして蘭と菜摘が泳ぎながら、私の浮き輪を押したり引いたりして、沖に連れて行った。
「あ！いたいた。基樹！」
蘭が基樹君を見つけて、さけんだ。
「お～～～！あ、桃子ちゃんも来たの？あ、でかい浮き輪！いいじゃん、それ」
基樹君が、泳ぎながらこっちにやってきた。その後ろから聖君も、泳いできた。

あっという間に私たちに合流すると、蘭と菜摘に、
「もっと沖まで泳ぐの、競争しよう」
って聖君が、言い出した。そして４人で、沖に向かって泳ぎ出した。
私はそのまま、そこに浮いていた。どんどん遠ざかる４人を見ながら。

しばらくすると、また４人は泳いで戻ってきた。そして、
「今度は、浜辺まで競争な！」
と、基樹君が言った。４人が私を追い越して、どんどん浜辺へと泳いでいく。
「あ、追いてかれる」
私も、みんなのあとを追いかけようとしたけど、まったく動かなかった。もがいても、前に進まず、逆に波に流されてしまう。足を一生懸命動かしても、まったく前に進めていなかった。
「ど、どうしよう…」

どんどん４人は、浜辺に向かって行ってしまう。でも、４人の影の中から、一つ、こっちに向かってくる影があった。聖君だ。勢いよく泳いでくる。
そして、私のところまで来ると、浮き輪に腕を乗せて、
「ちょっと、休ませて…」
と、笑った。目の前に聖君の笑顔があって、私はそんな状態なのにドキドキした。
「さ。行くか」
って言うと、浮き輪を持って、浜辺の方に泳ぎ出した。私のために戻ってきてくれたんだ。

「あ、ありがと…」
「え？」

「ありがとう。戻ってきてくれて…」
「いや、この前、失敗しちゃったから」
「え?」
「桃子ちゃん、俺がおいてって、はぐれちゃったからさ。2度とそんなことはしないって、この前思ってさ」
「え?」
聖君は、浜辺の方を向いてそう言った。それからまた、泳ぎ出した。
嬉しかった。ちゃんと大事に思ってくれてるのかな…って思って嬉しかった。

浜辺に戻り、みんなのところに行った。
「ごめんね、桃子、おいてきちゃって」
菜摘がそう言った。
「ううん…。大丈夫」
と言うと、菜摘は、私と聖君にペットボトルを出してくれた。
「はい。聖君、お疲れ様」
菜摘にそう言われて、聖君は、少し照れくさそうに、
「サンキュ」
と、受け取っていた。

それを見てて、私っていつも、聖君に迷惑をかけてしまってるような気がした。何かの役に立ったこともないし、逆に足手まといになっている…。

蘭とトイレに行った時に、私が蘭に、
「やっぱり、私泳ぎに行かないほうが、良かったかな…」
って言うと、
「ええ?そんなことないでしょ。良かったじゃん、聖君と二人で泳げて」

と、蘭がそう言った。

良かったのかな…。いいことなのかな…。聖君と何か話していたわけでもない。私はただ、浮き輪の中に入ってて、その浮き輪を聖君がひっぱって泳いでただけだ。

なんか、私、邪魔なだけのような、気がする。

お昼を海の家で食べ、しばらくのんびりとした。

「やっぱり客で来る方がいいね～」

基樹君が、そんなことを言った。

「ほんとだよな～～」

聖君も、そう言った。

しばらく6人で、話をした。正確には、5人で…。私は1番すみっこにいて、みんなの話を聞いていただけだったから。

そのうちに、

「また、泳ぎに行く?それとも、ビーチボールで遊ぶ?」

と、菜摘が言った。

「泳ぎに行くのは、パス。けっこう疲れた。バレーやろうぜ」

基樹君がそう言って、みんなは海の家を出た。

菜摘が走って、ビーチボールを取りに行った。

「今度は、私が荷物番するから」

と、私が言うと、

「え?大丈夫だよ、このへんでバレーやってたら」

と、聖君が言ってくれた。

3人ずつ別れて、バレーをすることにした。私、聖君、葉一君のチームと、菜摘、蘭、基樹君のチーム。

「そっち、男二人って、ずるくね?」

と、基樹君が言うと、
「いや〜、けっこう、蘭ちゃんと菜摘ちゃんは強いよ」
って、聖君が言った。

私は聖君と、葉一君の後ろにいた。内心、こっちにボールこないでって思いながら。だけど、聖君はボールが飛んでくると、たまに、
「桃子ちゃん！」
って、私に打たせようとする。そのたびに、私は慌てて、ボールを落っことしていた。
そのうちに、私の方に来たボールも、葉一君が取るようにしてくれた。
なんか、また、お荷物だ。私…。
蘭と菜摘は、本当に強くて、どんなボールも拾うし、たまに聖君が拾えないようなボールを、打ってきた。

しばらくして、息もあがってきて、6人で、シートに戻った。水やお茶を飲んでから、
「ゆっくりと泳いでこようか、もう、競争はなしで」
と、聖君が言いだした。
「おお、ぷかぷか浮いてこようぜ」
基樹君も言った。
「あ、私、荷物番するから、葉一君は泳ぎに行って」
私がそう言うと、葉一君は、
「悪い」
って言って、海のほうに向かった。
「じゃ、荷物番、よろしくね。あ、浮き輪持っていい？」
菜摘が、私にそう聞いた。
「いいよ」
菜摘は浮き輪を持つと、みんなのことを追いかけた。

遠くに見える沖のほうで、菜摘が浮き輪をしてて、浮き輪に聖君が、つかまっていた。なんだか楽しそうに笑っているのがわかる。

「……」

それを眺めてて、孤独を感じた。私はいつも、聖君のお荷物にはなるけど、あんなふうに楽しく笑いあうことってないな…。

私、聖君のために、何かしたこともなければ、役に立ったこともない。

自分が情けなくなった…。

肌がちりちりした。足の先まで、バスタオルをかけた。全身太陽の紫外線が当たらないように、私は体をまるめていた。

なんだか、寂しいな。周りにいる人が、すごく楽しそうにしてて、それを見ていると、ますます私は落ち込んでいった。ああ、今日も、地球の裏側まで落ち込んじゃうんだろうか。

だいぶたってから、5人は戻ってきた。

「大丈夫?」

葉一君が、私に声をかけた。

「え?」

「肌だよ。弱いんでしょ?日焼け止めとか塗った?」

「家で塗ってきたけど」

「海に入って、取れたんじゃない?」

「でも、パーカー着てバスタオル巻いてたから…」

「そう」

葉一君は、何気に心配してくれるんだな。他のみんなが気づかないことを、気づいてくれる。

「海の家で休まない?あそこなら、日に当たらないでしょ?」

聖君がそう、言ってくれた。

それから、6人で、海の家に移動した。

「腹減った～。なんか食おう」
基樹君がそう言って、みんなでそれぞれ注文をしに行った。

私は、椅子にこしかけたままでいた。
「あれ？なんも食べないの？」
基樹君が聞いてきた。
「うん。お腹空いてないし」
「そう。小食だね。もっと食べないと大きくなれないよ～」
と、笑われた。あははってそれを聞いて、聖君も笑ってた。
聖君が笑ってくれたのは、嬉しい。でも、大きくなれないっていうのは傷ついたから、私は複雑だった。
聖君には、どう私は写っているのだろう？

5時を過ぎて、帰り支度をして、私たちは駅に向かった。駅に着くと、
「もう、夏休みもおしまいだね」
と、蘭が言った。
「9月になっても、遊びに来たら？」
聖君が、そう言ってきた。
「海に？」
蘭が聞くと、
「海でもいいし…。あ、俺んちに来たら？」
「聖君ち？」
菜摘が聞いた。

「うん、俺んちカフェしてるんだ」
「え～？そうなの？！行きたい、行きたい！」
菜摘が喜んだ。
「じゃ、9月になったら、来ようよ。ね」
菜摘が、私と蘭に言った。

「また、メールするよ」
聖君は、菜摘にそう言った。
「うん！そんとき日にちとか、決めよう」

それを聞いてて、また、羨ましくなっている私がいる。菜摘も、蘭も、聖君と普通にメールしたりしてるんだろうな。
私は、アドレスを知っても、一回もメールをしたこともなければ、きたこともなかった。

私たちは、改札を通り、改札口の向こう側で、手を振っている3人に手を振り、電車に乗った。
「あ～～～。疲れた。でも楽しかったね」
蘭が言った。
「桃子も、けっこう聖君としゃべって、接近できたんじゃない？」
と、蘭は私に言ってきた。
「え？どうかな…」
私は口ごもった。

「聖君の家のお店か～～。楽しみだね」
菜摘が言った。
「うん」
また、会えるのは嬉しかった。でも、どこかで、私は寂しさも感じていた。

第4段階　好きな人の苦しみを知る

聖君の家に行く日がやってきた。私は、どんな服を着ていくかとか、前の日から悩んでいた。ドキドキもしたし、不安もあった。

私は、聖君の前で、もっと自然に話が出来ないかなとか、菜摘や、蘭みたいに、話がしたいなとか、そんなことを思うようになっていた。

だけど、それが出来そうもないこともわかっていて、私は、また落ち込んだりしないか、それが不安だった。

ところが、朝、いきなりお母さんが私の部屋にやってきて、

「悪いけど桃子。今日おばあちゃんのところに行ってくれない？」

と、言ってきた。

「え？なんで？」

「おばあちゃん、ぎっくり腰になって、動けないんだって。おじいちゃん、仕事休めないし、お母さんも今日、お客さんはいってるし…」

おじいちゃんは、絵の先生をしてて、お母さんはエステを家でしている。

「桃子、行って、いろいろとおばあちゃんのお世話してくれない？他にいないのよ。お父さんは出張中だし」

「うん、わかったよ…」

断れるわけがなかった。

「ありがとうね。よろしく頼むわ」

私はおばちゃんっこだ。お母さんは私が、幼稚園の時からエステの仕事をしてて、おばあちゃんの家に、よく預けられていた。

とても優しくて、私はおばあちゃんが大好きだった。そんなおばあちゃんをほっておいて、聖君の家には行けないって思った。

すぐに、
＞ごめん。用事が入って、今日はいけない。
と、菜摘にメールをした。菜摘は、
＞せっかく聖君に会えるのに、その用事どうにかならないの？
って、メールをよこした。
＞ごめん。大事なおばあちゃんのお見舞いだから。
そうメールをすると、菜摘からわかったってメールが返ってきた。

正直、会いたかった。でも、少し、ほっともした。
でも、やっぱり、聖君のことを思い出すと、あの笑顔が見たいな、
声が聞きたいって悲しくなった。

夜、菜摘から電話があった。
「行って来たよ。一人になっちゃったけど」
「え？なんで？」
「蘭ね、今日基樹君と二人で会いたいけど、いいかなって朝メールがきて…」
「二人で？」
「うん、付き合ってるんだって」
「え？！」

「聖君に、菜摘も蘭も行けなくなったから、一人になっちゃったけどってメールしたら、菜摘ちゃん一人でも待ってるよってメールくれたから、一人で行って来たよ」
「そ、そうだったんだ」
「うん。あ、でもね、聖君に蘭のこと好きだったのか聞いたら、違うって言ってた」
「え？」
「良かったね」

「……。うん」

「今度一緒に行こうよ。二人で。それとも、桃子一人で行ってくる？」

「私が一人で？無理、絶対無理」

「でも、積極的にアタックしてみたら？蘭も言ってたよ。蘭から付き合ってって言ったんだって。そのくらいにしないと、なかなかこっちの気持ちになんて、気づいてくれないってさ」

「え？」

「ちょっとは、聖君を好きなんだってこと、アピールしないと。そうしたら、聖君も桃子のこと、意識するようになるって」

「いいよ。そんなの…。きっと、好きだなんてわかったら、迷惑だよ。聖君困っちゃうよ。優しいし、絶対困っちゃうよ」

「そうかな～。桃子みたいな可愛い子から、好かれてるってわかったら、意識すると思うけどな」

「そんなことないって」

「まあ、とにかくさ。今度は二人で行こう。お店も可愛かったし、お母さんもすごく優しそうなお母さんだった。あ、そうだ。うちの親と、同じ会社に勤めてたんだって。びっくりしちゃった」

「そうなんだ」

「うん、行こうね。絶対」

「うん」

菜摘は、じゃあねって電話を切った。

一人で行けちゃうなんて、すごいな。あ、そうか。菜摘は別に、聖君のこと意識してるわけじゃないもんね。

でも、やっぱり今日、聖君と二人だったのが、羨ましく思えた。自分じゃ絶対に出来ないことなのにね。

アピールすることも出来ない。告白も出来ない。なのに、菜摘を

羨ましがってる。なんか情けないな。本当に…。

蘭は、積極的だな。でも、蘭みたいな子だったら、告白されたら絶対に嬉しいよね。

ああ、また落ち込む。私は私のことを、どうしてこう、下げているのか。わざわざ落ち込むようなことを、考えちゃうんだろうか。

この前の海で、携帯で菜摘が撮った、聖君と基樹君の写真を、菜摘は、送ってくれていた。それを見ながら、私は、は～～ってため息をついた。

いつの日か、この横にいるのが、私になったりしないだろうか…。

そんな来る筈もない未来を、夢見たりした。

ハッピーエンドになる恋、両思いになる恋って、すごいな。本当にすごいな。好きな人に、好きになってもらえるって、どれだけ幸せなことだろうか。

そんなことを思いながら、私はずっとずっと、聖君の写真を眺めていた。

2日後、学校で菜摘が、蘭のいない時に、

「今度、蘭と基樹君をひやかす会をするのを、聖君と葉君とで、たくらんでるんだ」

と、言ってきた。蘭も、菜摘も葉一君のことを、葉君と呼ぶようになっていた。

「ひやかす会？」

「新百合まで出て来るって。それでカラオケに行って、二人にデュエット歌わせたりして、盛り上がろうって」

「カラオケ？」

私は、音痴だからカラオケも苦手だ。

「ああ、大丈夫。桃子は歌わないでも大丈夫だよ。だって、蘭と基樹君に歌わせるんだもん」

「あ、そっか…」
3人でカラオケに行っても、私は聞く専門。二人はけして私に歌えって無理強いをしないのが、いつもありがたかった。カラオケボックスに行くのは好き。ドリンクはフリーだし、最近の流行の歌を歌ってくれるので、楽しい。

「でも、聖君とは、話をするんだよ。少し、自分が聖君のことを好きなんだってことも、アピールするんだよ」
と、菜摘に言われてしまった。
「…できるかな」
「大丈夫。私は、葉君と話をするようにするから、桃子は、聖君とだよ」
「……」
そんな〜って心の中で思ったけど、でも、なんとか話したい、近づけるようになりたいとも思っていた。聖君の家に行けなかったのも、やっぱり後悔したし。もっと好きな人のことを知りたいって、思っていたし…。

みんなでカラオケに行く日がやってきた。新百合で待っていると、3人が来た。菜摘が、3人に手を振って、出迎えた。
基樹君と蘭には、二人をひやかす会だということは、内緒にしてたけど、二人はさっさと、二人の世界を作り、二人で仲よさそうに並んで、歩き出した。
菜摘は、葉君の隣に行き、私に軽く目で合図をした。そして、葉君と歩き出した。

私と、聖君は、4人の後ろをとぼとぼと歩いた。聖君はいつもなら、蘭や基樹君と一緒になって笑ってるんだけど、今日はどうやら、二人に遠慮をしているようだった。
私は、聖君からちょっと離れて歩いた。でも、何か話しかけない

と悪いよなって思って、一生懸命話しかける内容や、タイミングを考えていた。

「この前、菜摘ちゃんがうちの店に来た時、用事が入っちゃったんだって？」

といきなり、聖君の方から話しかけられ、

「え？！」

って、ものすごく驚いてしまった。

そして、おばあちゃんがぎっくり腰になり、お見舞いと手伝いに行っていたことを話した。

しばらく話しながら歩いていたら、すぐ横に聖君が来ていることに、気がついた。それに、私が話をすると、ちょっと耳を近づけてくることにも気がついた。

ああ、私、声小さいんだ。でも、聖君はそれを指摘もしないで、聞こえるように耳を近づけてくれてたんだな…。

聖君の、ちょっとした仕草で、優しさがわかる。

聖君と話をしていると、時々目が合った。そのたびに、私の顔は熱くなった。そして、下を向いてしまった。

ああ。情けないな…。こういう時に、明るく笑ったり出来ない…。下ばっかり向いてるし、声は小さいし、気の利いた話も出来ないし、聖君は、どう思うんだろうか。

カラオケボックスに入った。１番奥の席に、基樹君と蘭を座らせた。その横に菜摘が。聖君は、その横に行くのかなと思っていると、葉君を座らせていた。

「俺、ドアの付近の方が落ち着く」

と、言って…。

葉君の隣に私が座り、私の横に聖君が座った。菜摘は、いきなり二人にデュエットを歌わせ、盛り上げ始めた。葉君も、いつもは静かだが、今日はめずらしくさわいでいた。

それに比べて、1番おおはしゃぎをしそうな聖君が、今日は大人しかった。ちょこんと端っこに座ったまま、あまり話すこともなく、はしゃぐこともなく、歌うわけでもなく…。

でも、時々私に話しかけてきていた。

…どうしたんだろう?蘭と基樹君を、ひやかすんじゃなかったのかな?

「俺、トイレ」

途中で、聖君が席を立った。

「あ、俺も。ちょっと前ごめんね」

葉君も、席を立った。両隣が空き、私は今がチャンスと、グラスを持ち、一階にあるドリンクバーに行こうと、部屋を出た。

階段を下りようとしたら、トイレの前で二人が話をしていた。それを聞くつもりはなかった。でも、大きな声で話しているから、聞こえてしまった。

「お前、菜摘ちゃんが好きなんだろ?」

葉君が、聖君に怒っていた。

え・・・?菜摘…?!

蘭じゃなくって、…菜摘?!

「桃子ちゃんがお前に気があるって知って、いい気になってるのかよ?」

葉君は、さらに、聖君を問い詰めていた。

え……?

血の気も引いた。なんで?私の気持ち、気づいてるの…?!

駄目だ。思考回路が真っ白だ。ああ…。立ち聞きしてるのがばれたら大変だ。ここを早く、どかなくちゃ！

でも、遅かった。聖君が私を見た。目が合った。

大変だ…。聞いちゃいけないことだったかもしれない。

私は慌てて、一階に下りて、グラスをバーカウンターに置き、聖君に見つからないよう、外に出た。

何？私、何を聞いちゃったの？菜摘のことを、聖君が好きで、私が聖君のことを好きなのを知ってて…。

えっと、まだ、他にも葉君は言ってた。なんだっけ？ああ、そうだ。

「お前、菜摘ちゃんのこと、もう、あきらめるのかよ」

…そうだ。菜摘は私の応援をしてくれてるだけで、私が聖君のことを好きじゃなかったら、聖君と菜摘は、付き合えるのかもしれないんだ。

ドアを開けて、聖君が出てきた。立ち去ろうとすると、

「あの…」

と、聖君に腕を掴まれた。

「離して」

と言っても、離してくれない。

「あのさ…。今の話聞いちゃったよね」

嘘がつけなくて、こくってうなづいた。

「菜摘ちゃんには、言わないでくれる？」

え？なんで…？

「菜摘、聖君は、蘭が好きなんじゃないかって、この前まで思ってたよ？」

「それ、聞いた」

聖君が、そう静かに言った。
「じゃ、菜摘は、聖君が菜摘のことを好きだなんて、思ったりもしないよ？」
「だろうね」
「私のために、私と聖君がくっつくのを、お膳立てしようとしてるよ？」
「そんなようなニュアンスのことも、この前聞いた」

「ばらしちゃったの？菜摘」
「いや、はっきりとは言ってないけど、なんとなく」
「だって、菜摘のこと好きなんでしょ？どうしてその時に言わないの？言わなきゃ菜摘、気づかないよ？」

私は、どうしてこうも、すらすらと聖君に話しているのか、わからなかった。でも、きっと必死だった。菜摘をあきらめようとする必要なんかないのに、あきらめようとしている聖君のために、私は必死になってたと思う。

「菜摘、聖君のこと、嫌いじゃないよ。でも、私の気持ち知ってるから、私と聖君をくっつけようとしているだけで」
「まいったな…」
「え？」
しばらく聖君は、黙ってしまった。そして、深くため息をした。どうしたんだろう？私は余計なことを言っているのだろうか。

「あ、ごめん、腕掴んだままだったね。痛くなかった？」
ああ、そんなことも私は、忘れていた。
「ううん」
「あのさ…。ちょっと、こっち…、いい？」
聖君は、駐車場の奥へと、私を連れて行った。

「こんなこと言っても、信じるかどうかわかんないけど」
「…うん？」
「この前、菜摘ちゃんがうちの店に来て、母さんと会ってわかったんだ。菜摘ちゃんのお父さん、俺の本当の父親なんだよ」
……え？！
「…どういうこと？！」

「今の父さんに出会う前に、母さんが付き合ってた人で…。詳しくはわかんないけど、別れてから、俺の父さんと出会って、でもその時にはもう、俺、お腹の中にいたみたいなんだ」
「……」
「今の父さんとは、血がつながってない。俺の血のつながってる父さんは、菜摘ちゃんの父親なんだ。あ、もちろん、菜摘ちゃんはそれを知らない」
「……。そんな…。だって、聖君、菜摘のこと」

「うん。でも、それ知ったの、菜摘ちゃんが俺のこと、なんとも思ってないって知ったあとだから」
「え？」
「それって失恋ってことじゃん？まだ、救われるよね。もし、両思いだったりしたら、悲劇だよ」
「でも…」
「だから、俺が菜摘ちゃんを好きだったってことは、黙ってて」

……。じゃあ、じゃあ、聖君の気持ちはどうなるの？
私は、胸が苦しくなった。自分の好きな人が、妹だって知ったら…。もし、もし聖君が、兄だったなんて知ったら、私、耐えられない…、きっと。
「聖君は、辛くないの？」

辛いに決まってる。何を私は聞いているんだろう。

「大丈夫、なんとか、大丈夫だから」

「ほんとに？」

私は、涙が出ていた。でも、そんなの気にしてる場合じゃなかった。

「俺、どっちかって言うと、父さんと血がつながってないことの方が、ショックで…」

そうか…。それも初めて、わかったことなんだ。

「俺、父さんと仲良くて、だから、なんかショックだった」

「お父さんのこと、好きなんだね」

「え？」

「好きなんだね。だから、ショックなんだね」

ああ、私また、何を言ってるんだろう。でも、瞬間、そんなことを感じたんだ。

「そりゃ、まあ」

少し聖君は、黙ってたけど、

「尊敬もしてるし、俺、父さんの考え方とか、生き方とか全部好きでさ。自慢の父親だったんだ。父さんだけじゃなくて、父さんの両親とか兄弟とか、みんな好きでさ」

と、落ち着いた感じで、話してくれた。

「……」

素敵な、あったかい家族なんだ。

「だから、余計悲しかったのかな」

そうだよね。私だって、お父さんが大好きで、もし血がつながってないなんて知ったら…。

「私も、お父さんのことが大好き。もし、血がつながってないって

わかったら、やっぱりショックだな。だから、なんとなくわかる気がするな」

私がそう言うと、聖君は、黙っていた。

「これ、誰にも言わないね。こんな話、私なんかにさせちゃって、ごめんね」

「え？」

「本当は、この話、したくなかったでしょ？」

「……。うん…。誰にもするつもりなかった」

「ごめんね…」

私が偶然、聖君と葉君の話を聞かなかったら、聖君は、私に話をすることは、なかったんだろうな。

「いいよ。黙っててくれたらそれで」

と、聖くんは言った。

でも、私はその時、考えてた。私に出来ることってあるのかな。何か、聖君の役に立てることあるのかなって。

部屋には、別々に戻った。菜摘が、二人で何処に行ってたの？ってひやかした。聖君は、笑っているけど、心では苦しんでいるんじゃないのかな。

今日だって、来るの辛かったんじゃないのかな。

ああ、そうか。だから、今日はこんなに静かで、いつもと違っていたんだ。

そういうのも、全部わかってきて、私はさらに胸が痛んだ。

聖君の今の、辛い気持ちを考えると、私には、何が出来るのかな、何が出来るんだろう…。そんなことばかりが頭をぐるぐるした。

いつも足手まといで、お荷物の私でも、聖君の役に立てること、あるのかな？

帰りに菜摘が、明るく、お母さんとお父さんが聖君のお家に行きたがってたと、聖君に言ってて、私は聖君が困った顔をしているのに、気がついた。
「聖君ちのお店に、今度行きたい！」
とっさに、私はそう言っていた。
そして、菜摘の腕を掴んで、さっさと聖君たちと、別れてしまった。

聖君たちと、別れたあと、菜摘が、
「どうしたの？いきなり、お店に行きたいなんて、あんなにはっきりと言うとは、思わなかったよ」
と、言ってきた。
「え？うん。だって、この前行けなかったから」
「そうだけど。もしかして、今日、聖君と何かあった？」
「な、何もないって。ただ、菜摘言ってたでしょ。アピールしないと駄目だって。だから、頑張って…」

「そっか～。うん。頑張ってよ。じゃ、明日行かない？暇でしょ？こういうのは、早くに行動した方がいいんだよ」
「え？」
「私から聖君には、電話しとくから」
「でも…」
電話…？
「じゃあね。ここでね。私、買い物があるから」
菜摘はそう言うと、さっさとお店の中に入っていってしまった。

良かったのかな。聖君、大丈夫なのかな。菜摘と電話したり、会ったりするの、辛くないのかな。
私は、明日もできるだけ、聖君が辛くならないよう、頑張ろうっ

て思った。そして、聖君の辛さを思うと、その日の夜は眠れなかった。

第5段階　好きな人に近づく

菜摘と、新百合ヶ丘で待ち合わせをした。私はいろんな思いが交差して、複雑だった。電車に乗っている間、菜摘はずっと、今日も聖君とたくさん話すんだよって私に言った。

駅に着き、店に向かった。

お店は、洋館風の素敵な建物だった。ドアを開けると、すでにそこには聖君と葉一君がいた。

「こんにちは～～！」

菜摘は元気に入っていった。聖君のお母さんがいた。綺麗で、優しそうな人だ。ちょっと、聖君に似ている。

それから、お父さんもお店に現れた。まだ、若い感じの、素敵な人だ。

聖君が、私と菜摘ちゃんを紹介してくれた。

聖君のお父さんも、お母さんも、菜摘が聖君の妹なんだってこと、知ってるんだよね…。

聖君は、いきなり、

「今日は俺、桃子ちゃんと二人で、水族館に行きたいんだけど。別行動してくれない？」

と、言い出した。

「え？！」

突然で、私はびっくりした。菜摘も驚いていた。

「とりあえず、４人で、行かない？」

と、葉一君が言ったけど、それでも、聖君は、二人で行動させてと言い張った。ああ、菜摘といるのが辛いのかもしれないし、そうやって、菜摘をわざと遠ざけようとしているのかもしれない。

「私も、そうしてくれると嬉しい」
精一杯だった。それだけは、どうにか言えたけど、なんだか菜摘の顔は見れなかった。
聖君は、私の手をとって、さっさと歩き出した。お店を出て、早足で歩く。私は、必死で早歩きで、（ほとんど走ってたかな）あとをついていった。

しばらく歩いたところで、聖君は手を離して、
「ごめん」
って言った。それから、ゆっくりと歩き出した。
「水族館、本当に行くの？」
私は、聖君に聞いた。
「え？行くよ。なんで？」
「だって、演技だったんでしょ？だったら、もういいかも…」
「え？何が？」
聖君は、不思議そうな顔をした。

「菜摘、もう疑わないよ。私と聖君が、付き合ってるって思ってると思うよ。それが狙いだよね？」
「……」
「それとも、私へただったかな。演技してるのばれちゃったかな」
「……」
聖君はしばらく真剣な顔で、黙っていた。何を考えているのだろう…。

「桃子ちゃんってあれだ」
いきなり聖くんは、私の顔をまじまじと見て、言ってきた。
「小型犬に、似てる…」
え、え～～～～～っ？！何、それ…。
「マルチーズとか、チワワとか」

小さいから～～？

「小さいから？」
と、聞いてみると、
「うん、っていうか雰囲気も。なんかおどおどしてて、目も丸くて」
って、言われた。
「おどおど…？してるかな、やっぱり」
「あ、悪い意味じゃないよ」
「……」

思い切り、落ち込んだ。でも、的を得てるし、私って聖君から見たら、おどおどしているように見えるんだ。
なんだか、蘭や、菜摘とは大違いだ。
「悪い。その…」
聖君が、困ったように言った。
「菜摘みたいに、どうどうとしたいっていつも、思ってるんだ」
「え？」
「でも、なかなかできなくて…」
私がそう言うと、聖君は、黙り込んだ。

そして、
「水族館行こうよ」
って明るく、言った。それから、私の手を取り、ゆっくりと歩き出した。
ドキドキだった。
きっと、私が落ち込んじゃったから、そう言ってくれたんだ。元気づけようとしてくれてるんだ。
ああ、私が聖君を、元気づけなくちゃいけないのに。

聖君は、水族館についても、

「はぐれないように、手、つないどく？」
って聞いてきた。私は、嬉しいのと恥ずかしいので、顔があげられず、こくって小さくうなづいた。
いいって断った方が良かったのかなとも思ったけど、でも、なんだか、断るのも気がひけたし…。
聖君の手は、大きくてあったかくて、安心した。

水族館を回った。聖君は静かだった。蘭や菜摘となら、おおはしゃぎをしたり、笑ったりしながら回るだろうに、すごく静かに水槽を見ていた。
時々、視線を感じて、顔を上げると、目をそらされた。
あんまり楽しくないのかな…。それとも、菜摘のことで、まだ落ちこんでいるのかな。もっと、私が盛り上げないといけないかな…。

聖君は、ずっと手は、つないでいてくれた。ほんの少し私の前を歩いて、私が水槽の前で止まると、横から、ちょこっと話をしてくる。でも、聖君は、あとはなんだかだんまりで…。
なるべく、魚やイルカを見て、私は喜んだ。聖君も元気になってくれたらいいな。一緒に笑って、見てくれたらいいな…。そう思いながら。

水族館を出たのは、1時半を回っている頃。
「お腹空いたね。どっかで食べない？」
聖君が言ってきた。
「うん…」
「でも、この辺、混んでそうだな。ちょっと歩くけど、もう少しすいてるところに行かない？」
「え、うん…」

私は、聖君のあとをついていった。もう、聖君とは手をつないで

いなかった。聖君は両手を軽く、ジーンズのポッケに入れている。
まさか、手をつなぎたいとも言えず、そのまま後ろを歩いていった。

「ここ。海も見えるよ」
お店に入ると、眼下に海が広がっていた。
「わあ…」
海の見えるテーブルにつき、私は海を眺めた。

「水族館、満足した？」
聖君が聞いてきた。
「うん、とっても。ありがとう。楽しかった」
でも、そう思うと同時に、寂しさも出てきて、私は下を向いていた。
「本当に？」
聖君が、不思議そうに聞いた。
「え？うん」

「でも、なんか、寂しげだよ。ほんとは、みんなで回りたかった…、とか？」
「ち、違う」
私は慌てて、顔を横に振った。
「ただ…」
「うん」
「これで、もう、聖君とも会えないのかなって思ったら、なんか…」
「へ？」
聖君を見ると、また、不思議そうな顔をしている。

「なんか、寂しいなって…」
そう言うと、聖君は少し、困った顔をした。
「ごめんね、こんなこと言ったら、困らせるよね」

「…え？なんで？」
「なんでって、だって…。もう、なんの接点もないし。なのに、私がこんなこと言ったら、聖君、優しいから困っちゃうでしょ？」
「……」
また、聖君は、顔をしかめた。
「……。今日は、いい思い出になった。ありがとう。忘れないね、私…」
「えっと…。接点がなくなるって、どういうこと？」
聖君が、聞いてきた。
「だって、もう会う必要もないし」
「え？なんで？これからだって、６人でまた会えばいいじゃん？」
「でも、でも、聖君、今日も菜摘と一緒にいるの、辛そうだった。本当は会うのも、辛いんじゃないの？」
「う…うん」
やっぱり…。
「そうだよね…。まだ、好きだよね」
「……」
聖君は、黙ってしまい、下を向いた。
もう、お別れなんだよね。だって、会う意味がない…。私はそう思うと、涙が溢れてきて、慌ててハンカチを取り出し、拭いた。
「じゃ、二人で会えばいいじゃん」
「え？」
「俺と、二人で」
聖君、無理してる？私が泣いたりしたから？
「ううん。いいの…」
「え？」
「そんな、私のためにしてくれなくてもいいよ。悪いもの…」

「いや、でもさ…。これもなんかの縁だし、そんないきなり、さよならってしなくっても、いいんじゃね？」
「え？」
「俺もそのうち、菜摘ちゃんに会っても、なんとも思わなくなるかもしれないし」
「でも…」
いいんだろうか…。私が聖君と会っててても…。

「それに！言っとくけどさ、乗りかかった船だよ。もう降りるつもり？」
「え？」
乗りかかった船って？
「俺が、傷ついてるの助けてくれようとしたんでしょ？今日もさ」
「…うん」
「じゃ、こんな中途半端で、投げ出さないでよ」
「投げ出す…って？」

「一応ね、俺、まだ傷ついてる最中だし。その…。俺と父さんのこと知ってるのは、桃子ちゃんだけだし、他に相談する相手もいないんだよ？俺」
「そっか…。そうだよね」
そうだ…。私しか知らないんだった。聖君の辛さや、悩み…。
「でも、私でいいのかな」
「いいも何も、桃子ちゃんしか知らないことだし」
「でも、それ、しかたなく話したことでしょ？」
「う…」

聖君が、困っている。
「だ、だとしても…」

困ってる。なのに、ここで私、投げ出すなんて、できないよ。
「ごめん。わかった。私、相談に乗る。途中で投げださない」
「……」
「私が、なんの役に立てるかわからないけど…。でも、何かの役に立てるなら嬉しいし」
そうだ。私、本当に聖君の役に立ちたいもの。

「うん…。思い切り、役に立ってると思う。もうすでに」
聖君がそう言った。
「ほんと？」
本当に…？
「ほんと！」
聖君が、力強くそう答えた。
「…。良かった」
嬉しい。もう、役に立ててるの？私。今日も、何もできなかったけど、少しでも役に立てたの？

聖君を見ると、窓のほうを向いて、海を眺めていた。
「ああ、海、綺麗だな…」
私も海を見た。本当に綺麗だった。
ご飯を食べ終わり、お店を出て、海沿いの道を歩いた。その時も聖君は、静かだった。聖君は、海のほうを見て、まぶしそうな顔をしながら、歩いていた。

私はその少し後ろを歩いた。時々聖君の顔を見て、その表情を見て、また、下を向いて歩く…。何か話さなくちゃって思っても、何も浮かばず、そのまましばらく、黙って歩いていた。
「あ、とんび」
聖君の声で、私も顔を上げた。大きなとんびが、浜辺の上を旋回していた。

「俺、子供の頃、浜辺でハンバーガー取られたことある」
「え？」
「すげえ、怖かった。いきなりびゅって飛んできて、ハンバーガーだけ取って行った。友達とマックで買って、浜辺で食べようとしてたんだ。よく、父さんや母さんから、とんびは怖いよって聞かされてたけど、まさかな。手に持ってるのをくわえていくとは思わなかったよ。カラスより、怖いしでかいんだよね」
「そうなんだ」
「うん、だから、桃子ちゃんも気をつけたほうがいいよ。浜辺で何か食べないようにね」
「うん…」

「とんびに油揚げさらわれたって、あれ、本当にありそうだよね」
「？」
「あ、でも、あれは、比喩ってやつか」
「・・・・・。」
「例えばさ、俺がぼ～～ってしてる間に、てんで知らないやつに、好きな子持ってかれちゃうみたいな…。あれ？ちょっと違う？」
「え？うん、そんなようなことだと思う」
「だよね？」
「うん」

「じゃ、気づけて良かったって事か」
「え？何？」
「あ、なんでもないっす」
「？」
「とんびに油揚げ、さらわれないようにしておこうって話」
「え？何それ？」
「あはは…。意味不明？」

「うん」
聖君は、しばらく笑って、また黙って歩き出した。ゆっくりと、私の歩く早さにあわせて。

駅について、
「今日はサンキュー」
と、聖君は両手をジーンズのポッケにつっこんだまま、軽くお辞儀をした。
「あ、うん。こちらこそ」
私も、軽くお辞儀をした。
「じゃね。またね」
聖君は、右手だけポッケから出し、手を振った。
「うん。またね」
私はそう言うと、改札口を通り抜けた。

ホームの方に行ってから、振り返った。もう、聖君は、いないだろうなって思いながら。でもまだ、改札の向こうに立っていた。そして私を見て、手を振った。
私も、聖君に手を振った。でも、なんだかすごく照れくさかった。

電車に乗って、考えた。「またね」のまたっていうのは、いつなんだろうか…。
私から会おうって、誘うのなんて出来そうもない。また、聖君の方から、誘ってくれない限り。
でも、誘ってくれることは、あるんだろうか。メールや電話が聖君から、来ることなんてあるんだろうか…。

そう思うと、なんだかもう聖君に会うのが、最後だったように感じてきて、ああ、今、もっとよく聖君を見ていたら良かった…って後悔した。

電車はもう、動き出していた。窓から改札口のほうを見たけどもう、改札口すら、見えなくなっていた。

第6段階　好きな人からの頼みごと

その日、夜に菜摘から電話があった。
「急接近どころじゃないね。どうしたの?カラオケで、やっぱりいなくなった時、二人で何か話したの?」
と、菜摘が聞いてきた。
「ううん」
どう嘘をついていいか、わからなかった。
「じゃ、なんでいきなり聖君、二人で行動したいなんて、言いだしたのかな?」
「わからない…」

「…水族館行ったの?」
「うん」
「良かったね、デートじゃん」
「え?デートじゃないよ」
「なんで?りっぱなデートだよ」
「菜摘は?葉君と水族館…」
「行かなかったよ。海見て、ご飯食べて、帰ってきた」
「そうなの…」
「うん。なんか、二人だけじゃ、つまらなくなっちゃって…。あ～～あ、みんなカップルになっちゃうんだもん」

「……」
「私も、こうなったら、葉君と付き合っちゃおうかな～～!なんてね。葉君が嫌がるかな」
「わ、わかんないよ。葉君、意外と菜摘のこと」
「あ、いいよ。そういうこと言わなくても。じゃ、また月曜学校でね!」

「うん、おやすみ」
なんだか、菜摘明るくしてたけど、どっか無理してるみたいだったな。

翌日、お母さんが、買い物に行かないかって誘ってきて、妹のひまわりと3人で出かけた。ひまわりは私よりも背が高く、元気で明るい。菜摘みたいな性格だ。なんで姉妹でこうも、違うんだろう。
お母さんも、背がすらってしている。どうやら、私は、隔世遺伝でおばあちゃんに似ちゃったらしい。

買い物から帰り、家族でご飯を食べ部屋に行き、少し勉強をしていると、携帯がなった。着信を見たら、聖くんだった。
え?!慌てて、電話に出た。聖君から電話があるなんて、思ってもみなかった。
「もしもし…」
「桃子ちゃん?今、いいかな…」
「うん。大丈夫…」

なんか声が深刻な感じだ。もしかして、菜摘のことかな…。
「あのさ…。今まで葉一といたんだけど、ちょっと、ややこしいことになっちゃってさ。その…」
「菜摘のこと?」
「うん。今日、葉一、菜摘ちゃんに、会いに行ったらしくて」
「え?」
「あいつさ、菜摘ちゃんのことが好きなんだよ。この前白状した。俺に遠慮してて、今まで黙ってたらしい。それで、今日、こくってきたってさ」
「菜摘に?」
「うん。でも、菜摘ちゃんに、好きな人がいるって言われたって…」

「菜摘に、好きな人？だ、誰かな…」
「桃子ちゃんも、知らなかったよね」
「うん、菜摘、何もそういう話、しなかったし」
「……。俺なんだって」
「え？」
……ええっ？！
「菜摘が？聖君のこと？」
「うん」

「じゃ、私に遠慮して、ずっと…」
「いいんだ。それは…。それより、ちゃんと俺のこと、あきらめてくれないと困るんだ」
「え？あ…。そうだよね」
「あのさ…。変なことお願いするけどさ」
「え？」
「6人で会ったら、俺と付き合ってるって言って。それで、仲いいふりして」
「…うん」
うんって言ったけど、私どうやって、仲いいふり…。

「ど、どんなふうにしたら、仲よく見えるかな？」
聖君に、聞いてみた。
「え？」
「私、どうしたら…」
「あ、ああ。そうだな」
「うん」
「普通でいいや」
「え？」
「普通にしててていいよ。でも、なるべく俺のそばにいて」
「…うん」

「変なこと言ってるよね、俺。ごめんね」
「ううん。全然」
「じゃ、えっと、多分会うのは、来週の週末かな」
「うん、わかった」
「学校で、会うんだよね？菜摘ちゃんに」
「ん。大丈夫。何も聞いていないふりするから」
「ごめんね、なんか、嘘ばっかりつかせてるね」
「いいよ。大丈夫」
そう言うと、聖君は電話を切った。なんだか、聖君、すごく申し分けなさそうだった。

不安がよぎる。菜摘を騙しているみたいで、罪悪感も出てくる。でも、それでも、私は聖君のために、何かできるなら、それでいいって思った。役に立てるのであれば…。電話をかけてきてくれたことも、私を頼ってくれたことも嬉しかった。
しばらくは、聖くんの声がしていた携帯を握り締めていた。
聖君が、今、悩んだり、辛い思いをしているかもしれないのに、不謹慎だよね…、そんなことを思いながらも。

そうだった。菜摘…。菜摘が聖君を好きだなんて、全然気づかなかった。私のために、ずっと、聖君が好きだったこと、黙っていたんだ。ずっと…。
胸が痛んだ。聖君とは、両思いだったんだ。
聖君だって、好きな子が自分を好きでいてくれて、本当だったら嬉しいことのはず。なのに、血のつながった妹なんだもん。絶対に、受け入れられるわけがなく、それってすごく、辛いことなんじゃないのかな…。

ぎゅ〜〜。聖君の思いも、菜摘の気持ちも考えると苦しくなった。

やっぱり私、喜んでいる場合じゃないよね…。
勉強が手につかなくなり、私はお風呂に入って、そのまま寝ることにした。でも、ベッドに入っても、なかなか寝付けなかった。

翌日、学校に行くと、菜摘の表情が暗かった。でも、変に探るのもおかしいし、気を使うのもおかしいし、蘭は普通に接していたから、私も、いつもと同じように接していた。
夜、メールが来た。聖君からだった。
「わ。メールも来た！」
一瞬、喜んだけど、あ、そんな喜んでる場合じゃなかったんだって、気を取り直した。

メールを見ると、やっぱり、菜摘のことが書いてあった。
＞菜摘ちゃん、今日どうだった？
それだけのメール。
＞今日は、菜摘、元気がなくて、心配しました。
と、ありのままを返した。
＞そっか…。葉一も、めちゃ落ち込んでたよ。学校であっても、話しかけてこなかったし。
＞葉君は、知らないんだよね。菜摘ちゃんが妹だってこと。
＞うん、言ってない。ただ、菜摘ちゃんには、俺が菜摘ちゃんのことを好きだってこと、ばらしたみたい。
＞え？菜摘に？

＞葉一には、俺はもう菜摘ちゃんのこと、なんとも思ってないって言ったし、桃子ちゃんと付き合うってことも言ってあるから。
＞それで、葉君、なんて？
＞信じてくれなかった。で、今度６人で会った時に、俺の態度見て、嘘かほんとか、見破るつもりらしい。俺が、葉一の気持ちを知ってて、遠慮してるって思い込んでる。

＞見破る？ばれたらどうするの？
＞大丈夫だよ。
＞でも、私うまくできるかな。
＞桃子ちゃんは、自然にしててくれたら、それでいいから。ね？
＞うん。わかった。
＞じゃあ、おやすみ。
＞おやすみなさい。

聖君は、それきりメールをよこさなかった。
「はあ…」
菜摘、今、どんな気持ちなんだろうか。聖君も、自分のことを好きだって知って…。
ああ、兄妹じゃなかったら…。両思いなのに。切な過ぎるよ。
淡々とメールをくれる、聖君の気持ちも考えた。どうして、こんな悲しい切ないことに、なっちゃったんだろう。

葉君もだ。自分の好きな子が、親友を好きだったなんて…。あ。私もか。好きな人は、親友が好きで、でも、その親友と兄妹で…。
なんだか、全部が知恵の輪みたいに、絡み合っているような気がしてきた。絡み合って、なかなかはずれない…。
私は、菜摘の様子を時々、聖君にメールをした。聖君は、菜摘のことを気にかけているようだった。
聖君は私のメールに対して、いつも、まじめに返事をしてきていた。

一週間はあっという間に過ぎた。菜摘はずっと、明るくいつものようにふるまっていたが、たまに、暗い表情を見せた。
6人で会う日が来て、みなとみらい駅で、聖君たちと待ち合わせをした。待ち合わせ場所や、時間は、葉君が蘭と決めたようだった。

菜摘は、聖君たちと会っても、歩いていても、葉君とも、聖君とも話をしないで、ずっと蘭と、しゃべっていた。とても、明るく元気に話しているけど、明らかに、聖君と葉君は避けていた。

私は、聖君に言われたように、聖君のそばになるべくいた。手をつないだりするのは、できなかったけど、とにかく横にいるようにした。でも、聖君は、ずっと葉君や基樹君と話をしてて、歩く早さも葉君に合わせていて、私はついていくのが大変だった。

途中で、何かに足をひっかけて、さらに私は遅くなってしまった。た、大変…。追いつかないと…必死であとを追っかけると、聖君が、こっちを見て、

「危ないよ、走ったら」

って言ってくれた。それから立ち止まって、私が行くまで待っててくれて、そのうえ、私の方に手をさし出した。

手をつなごうってことだよね…。でも、私は葉君や基樹君もいるし、躊躇した。それでも、

「はい、手」

と、聖君は、言ってくる。恥ずかしいけど、私は手をつないだ。そうだよね、付き合ってるふりをするなら、手ぐらいつながないと…。恥ずかしがってる場合じゃないよね…。

「やっぱり?二人付き合ってるの?」

って基樹君が、聞いてきた。

「うん」

聖君が、そう答えた。

「そっか~~!じゃあさ、今度ダブルデートしようぜ!」

と基樹君が言った。なんて答えていいか、わからないから、私は黙っていた。すると、横で葉君が、私に向かって、

「なんか、必死だね」
って、ぼそっとつぶやいた。

え?!見え見えかな。そうだよね。私きっと、顔もひきつってるよね…。
「どうしよう…」
って、聖君に言うと、
「何が?」
聖君は、わかっていないようだった。
「だって、必死だって。なんか、ばれたかな」
「はは、大丈夫だよ。いつもどおりにしてれば」
聖君は、笑ってそう言うと、つないでた手にぎゅって力をいれてきた。
「うん」
まだ、緊張はとれなかったけど、でも、聖君の手のあたたかさと、力強さで、安心した。

みんなで、赤レンガ倉庫に行き、そこでアイスを食べた。
「それ、何アイス?」
いきなり、横にいた聖君が聞いてきた。
「イチゴ」
と、答えると、
「うまそう。ちょっと俺のと交換して」
って言って、私のアイスをスプーンですくって、食べた。

わ…。顔が近づいてくるし、私は緊張してしまった。
「こっちも食べてみる?メロン味」
「え?!」
聖君のを?いいのかな…。でも、これも付き合ってるふり…だよね。しないと駄目だよね。

「うん」
と、うなづいてみたけど、照れくさくて、なかなか手が出せずにいると、小さなスプーンにすくって、
「はい」
って、聖君が食べさせてくれた。

う～～わ～～～～～！！！！
もう、頭の中は真っ白。ふりをしているのなんて、どっかに飛んでいったかもしれない。
まず、これって、えっと…。間接キスだし…。
はいって、食べさせてくれるなんて…。なんか聖君、優しいけど、こういうことまでするとは、思わなかった。

あ、そうか…。落ち着け、私。ふりなんだよ～～、これも。それなのに、こんなに動揺してどうするの…。私があまりにも、動揺しているからか、それを見て、聖君が笑っていた。
その様子を、少し離れたところから、菜摘が見ていた。表情がこわばってて、また私は、罪悪感が襲ってきた。
こんなふりなんてしてて、いいのかな…。

それから、４人で海を見に行った。ぶらぶら歩いている時にも、聖君は私の横にいた。もう、葉君とは話をしないで、静かに海を見ていた。
菜摘と、蘭と、基樹君は、楽しそうに話をしていた。その少し後ろに葉君がいて、ちょっと離れたところを私たちが歩いていた。
私は、聖君に言われたとおり、ただ、隣にいるようにした。聖君は、この前と同じく、海を静かに見ていた。

ワールドポーターズに入り、お昼をみんなで食べた。私の前には聖君がいて、その横に葉君がいた。また菜摘は、葉君や聖君と話を

しないで、蘭たちと話をしていた。
「桃子ちゃんって、彼氏今までいたの？」
ご飯を食べていると、いきなり葉君が聞いてきた。
「ううん…」
と答えると、
「じゃ、今回が初めての彼氏？」
って、また聞いてきた。
「え？！」
あせって、私は思わず、聖君を見た。

「俺が、彼氏１号なんだ。へ～～」
聖君が、ご飯を食べながらそう言った。
「うん、そうなの」
って、私が言うと、
「そっか。で？二人でもう、デートとか行った？」
って、また葉君が聞いてきた。
「まだ」
「二人で会うことって、なかなかないし。ああ、この前、水族館に行ったくらい？」
って、聖くんが言った。

「あ。そっか。水族館に行った」
慌てて、私もそう言った。
「ああ、あんとき。別行動し時。ほんとに、水族館行ってたんだ」
葉君は、何かを聞き出そうとしているような、そんな感じだった。
「楽しかったよね？」
聖君が、笑顔で聞いてきた。

「何が１番印象に残った？」
葉君が、まだ聞いてくる。

「え？イルカかな。イルカの水槽で、自由に泳いでるところ」
「ああ、あれね。他には？」
会話じゃなくて、取調べみたい。
「熱帯魚も綺麗だった」
「ふうん…。他には？なんか印象に残ったこととかなかったの？それ、初デートでしょ？もしかして、人生初のさ…」
「え？あ！そうか。そうだったんだ」

私の、初のデートだったんだ。そう思ったら、顔がつい赤くなってしまった。
「初デートか～～」
と、聖君もつぶやいてから、
「混んでたよね？そういえば。連休中だったから」
って言ってきた。
「あ、うん。それで…」
手をつないで歩いたの…と言おうとしたけど、それはさすがに恥ずかしくて、言えなかった。
「それで、何？」
葉君が、聞いた。

「ううん」
私が、首を横に振ったけど、葉君はまだ、聞いてくる。
「何？混んでてどうしたの？」
「混んでるから…、ああ、もしかして、俺と手をつないでずっと歩いた…とか？」
聖君が、助け舟を出してくれたけど、照れて私は下を向いた。
「ふうん…」
葉君は、それ以上は聞いてこなかった。

なんだか、緊張で喉が通らなくて、半分以上も残してしまうと、

聖君が、
「もう食べないの？俺食べてもいい？」
って聞いてきて、私の分をぺろって食べてしまった。
わ…。私が食べてたスパゲッティ…。
なんだか、今日は聖君、いつもと違う。あ、そうか。ふりをしているんだった。

それから、天気もいいし、ランドマークタワーの展望台にあがらないかってことになり、６人で移動した。
展望台に上がると、すごい絶景が広がってて、思わずみんなで、声をあげた。
そこでも、聖君は私の横に来た。他の４人とは少し離れて、二人で景色を見ていた。
「すげえ、車がミニカーに見える」
「ほんとだ～～」
二人で喜んで見ていた。そこへ葉君が来て、
「ちょっと、悪い、こいつ借りるよ」
って、聖君を連れて行ってしまった。

しばらくしても戻ってこない。一人で、外を眺めていたけど、どんどん不安と寂しさが募る。
ああ、隣に聖君がいてくれるだけでいい…。黙って、一緒に海を見ているだけでもいい。ただ隣にいてくれるだけでいいな…。

ぼ～って外を眺めていると、黙って聖君が隣に来た。
「あ…」
やっぱり、こうやって、ただ隣にいてくれるだけで、いいな～～…。
「どうだった？葉君」
気になって、聞いてみると、

「ああ、なんかね。桃子ちゃんが俺のことを好きだってのは、まるわかりだってさ」
「え?!」
そんなことを言われて、びっくりした。まるわかりなんだ…。

「そ、そうなんだ」
「うん、だから俺、言ったじゃん。普通にしてたらいいってさ」
「え?!じゃ、いつも、私顔に出てた?」
「うん。すぐに真っ赤になるし、わかりやすいよね」
え〜〜。じゃ、聖君にも、いっつもばれてたんだ。
「で、俺は演技をしてるように見えるって言われた。なんでかな」

「……。やっぱり、友達だね、わかっちゃうんだね」
「そうかな」
「うん。わかっちゃうんだよ」
ふりをしているの、気づくよね、やっぱり。私はふりじゃなくて、ずっと、本当に恥ずかしがったりしてたけど。
「俺、何も今日は演技してないけどな」
聖君は、窓の外を眺めながら言った。

「え?」
「菜摘ちゃんを好きだったのと、桃子ちゃんを好きなのと、俺の態度が違って見えるかもしれないけどさ…」
「好きって?」
今、好きって言った?
「だから、好きっていっても、ちょっと違う」
「?」
どういうこと…?
「えっと…」
聖君が、ちょっと困った顔をした。

「そろそろ、おりない？」
ちょうど、その時蘭ちゃんが言ってきた。
「のど渇いちゃった。ここにもカフェあるけど、どっか別のところに入って、お茶しようよ」
６人で、エレベーターに乗った。私はさっきの聖君の言葉が気になってたけど、聞きなおすのも恥ずかしくて出来なかった。

第7段階　好きな人の役に立つ

蘭が、
「スタバあったよね、この辺に」
って、言いながら歩いていると、
「その前に、トイレ行きたい」
と、菜摘が言った。私も行きたかったから、一緒についていった。

トイレに入り、出てくると、菜摘が泣きそうな顔をして手を洗っていた。私が、横に行き、手を洗うと、私の方を向いて、泣くのをこらえながら、
「ごめん、話を聞いてくれる？」
って、言った。
「え…？何？」
そこに蘭が手を洗いに来て、
「どうしたの？深刻な顔して、何かあった？」
と、聞いてきた。

「私、桃子にどうしても話したいことがあって…。こんなことを言っても、桃子困るだけだってわかってるけど」
菜摘は、目に涙をためていた。
「でも、辛くって…。このままでいるの辛くて」
聖君のことだって、ピンときた。どうしよう…。でも、私がここで動揺したら駄目だ。必死で、冷静さを保とうとした。

「私、ずっと隠してたけど、ずっと、聖君のことが好きだったんだ」
ああ、やっぱり…。
「え？何言ってんの？！」
蘭が、驚いていた。

「もし、そうだとしても、何で今言うの？今日見ててわかったじゃん。桃子と聖君、うまくいってるの。それも、今まで、菜摘が仲を取り持っていたんでしょ？」

「そうだけど、でも、もう苦しくて、黙っていられなくて」

「ちょ、ちょっと待ってよ。今さらそんなこと言っても…」

蘭は、私と菜摘の顔を、交互に見てそう言った。

「桃子、お願い。聖君と、別れてくれないかな。今さらだってわかってる。でも…」

菜摘は私の顔を見て、そう言ってきた。

「菜摘？何言ってんの？おかしいんじゃないの？」

蘭が、菜摘の腕を掴んだ。

「…。別れられないよ。私…」

必死だった。別れるなんて言って、一歩引いちゃったら…。聖君は困ることになる。

「そ、そうだよね～～。別れてくれって言われても、今は、桃子が付き合ってるんだから」

蘭も、必死な感じでそう言った。

「でも、聖君も、私のことを好きなんだって、葉君が言ってた…」

菜摘が、少し声を震わせて言った。

「え？何それ？うっそ～～。じゃ、なんで、桃子と付き合うのよ？」

「だから、桃子のことはきっと、本気じゃないと思う…。なんか、今日見てても、違ってるって思った」

「え？」

蘭が、驚いていた。

菜摘も、そんなことを思ってたの…？

「ちょ、ちょっと何それ。でも、桃子が聖君のこと好きなの、あんた知ってたじゃん！それも応援して…」

「だから、ごめんなさい」
「信じられない。そんなこと、今さら言われてもだよね？桃子…」
私は頭がパニックしてた。どういえば言い？どういったら言いの？駄目なんだよ。私と別れても、付き合えないんだよ。だって、血がつながったお兄さんだから。

そんな言葉が頭に浮かび、必死でその言葉を消す。何を言っていいか、適当な言葉が見つからない。
「私も、聖君が菜摘のこと、好きなの知ってたけど、それでも、聖君、私と付き合ってて…」
「え？知ってたの？桃子」
蘭が、驚いた声をあげた。
「あ…！」
これは、言っちゃいけなかった…。

「知ってて、菜摘には黙ってたの？」
どうしようか。黙っててくれと頼まれたなんて、言えないし…。
「それ、ひどくない？ああ！もう、なんなの、二人とも。自分のことばっかじゃん。友達じゃないの？！信じらんないよ！」
蘭はそう言うと、呆れた顔をして、トイレを出て行った。
菜摘は、ぼろぼろ泣き出した。そして、蘭のあとを追いかけた。
私も、あとを追った。でも、私が泣くわけにはいかないって、泣かなかった。

蘭はもう、聖君たちのところに行ってた。すごい剣幕で、怒っていた。
私たちが蘭のあとから歩いていくと、聖君がこっちを向いた。私は、聖君にどう謝ったらいいのか、これから先どうしたらいいのか、頭の中がぐるぐるしてた。
私たちがみんなのところに行くと、何があったかを男性陣が、蘭

に聞いているところだった。

「菜摘はね、桃子が聖君のこと好きだからって、いろいろと応援してたの。それで、二人がうまくいったのに、今さら、自分も聖君が好きだったって、言い出して」

「え？」

聖君も葉君も、驚いていた。菜摘がそれを、みんなにばらしちゃったことを、驚いていたんだろうな。基樹君だけが、まじめな顔で、菜摘に聞いた。

「なんで、今頃になって？」

「葉君が、聖君も菜摘のことが好きだって言ったからよ」

蘭がそう言った。

「何、何でお前そんなこと言ったの？」

基樹君は、今度は葉君に向かってそう聞いた。

「私が葉君に、聖君のことが好きだって言ったから。葉君が、悪いわけじゃない」

菜摘はそう言って、ぼろぼろ泣いた。

「だって、菜摘ちゃんも聖が好きで、聖も菜摘ちゃんのことが好きだってわかっちゃったら、言うしかないじゃんか。俺、二人の気持ち知ってんのに、黙っていられなかった」

葉君も、顔をひきつらせ、そう言った。

「でも、なんで、桃子ちゃんのことも、怒ってんの？」

基樹君が冷静に、蘭にそう聞いた。

「桃子も、聖君が菜摘のこと好きだってこと知ってたのに、黙ってた。そのまま、聖君と付き合ってた」

蘭は私を、怖い顔で見た。私は何も言えなかった。理由なんて言えるわけがなかった。

「……。なんか、絡み合ってるな」

基樹君が、そうつぶやいた。

「桃子ちゃん、こいつは、俺が菜摘ちゃんのことを好きだって言ったから、菜摘ちゃんをあきらめることにしただけだよ。悪いけど…」

葉君が私に、言った。

「でも、今は、私と付き合ってるし…。今さら、別れてって言われても、別れたくない」

他に何も、言葉が浮かばない。

「自分さえ良ければ、いいんだよね、みんな」

蘭が、冷ややかにそう言った。

「……」

みんな、黙っていた。でも、

「ごめんなさい。私がちゃんと、私の気持ちを桃子に、言ってたら良かった」

と、菜摘はそう言って、下を向いて謝った。

「お前は？お前の気持ちはどうなんだよ」

基樹君が、聖君に聞いた。

「俺に遠慮とかいらないからな」

葉君が、そう言った。

「俺は……」

「ひ、聖君は、菜摘に渡せない。だって、菜摘、応援してくれてたでしょ？」

私はとっさにそう言った。聖君が、ものすごく辛そうな顔をしていたから。

「……。でも、1番大事なのは、聖君の思いだと思うよ」

菜摘が、そう言った。

「桃子って、そういう子だったんだ。なんか、男の前だと変わるよ

ね。女友達より男の方が大事？」
蘭の言葉が、胸にささった。でも、そう思われてもいい。これ以上、聖君が辛い思いをするくらいなら。
「そ、そうだよ」
私は必死で、そう強がった。
「蘭、もうやめろって」
基樹君が、蘭を止めた。蘭は、それでも、気がおさまらない感じだった。

「はあ……」
聖君が、重いため息をした。
「桃子ちゃん、もういいよ」
それから私に、そう言った。
何が、何がいいの…？聖君、どうしたの？
「そんな、頑張って演技しないでも。俺のためにさ」
そんな、そんなこと言わないで。聖君。

「だって…」
私は今まで我慢していたのに、涙が出てきた。
「俺、確かに菜摘ちゃんが好きだったけど…。駄目なんだよね。ごめんね」
菜摘ちゃんの方を向いて、聖君が優しく言った。
「駄目って？」
と、葉くんが聞いた。

「無理して演技って？なんで、お前のために？なんだよ、なんか隠してるのか？」
「ふう……」
また、聖君は、ため息をついた。それから、
「しゃべるしか、ないのかな…」

ってつぶやいた。

聖君、菜摘に本当のこと言っちゃうの？

「聖君」

思わず、止めようとしたけど、聖君は話し出した。

「俺も知らなかったことで、ついこの前、親から聞いた」

「え？」

みんながいっせいに、聞いた。ああ、話しちゃう！聖君…。

「菜摘ちゃんが、店に来て、母さんが驚いてた。母さん、俺の父さんと会う前に、菜摘ちゃんのお父さんと付き合ってたんだ」

「…え？」

菜摘が、一瞬青ざめた。

「別れたあとに、俺を妊娠してることに気づいた。もう、父さんとは出会ってたあとで…。それで、父さんが、母さんと結婚して、俺のこと子供として育ててくれた」

「……」

みんな、黙っていた。

「俺、菜摘ちゃんとは、血、つながってるんだ。菜摘ちゃん、俺の妹なんだ」

「……」

菜摘が、力なくその場にしゃがみこんでしまった。

「菜摘、大丈夫？」

蘭が、そばによって支えてあげた。

「桃子ちゃんは、俺が菜摘ちゃんのことを好きだって、葉一と俺が話しているのを偶然聞いちゃって、それで、自分はあきらめるからってさ。俺のこと、応援するって言ってくれた」

「え？」

蘭も、菜摘も、同時に私を見た。

「それで、俺、桃子ちゃんに本当のことを話した。でも、絶対だれにも内緒にして欲しいって言った。それに、付き合ってるふりもしてくれって、頼んだ」
「…じゃ、桃子、全部知っててわざと、さっきあんなことを？」
蘭が、そう言った。
「そうだよ。演技だよ。俺のために。桃子ちゃん、友達思いのいい子だって、蘭ちゃんも知ってんでしょ？」
「……」

「ごめん。桃子ちゃんを悪者にするとこだった。ほんと、ごめん」
聖君は私に向かって、頭を下げてそう言った。
「私は、私はぜんぜん…」
悪者になったって、そんなの、聖君の辛さに比べたらどうでもいいことだったのに。

「ごめん。菜摘ちゃんには、絶対に言わないようにするつもりだった。それに、多分このこと、菜摘ちゃんの親も知らない。俺の親、言ってないと思うよ」
聖君は次に、菜摘に向かって謝った。
「……。兄妹？」
菜摘が、やっと状況を飲み込めたのか、言葉を口に出した。

「ごめん、葉一。お前にまで黙ってたけど、でも、言ったら、菜摘ちゃんに知れちゃうかもしれないって思って、黙ってた」
それから、聖君は、葉君の方を向き、申し訳なさそうにそう言った。
「……」
葉君は、黙っていた。

しばらくみんな、黙っていたけど、
「立てる?菜摘」
蘭が、菜摘にそう聞いた。
菜摘のことは、私が送っていくと言って、蘭は菜摘のことを支えながら、歩いていった。その後ろを基樹君がついていった。
蘭は別れ際に、私に謝っていた。ううん…。謝ることなんてないのに…。

「桃子ちゃんは、俺が送るよ」
聖君が言った。
「…ごめん、桃子ちゃん。まじで、ごめん、俺」
と、葉君はすごくすまなさそうな顔をした。それから、次に聖君に向かって、
「でも、俺はお前には謝らない。そういうこと、隠して、俺に何も言ってくれなかった」
って言った。
「ごめん」
聖君は、葉君にまた謝った。

葉君は一人で、そのまま、駅の方に向かって歩き出した。私は、ベンチに腰掛けた。聖君も横に座った。
力がどっと抜けた感じがした。
「ごめんね。桃子ちゃん、俺、変なことに、巻き込んだ」
なんだか、聖君も力が抜けた感じで、そう言った。
「ううん」
「あやうく、桃子ちゃん、友達なくすところだった」
そんなの、いいのに…。それに私だって…。

「……。私、わからない」
「え?」

「さっきの演技だったか、本当の私だったか、わかんない」
「どういうこと？」
「私、本当に、離れたくないって思ってたかもしれない」
「俺から？」
「うん」
そう言うと、勝手に涙が溢れ出していた。
「そっか…」
こくんとうなづいたけど、聖君は黙っていた。

しばらく黙っていた聖君が、口を開いた。
「変だよね。なんでこんなになったのかな」
それから、聖君は何かを考え込んで、そして、
「やっぱり、あれかな。みんなちゃんと自分の気持ちを、しっかりと言っていたらよかったのかな」
って言った。

「え？」
「自分の気持ちを隠したり、押さえたり、ごまかさないで、初めから素直に言ってたら、こんなことにはなってなかった」
素直に…？
「俺も、菜摘ちゃんが傷つくだろうって、兄妹だってことを隠そうとした。でも…、はっきりと、言わなくちゃいけないことだったんだ」
「だけど…」
そんなこと言ったら、菜摘傷ついてた。

「そうしたら、桃子ちゃんに、変な芝居頼まなかった」
変な…、芝居？
「そうしたら、付き合ってるふりもなし？」
「うん」

「そうだよね」
何でかな。また、涙が勝手に出てきた。

「でも、ちょっと嬉しかったんだ」
「え？」
「今日もドキドキしてた。ふりしてるってわかってたけど…」
「ふりじゃないって」
「……」
いいのに…。もう、そんなふうに優しくしなくても。
「ふりじゃないから」
聖君は、もう一回私に言った。

「もう、みんなでは会えないのかな。会えないよね。それに…」
「俺とも？」
そうだよね…。聖君とも会えない。こんなことになったらもう…。
「うん…」
「どうする？会うのやめる？」
聖君が、聞いてきた。
「…うん」
私はうなづいた。

「会いたくないから？」
違うよ…。会いたいよ。これからだって…。
「ううん…」
私は思わず、首を横に振った。
「菜摘に、悪い」
私が、そう言うと、聖君が、
「じゃ、本心は？」
って聞いてきた。

「本心？」
「うん」
本心なんて、言えない…。
「ね、もうやめようよ。隠すの。さっき言ったじゃんか。自分の正直な気持ちを言わないで隠してて、こんなに混乱した。もう、素直な気持ちでいない？」
「素直な？」
「そう。桃子ちゃんの素直な気持ち」
「私の？」
「うん」

「…聖君は？」
「え？」
「聖君の、今の素直な気持ちは？」
「俺は、桃子ちゃんとこれからも会うつもりだけど」
「…みんなで？」
「二人で」
「え？」
二人でって…？

「だから、付き合っていきたいって、思ってるけど」
「…え？」
付き合いたいって…？
「えって聞かれてもな…。えっと…」
聖君が、困った顔をした。
「俺さ、桃子ちゃんが好きだよ」
「嘘…」
好き？好きって…？
「嘘じゃないって」

「でも、菜摘のこと」
「だよね…。こんなに早くに心変わりって普通、ありえないよね」
「…嘘だ」
「…ショック？」
「え？」
「こんな簡単に心変わりする男で、ショック？」
違う、そうじゃなくって…。

「ううん」
私は首を横に振って、
「でも…。そんなの信じられない」
って言った。
「…そっか」
そう言って、聖君は黙った。しばらくすると、
「俺の素直な気持ちは言った。で、桃子ちゃんは？」
って、聞いてきた。

素直な気持ち、素直な気持ちは…。一緒にいたい、それだけ。
「私は…、聖君と、一緒にいられたら…。それだけで、嬉しい」
言ってから、恥ずかしくなった。
「そっか…」
聖君は、ただそう言って、すって私の手を握った。
「俺、そろそろ帰んないと…。店の手伝いあるんだ」
「え？」
「駅まで、一緒に帰ろう」
「うん…」
手をつないで、私たちは歩き出した。聖君の大きな優しい手、つないでると安心する。

「菜摘、大丈夫かな」

私はいきなり、菜摘のことが気になった。
「…うん、大丈夫だよ。蘭ちゃんもついてるし、お母さんやお父さんもいるし」
「うん…」
「俺もすげえ、ショックだったけど、桃子ちゃんがいてくれたし、母さんや父さんが、ちゃんと俺が大丈夫って信じてくれてたから」
「え？」
「うん。信じてくれてるんだよな。そんでいつも、見守っててくれてたんだよな」
聖君は、少し宙を見ながら、独り言のようにそう言った。
私も、役に立ってる？少しでも役に立ってるの？

家に帰ると、蘭から電話があった。
帰りも、あまりのショックだったみたいで、菜摘は、ほとんどしゃべらなかったって。それで、しばらく菜摘についててあげるから、桃子とはいられなくなるかもって…。学校でも話せなくなるかもって言ってた。そして、桃子は大丈夫？って聞いてくれた。
「うん、私は全然…。菜摘についててあげて。今きっと、ショックで、何も考えられないくらいかもしれないから」
「うん、わかった。でも、ごめんね。桃子も大変だったのに、私何も知らないで、ひどいこと言って」
「大丈夫」

「そう…。聖君もきっと、ショック受けてたんだよね。桃子は、聖君についててあげるんだよ」
「うん。わかってる」
そう言って、蘭は電話を切った。
蘭は、怒ってたけど、でも、あれも友達を思う気持ちが大きいからだって、そう感じていた。
私は、菜摘のことも気になったけど、聖君が言うように、ご両親

や、蘭がいるんだから、大丈夫だって思うようにした。

そして、私は聖君の役に立てるように、何か出来ることがあったらしよう…そう思った。

ああ、そういえば、これからも付き合うとか、好きだって言ってたな。

あれって、もしかして、友達として付き合っていこうとか、嫌いか好きかでいったら、好きってことかな。英語で言う、ライク。ラブじゃなくって…。そんな感じだったのかな…。

第8段階　好きな人の気持ち

次の日、家にずっといた。蘭が朝メールをくれて、菜摘のお母さんが菜摘が心配だから来てくれないかって言ってきた。だから、家に行ってくるねって、そう書いてあった。

そんなに、菜摘は傷ついているのか。

心配になった。でも、私には何もできなかった。でも、またいつ電話やメールが来てもいいように、なんだかその日は外に出る気になれず、家にいた。

その日の午後、聖君からメールが来た。

＞来週、水曜の夕方、学校終わってから会えるかな？

…なんだろう？菜摘のことだよね。

＞うん、空いてる。

＞さっき、菜摘ちゃんの両親がうちに来た。

＞え？ほんとに？

＞うん。それで、まあ、いろいろと話してさ…。水曜に話すよ。

それでか…。どっかで私はほっとしていた。いや、聖君がきっと悩んでいるのだから、ほっとなんてしちゃいけないんだろうけど。

別れ話かなってそう思った。あ、付き合ってもいないんだから、別れ話ってことはないか…。でも、もう、会うのはやめようとか、今までありがとうとか、そういう話かなって。

だって、こんなあらたまって、二人で会おうって言ってくるの変だもん。

＞わかった。水曜ね。４時なら大丈夫だと思う。

＞じゃ、４時、駅の改札口ね。

＞うん。水曜にまたね。

私はそう送って、携帯を机に置いた。それから、何も手に付かなかったけど、本でも読もうかなってベッドに横になり、本を広げた。すると、また、携帯が鳴った。

見ると、聖君からだった。

＞水曜、学校帰りだよね？制服で来るの？

＞ううん。うちの学校、制服でどっかに寄るの禁止されてるから、一回家に帰るよ。

＞大変じゃないの？それから、駅に来るの。

＞駅から歩けるところに家があるから、大丈夫。聖君は制服で来るの？

＞うん。学校から直で行くよ。

＞制服見るの、初めてだね。

＞ああ、そうだね。惚れ直したりしないでね。かっこいいから。

ええ？ええ～～？私はどぎまぎした。そっか、私服っていっても、Tシャツとジーンズだもんね。それが、制服なら、Yシャツとか、パンツとか、ジャケットとか…。かっこいいかも。似合うかも。ううん、Tシャツもかっこいいけど…。

＞そうだよね。きっと、似合うよね。聖君。

そう返すと、しばらくしてから、

＞冗談だって、本気にしないで！ぼけてるんだから、つっこんでください！

って、返って来た。ええ？ボケ…？つっこみ…？でも、どうやって…。

しばらく悩んじゃって、返事が返せなかったけど、

＞ごめんね。つっこみってできないかも…。いつもぼけてる方だから。

と、精一杯のことを書いた。

＞あはははははははは。そうかもね！
ものすごく、笑われてる…私。
でも、こんなふうにメールをできることが、めちゃくちゃ嬉しかった。
聖君はそのあとも、
＞俺、最近、映画観てないな。なんか映画館行って観た？
とか、
＞桃子ちゃんって、やっぱり、果物では桃が好きなの？
とか、そんなことを聞いてきた。

＞桃も好きだけど、イチゴが好き。
＞ああ！そんな感じあるね。
＞聖君は？
＞俺は、やっぱり果物ならスイカ。豪快に食べれるじゃん。
＞そんな感じするよね。
＞果物以外なら食べ物で、何が好き？
＞ドリアとか、グラタンとか。
＞熱いものばかりだね。俺は、肉！断然、肉！がっつけるのが好きだな。
＞そんな感じするよね。

＞じゃ、好きな動物は？
＞猫。猫うちで飼ってるの。
＞犬じゃないの？あ、犬じゃ仲間になっちゃうね。
＞なんで～～？
＞だって、桃子ちゃん、そっくりじゃん。チワワ、マルチーズ。
＞犬じゃないよ、私。
＞あはははははははは！
また、思い切り笑われた…。

でも、聖君のメールを見てると、聖君は、落ち込んでる様子もなくって、良かったって思った。
きっと、菜摘のご両親が来て、また、大変な思いをしたに違いないから…。私のメールは少しでも、聖君のことを元気付けられたんだろうか。

＞そろそろ、店、手伝わなくっちゃ。また、水曜日ね。
＞うん、頑張ってね。
それきり、メールは来なかった。お店に出たのかな。
聖君がバイトしてるところ、見てみたいな。
海の家の時みたいに、素敵な笑顔で接客してるんだろうな。ああ、そうか。お店手伝っているから、ああいう笑顔が自然に出てきてたのか…。

携帯を開いて、聖君からのメール全部を保存した。それから、読み返した。聖君て、可愛いなって思った。今までの印象とまた、違った気がする。また一つ聖君のことが知れて、嬉しくなった。
でも、心のどこかには、菜摘に悪いなって気持ちがあって、心の底から喜ぶことが出来なかった。

水曜日が来た。今日に限ってＨＲが長い。
「バイバイ！」
と、教室を出ようとすると、先生に声をかけられ、この前の提出物の話をしだすし、やっと終わったと昇降口に行くと、今度は、委員会の先輩に会い、次の委員会のことを話され、やっとこ靴を履き替え、校門に行くと、クラスメイトから、
「最近、どうしたの？蘭や菜摘と喧嘩した？」
と聞かれ…。

「ご、ごめん。喧嘩はしてないんだけどね。あ、ちょっと今日急いでて、またね」
「え？なんか用なの？一緒に帰らない？」
「ごめん、急いでて」
もう、大ダッシュで、家に帰った。
どうしよう…。時間間に合うかな？あ、でも今、出ればどうにか…。

昨日考えてた、服の組み合わせを着た。もう秋だから、茶系のブラウスに、ジーンズ、こげ茶のパンプスをはいた。
そして、駅に向かってダッシュした。でも、ちょっとヒールがある靴で、早くに走れない。そのうえ、そうだった。私って走るの、遅かったんだ。
気づいた時には、すでに遅し。走りながら、携帯を出して時計を見たら、なんと４時５分だった。

「あ～～～～！た、大変」
慌てて電話をした。すぐに聖君は電話に出た。
「あ、桃子ちゃん？」
「ごめんね。聖君。今、駅に向かってる」
「いいよ、ゆっくり来なよ」
「ごめんね！！！」
電話を切った。聖君、優しい。ほんとうにいつも、優しい。怒ることってあるのかなって思うほど、優しい。

駅に近づくと、聖君が私に気がつき、聖君の方も、走ってきてくれた。
「ひ、聖君…。ごめん…」
息があがって、言葉が続かない。
「そんなに、走ってこなくても良かったのに」

聖君が優しく言ってくれる…。そんな…、私遅刻したのに。
「ご…、ごめんね。学校、出るのが遅くなっちゃって…」
そこで、もう一回、呼吸を整えてから、私は続けた。

「HR長いんだもん。もっと早くにメールしたら良かった。でも、走ったら間に合うかなって思って…。でも、全然駄目だった。私、走るの遅いんだったって、途中で気づいて…」
「え?ぶぷ!」
「…え?」
今、笑われた?え?なんで?
「あ、ごめん…、笑っちゃって。あはは。桃子ちゃん、走るの遅いんだ?」
「…。うん…」
遅いから笑われた?あ、呆れられた?とか…?

「走ってきたから、のど渇いたでしょ?どっか入る?」
「うん」
「俺、ちょこっと小腹減ってるんだよね~~。どっか、ファーストフードの店あったっけ?」
「うん。あるよ、こっち」
私がお店の方に向かって歩き出すと、ずっと聖君は私のあとをついてきた。
横を歩くわけでもなく、後ろからずっと。

いつもは、私の方が、少し後ろからちょこちょことついていくのにな。なんでかな?私は、不思議になって、止まった。
「わ…。何?」
聖君が、私が止まったから驚いて私に聞いた。
「なんで…、後ろ?」
って、私は聞いてみた。

「え？」
「ずっと、後ろにいるから…聖君」
「ああ、桃子ちゃんの知ってる店だから、後ろからついていったらいいのかなって。それで、後ろ歩いてたけど」
それだけ？

「え？何？どうかしたの？」
「なんか、怒ってるのかと思った」
「誰が？」
「聖君、黙ってたし」
「え？ああ、ごめん。でも、怒ってないよ？」
「そうだよね、さっき、怒ってる感じじゃなかったし」
遅刻して怒ってたわけじゃ、ないよね？

「お店、あそこなんだけど…」
と、私は斜め前のビルを指差した。
「ああ、うん。じゃ、行こう」
今度は聖君が先に、歩き出した。私はいつものごとく、そのあとを、ちょこちょこって、ついていった。

店に入って、聖君は、チーズバーガーと、ポテトと、コーラを頼んだ。それから席に座り、
「いただきます！」
と、聖君は、嬉しそうに食べ始めた。いつもながら、豪快にばくばく食べるよな～。
「聖君、元気そうで良かった」
「え？」
チーズバーガーにかみついたまま、聖君が聞き返した。
「菜摘のことで、落ち込んでたりしないかなって思って…」
「ああ…」

バーガーを食べ、コーラを飲んでから、聖君は話を始めた。

「日曜、メールでは、あんまりその辺のこと、触れなかったっけ」
「うん、だから、落ち込んでるのかなって気になって」
「落ち込んでないよ。菜摘ちゃんの方が、かなり落ち込んでるんじゃない？学校は来てる？」
「うん、ちゃんと月曜から。でも元気ないみたい。ずっと蘭がついててあげてる」
「そうなんだ」
「私は、そばにいないほうがいいって、蘭とも話したんだ。菜摘も、まだ、私と話すのはちょっと辛いから、離れてるって言ってたって」
「じゃ、桃子ちゃん、学校で、一人？」

「…大丈夫。一人だけど、菜摘の方が今は、辛いと思うし…」
「…他に、友達は？」
「蘭がね、他の子と一緒にいてもいいよって言ってくれたんだけど、なんだか、気が引けて…」
「……」
「菜摘ね、今は辛いけど、そのうちに、また私と蘭と一緒に、仲良くやっていきたいからって、だからもうちょっと待っていてねって、そう言ってたよって、蘭が教えてくれたの」
「そうなんだ」

「うん…。二人とは、中3の時も一緒のクラスだったの。あ、私たち、今の高校の中等部にいたんだ。それで、今年も一緒のクラスになって…」
「うん」
「蘭とも、菜摘とも、まったく違う性格なのに、なんで仲がいいの？って他の友達に聞かれたことあるんだけど…。優しいからかな～」

「え？」
「中学3年の時に、私、なかなか友達が出来なくて…。仲が良かった子とは、みんな違うクラスになっちゃって…。5月に修学旅行があって、どの班にもいれてもらえなくて困ってたら、二人が一緒の班になろうよって言ってくれたの。私、初めは、私と全然違うタイプだし、どうしようかなって思ってて、なかなか二人にもなじめなくて…」
「…うん」

「だけど、二人ともいつも元気で、明るくて、一緒にいると楽しくて…」
「そうだね。そういえば、初めて俺らがバイトしてる海の家に来た時も、二人ともはじけちゃってたもんね。で、俺らも、けっこうはしゃぐから、意気投合したんだよね？」
「私は、あまり、しゃべらなかったけど…」
「え？ああ、うん。そうだっけ…」
「聖君は、蘭と仲良かったよね。蘭と、基樹君と3人でよくバカやってた」
「バカ…？」

「仲良かったから、聖君も基樹君も、蘭のことが好きなのかもって、菜摘と話してたんだ」
「そうなんだ…」
「私とも、菜摘とも、あまり話さなかったから」
「え…、ああ。うん」
聖君は、少し考えてから、言葉を続けた。
「あの頃は、その…。菜摘ちゃんのことを意識してたんだけど、何を話していいかもわからなくって。それで、結局1番話しやすい、バカやれる蘭ちゃんと基樹と、一緒にバカやってたんだと思うよ」

「そうなんだ。菜摘のこと、好きで意識しちゃってたんだ…」
「うん…。なんか、なんて言うの？俺、あまり女の子と付き合ったこともないし…。あ、中学の頃一回あったけど、すぐに駄目になったし…。好きになっても、どうしていいかわからないっていうかさ…」
なんか、意外だな。女の子と平気で、話せるかと思ったのにな…。それとも、そんなに菜摘のことが好きだったのかな。

「…そんなに菜摘のこと？」
って、聞いてみると、
「え？いや。うん、どうだろ？とにかく、緊張はしてたよ。毎回何か話そうって思ってて、ああ、今日もまた、話せなかった…みたいな」
「…そうだったんだ」
そんなに好きだったのに、妹だって知って、どんなにショックだったんだろうか。

しばらく、聖君は黙ってしまった。そして、ちょっと、元気なさそうにポテトをつまんだ。
「あ！そうだ。聞きたいことがあったんだ」
いきなり、聖君が言ってきて、びっくりした。
「え？何？」
「桃子ちゃんって、俺のこといつから、好きなの？」
「え？！！！！」
い、いきなり、そういう質問？わ～～～。
私は、戸惑ってしまった。でも、素直に答えることにした。

「さ、最初から…」
「最初って？６人で会った時から？」
「ううん」

「？」
聖君が不思議そうな顔で、私を見た。
「私、みんなで会う前に、江ノ島の海に家族と来てたんだ」
「え？」
「その時にも、聖君のバイトしてた海の家、行ったの。そこで、聖君見て…」
「…え？」
「なんか、すごく元気で、にこにこしながらお客さんと会話してて…。汗かきながら、一生懸命に仕事もしてて。それがすごく印象的で…」
「……」
「私が注文した時にも、すごく明るく笑顔で答えてくれて、それがなんか、まぶしくて…。もう一回会えたらいいなって思って、蘭にその話をしたの」
「うん…」
「そうしたら、3人で江ノ島に行って、また、その海の家に行こうって…」
「……」
聖君は、目を丸くして黙っていた。
「蘭も、菜摘も、応戦してくれてたけど、私、どうしていいかわからなくて…。それに、会うだけで、嬉しかったし」
聖君は、下を向いてうんうんってうなづいてた。

そうだ。あの頃から、菜摘、応援してくれてたんだっけ…。
「菜摘…、いつから聖君のこと、好きになったのかな…。もしかして、会った時からかな」
「…え？」
「……」
しばらく二人とも、沈黙が続いた。

「昨日さ、菜摘ちゃんのご両親が来てさ…。いつか、菜摘ちゃんが俺のこと、兄貴って思えるくらいになったら、家に遊びに来ないかってさ」
「え？」
「俺、妹いるじゃん。杏樹って…。会ったことないか…。今中1で、けっこう可愛い妹なんだ。自分で言うのもなんだけど、けっこう可愛がってるんだよね」
「……」

「でさ、菜摘ちゃんのことも、杏樹みたいに、思える日が来るんじゃないかって、俺、そう思ってて…。そしたら、今度もし、なんか、菜摘ちゃんが悩んだり困ってる時、相談に乗ったり、励ましたりするそんな役目、俺できるかもしれないでしょ？」
「うん…」
「そんな日が来たら、いいなって思ってるし、俺の本当の…、あ、いや、血のつながってるって言った方がいいかな？父親、菜摘ちゃんのお父さんもさ、息子として会いたいからって言ってくれてさ」
「息子…として？」
「俺、父親、二人もできちゃったよ。あはは…」

え？なんで笑ってるの？もう、平気なの？立ち直っているの？
「…なんか、強いね、聖君」
「え？強くはないよ。でも、まあ、父さんとか、母さんとか、基樹や葉一がいてくれてるから、そんなに落ち込んだりしないですむかな」
「そうなんだ…」
「だから、菜摘ちゃんも大丈夫だと思うよ。だって、両親もいるし、蘭ちゃんもいるし、葉一もよく、電話したり、メールしたりしてるみたいだし…」

「うん。そうだよね…」
「うん…」

「ちょっと、羨ましいな」
「え？何が？」
「杏樹ちゃんや、菜摘」
「なんで？」
「だって、聖君に、大事に思われてるし」
「へ？」
「基樹君や、葉君にも、嫉妬しちゃう」
「え？！なんで？」
「だって、聖君の力になってて…。私なんか、全然…」
聖君の役に立つよりも、足を引っ張っている気すらする…。

「く～～～！」
聖君が、いきなり、目をぎゅってつむって、足をばたばたさせた。
「え？どうしたの？」
なんで？なんか、怒ってる？それとも？
「私、何か変なこと言ってる？」
「いや…」
バタバタするのをやめて、聖君はちょっと黙って、それから、
「あ、あのさ」
「え？」
「だから、あのさ」
「…？」
「そんなに、落ち込むことないし、羨ましがることないし」
って言った。

「そうだよね」
「え？！」

「私、自分勝手だよね。だって、菜摘は今、傷ついてるし…。妹になんかなりたくなかったかもしれないし。それに私、勝手に聖君の役に立てたらって思ってたけど、そんなの自分勝手なことだよね」
「え？え？」
「私、聖君と、菜摘が兄妹だって知って、それを私しか知らなくて、だから、聖君のために自分が出来ることしなくちゃって思ってて」
「……」
聖君は、黙って聞いてた。

「だって、その時には、私しか、聖君は相談する相手も、助ける人もいないからって…。私、役に立ててることが嬉しくて…。でも、今は私がいなくっても、もう大丈夫なんだよね？」
だって、私足手まといなくらいだし、いてもいなくても、いいくらいかもしれないし…。それに…。それに、聖君…。
「いなくっても…って？」
「だから、その…。もう、私は必要ないかなって…。一回乗りかかった船だけど、もう降りる頃なのかな？私」
「…え？何それ？」

「今日、会おうって言ったのは、それを言いにきたんじゃないの…？」
「それ…って？」
聖君は、ちょっと困惑しているみたいだったけど、私は続けた。
「初めはね、菜摘のことで、悩んでて、相談か何かかなって思ってたんだ。でも、話聞いてたら、もうとっくに解決してるって言うか、聖君、立ち直れているし…。だから…」
「…うん。だから？」
「だから…。別れ話しに来たのかなって」
「ええ？！」

「あ。別れ話じゃないよね。だって、付き合ってるわけでもないし…。えっと、だから、私はもう、必要なくって、だからこれから会うこともなくなって…、とか」

「……」

聖君は、しばらく呆然としていた。

「えっと…」

少ししたら、聖君は、話し出した。私は聖君の顔をまともに見れなくって、下を向いた。それに、泣きそうになっていた。

「桃子ちゃんさ、じゃ、俺がもう必要ないよって言ったら、俺の前から去っていっちゃうわけ?」

「え?」

聖君の言葉に、びっくりしてまた、私は顔を上げた。

「そんな簡単に、去って行けるくらいの、簡単なもんだったの?俺への、気持ち」

そんな、そんな簡単な思いだなんて…。そんなことない。そのまったく逆だ。

「違う…」

そうじゃない…。

「違う…。でも、私のこと、必要なくなって、会わなくてもいいって思ってるのに、しつこく会ってなんて言えない」

「え?」

「……。迷惑かけたくない」

「俺に?」

「嫌われたくない…」

「え?俺に?」

「……」

駄目だ…。涙が出てきた。泣いたりしたらもっと、困らせるのわ

かってるのに…。
「ごめん…」
聖君が、謝った。
「泣かせて、ごめん…」
もう、一回謝ってきた。
「まじで、ごめん！」
顔を見たら、本当に申し訳なさそうな顔をしている。

「いいよ。あやまんないで。大丈夫…」
私がそう言うと、ずっと下を向いてた聖君は、顔をあげた。
「大丈夫…。今までありがとう。楽しかったよ」
私はもう泣かないで、笑顔を作ろうと思った。
「そのうち、多分、思い出になって、ほ…、他に好きな人でも出来て…。聖君のことも、蘭や菜摘とも、話せるようになって…」
必死で笑顔で言ったけど、きっとひきつってる。でも、聖君の方がもっと、顔がひきつった。

「えっ？！何それっ？！！！！」
「…え？」
それに、聖君はものすごく驚いてて、目をまん丸にした。
「別れ話？ってか、俺と会わないつもりでいる？」
「え？だって」
「俺そんなこと、一言も言ってないし。なんでそうなんの？なんで勝手に、話作るかな？！」
「でも、聖君も、ごめんって今…」

「泣かせて、ごめんってことだよ。だいたい、なんで俺が今日、別れ話しに来なくちゃならないわけ？なんでそうなるの？」
「だって…、なんで会いに来たのかが、わからなくって」
「へ？！！！」

聖君は、なんだか、イライラしてる…。怒った口調になってる。
いつも優しいのに。
「こ、この前、俺、みなとみらいの帰りにさ、言ったよね？」
「何を？」
「……」
今度は、拍子抜けしたような顔をしている。

「これからも、付き合おうよって、言ったよね？俺」
「…うん」
「それに、桃子ちゃんのこと好きになってるって、言ったよね？俺」
「……」
それ…。
「そう言われて、あとでいろいろと考えて…」

「考えたって、何を？」
「友達としてこれからも、付き合うってことかなとか…」
「へ？」
「好きって言うのも、友だちとして…って感じかなとか…」
「はあ？！」
聖君は、今度は呆れ顔だ。

「手…、なんてつないで、帰らなかったっけ？俺ら…」
「うん…」
「俺さ、もう、てっきりわかってくれてるもんだって…」
「…え？」
「だから、あれでもう、俺ら、これからもちゃんと付き合っていくんだと思ってたし、俺の気持ちもわかってもらえたんだよなって、そう思ってて」
「…え？」
ど、どういうこと…？！

「だから…。だから、今日は…、デートのつもりで、いや、つもりも何も、デートなんだよ。わかってる？」
デート？私と、聖君が？！
「ううん…」
私は、思い切り、首を横に振った。
「ええ？わかってないの？」
聖君は、ずるって椅子からのけぞった。

「でも、日曜日、メールいっぱいしあったよね？」
「え？うん…」
「じゃ、あのメールはなんだったのかな？」
聖君は、脱力した感じで、聞いてきた。
「あれは、だって…。菜摘のことで、落ち込んでいると思っていたから、楽しくメールしたら、聖君、少しは元気出るかなって…」
「へ？」
また、呆れ顔になった。

それから、聖君は、がっくりと肩を落とし、椅子にもたれかかり、うなだれた。ああ、相当私、ショックなことを言ってるんだろうか…。

第9段階　好きな人の告白

聖君は、しばらく、がっくりした様子で黙っていた。私は、ちゃんと話さなくちゃと思い、勇気を持って話すことにした。
「ごめんね…。私、信じられなくて」
「…俺が？」
「違うの…。そうじゃなくて、聖君がまさか、私のことを好きになってくれるわけがないって、そう思ってて…。好きだっていうのも、付き合うっていうのも、信じられなくて…」
「やっぱ、俺のことが信じられないってことじゃん」
「違うよ」
「そうじゃんか…。俺の言ってることが、信じられないってことでしょ？」

「……。信じたいけど、自信がなくて…」
「…なんの？」
「私、蘭みたいに綺麗じゃないし、スタイルも悪いし、背も低いし…」
「それが？」
「それに…、菜摘みたいに、明るくないし、運動も苦手だし、頭もよくないし、何もとりえないし…」
「……」
「だから、私なんて、好きになってもらえるわけないって…」
聖君は、黙り込んだ。

「聖君が、私のどこを好きになってくれたか、わからなくて。だから、きっと、友達としてってことなんだって思って」
「？？？？え？」
聖君の目が、まん丸になった。

「じゃなかったら、私の気持ち知ってたから、気を使ってとか、悪いなって思ってとか…」
「は?????」
もっと、真ん丸くなる…。
「だって、わからないんだもん」
私も、これ以上なんて言ったらいいか、わからなくなって、黙ってうつむいた。

聖君も、黙っていた。どんな表情をしているのか、少し気になり、聖君のことを見ると、黙ったまま、私を見ていた。目が合って、私はまた、うつむいた。
何を考えているんだろうか。こんなに卑屈で、自信のない、コンプレックスの塊のような私のことを、もしかして、呆れているのだろうか。
「もっとさ、自分に自信持ったら…?」
聖君がぽつりと、そう言った。やっぱり、そう思うよね。でも、なかなか思えないから、私はいっつも苦しんでる。

「そうなんだよね。そうなんだけど…」
私が話をしだすと、聖君はまじめな顔で、
「うん…」
って、聞いてくれた。
「走るのも、遅くって、駄目だなって思ったよね?」
「何が駄目なの?」
「かっこ悪いっていうか、聖君も笑ってたでしょ?」
「え?ああ、さっき?違うよ。走るの遅いのに、頑張って走ってきてくれたんだと思ったら、いじらしくなっただけだよ」
「い、いじらしい…?」
「うん」

いじらしいって…？なんだか、恥ずかしくなった。いじらしいって、何？私は顔が熱くなるのを、こらえながら話を続けた。

「そ、それにね。印象も薄いでしょ？蘭とは、話しやすいって言ってたでしょ？すごく楽しそうだったし。菜摘は、好きだったから、意識して話せなかったんでしょ？でも、私のことは、あまり話しても話さなくても、よかったんだよね？」

「え？」

「なんとなく、そういうのわかってたけど…。私、いてもいなくてもいいんだろうなって。だけど、聖君と話せなくても、蘭とバカやって大笑いしてる聖君のこと、見てるだけで、幸せだったし…」

聖君は、黙って顔をふせた。

「蘭も、菜摘も、告白しなよとか、付き合いなよとか、もっと頑張ってとか、言ってくれてたの。でも、告白する勇気もないし、言うつもりもなかったし、彼女になれるなんて思ってもみなかったし、付き合う気だって、なかったんだ」

「そうだったの？」

「…だって、なんとも思ってくれてないなって、なんとなくわかってたし。ふられちゃうだろうなって、それもわかってたし…。それよりも、みんなで会って、わいわいできたらそれでいいって、思ってたんだ」

ああ、私、全部、ぶちまけてない？

「だから、菜摘にも、蘭にも、私が聖君のことを好きなのは、黙っていてって頼んでたの」

「でも、菜摘ちゃん、ばらしてたよ？俺に」

「うん、だから、びっくりして。でも、聖君が、菜摘を好きだってわかって、もう絶対にそっちを応援しなくっちゃって思って…」

「え？」

「だって、だって私のことなんか、好きになってもらえるわけない

って、確実にわかってたし。もう、聖君の恋の応援するのが、きっと私の役目なんだ…くらいに思っちゃって」
聖君が、驚いた表情のまま、固まった。

「…そんなふうに思ってたの？」
「うん」
「そっかあ。じゃ、あれかあ…」
「え？」
「俺が、桃子ちゃんのことを好きだの、付き合おうって言っても、なかなか信じられないよね？」
「うん！」
そうだよ。ありえないことだよ、私の中じゃ…。

「じゃあ、信じられないことが、起きちゃってるわけだ」
「うん…。まだ、混乱してて…」
「……。混乱してるの？頭の中ぐるぐる？」
「うん…。思考回路もゼロ。真っ白」
「じゃ、俺が桃子ちゃんのどこを好きになったかとか、どんなふうに思ってるかとか言えば、信じられるかな？」
「え？！」
どこを？って私の…？

「うん」
知りたい。でも、やっぱり、知りたくないかも…。
「えっと…。小型犬みたい。今も目、まんまるで、ポメラニアン…。あれ？この前はマルチーズだった。あ、そっか。服の色か。今日は、茶色だからか」
「……。ポメラニアン？」
え、ええ…？！
「笑顔は、なんか、綿菓子？」

「綿菓子…？」
ええ～～～？！
「それから、えっと。さっき後ろ歩いてて、ポニーテールが左右に揺れて、面白いなって」
面白いって…。何？それ…。緊張して聞いてたのに、思い切り力が抜けた。

「あはは！」
「え？」
なんで？私、笑われた…？！どうして…？
「ごめ…。あははは。でも、可愛くてさ。桃子ちゃん」
「か、可愛い？」
「ごめん、ああ、腹いてえ…」
なんか、馬鹿にされてる？からかわれてる？そんなことないよね…。でも、私ってそんなふうに思われてた…？
なんだか、だんだん落ち込んできた。「好き」っていうのと違うんじゃないの？ああ、ペットみたいな感覚なの？

「はあ。わかった。ちゃんと白状するから。しっかり聞いてて。それで俺が言うこと全部、信じてくれる？」
聖君は笑うのをやめて、真剣な顔をした。
「……。うん」
もう、わけがわかんない…。しっかり聞いててって言われても…。
「可愛いんだ」
「え？」
……。え？

「可愛いし、いじらしいし、なんか桃子ちゃんといると、やばいんだよね」
「やばい？」

「う〜ん。なんて言ったら1番ぴったりくるかな〜〜。桃子ちゃんのどんな表情も、仕草も、どれ見ても、可愛いなって思えちゃうんだよね」

ど、ど、どれをとっても、可愛い……？！

「あ、今も…。真っ赤になってて、可愛いなって」

私、真っ赤？

慌てて、顔を両手で隠したけど、

「あ、それも…」

って、聖君に言われた。

「嘘だ」

って、言うと、小さい声だったからか、

「え？」

って聞きなおされ、もう一回少し大きな声で、

「嘘だ」

と言うと、聖君が、

「嘘じゃないよ」

って、言った。でも、そんなことを言われても、信じられない。

「小型犬みたいで可愛いし、綿菓子みたいで可愛いし、ポニーテールが揺れてるのとか、後姿とか、歩き方とかも、可愛いなってさっき、後ろ歩きながら、思ってたよ」

「…嘘」

「嘘じゃないって。俺、こんな恥ずかしいこと、嘘つかないよ。嘘で言えないよ」

嘘だ。嘘だ。そんなの…。

「今も、思考回路ゼロ？頭の中、ぐるぐる？」

私は、黙って、こくってうなづいた。

「でも、なんとなく、俺が桃子ちゃんを好きだっていうの、信じら

れそう？」
「……」
まだまだ、信じられそうもない。でも、言えなくって、黙っていると、
「あれ？まだ、信じられない？」
と、聖君は聞いてきた。小さく私はうなづいた。
「さて…、どうしようかな、俺。どうしたらいいかな」
聖君が、小さくため息をした。本当に困っているようだった。

「い、いつから？」
私はこわごわ、聞いてみた。
「桃子ちゃんのこと、好きになったのってこと？」
「うん」
「いつからだっけ？菜摘ちゃんに、桃子ちゃんが俺のことを好きだっていうのを、聞いて…。それで、少し意識するようになって。それからかな」
私が、好きだっていうのを知って…？
「意識して、桃子ちゃんのこと見てたら、すごく可愛い子なんだなって思って」
ええ？ええ～～～？！どうしようもない、駄目な子…じゃなくて？

「えっと…。他には？なんか聞きたいこと、ある？」
聖君に、聞かれた。
「菜摘のことは、本当に、もう？」
「ああ、うん。きっと、桃子ちゃんがいてくれたからさ、立ち直るの早かったんだと思うよ、俺」
「じゃあ、私も役に立てたの？」
「うん、もちろん」
そうなんだ…。嬉しい。
「良かった」

聖君は、しばらく黙ってから、
「店、そろそろ出る？」
って言った。

それから、私の家まで送ってくれると言った。でも、もう少し一緒にいたくって、
「すぐそこにね、大きな公園があるの。けっこう、気持ちがいいんだよ」
って、言ってみた。
「ふうん、じゃ、そこ行ってみたいな」
「うん」
良かった。もう少しいられる…。

「身長、何センチ？」
いきなり歩いていると、聖君が聞いてきた。あ、嫌だな。私身長の話、したくないんだけどな。
「１４７センチ」
と、小さな声で答えた。
「え？そうなの？１５０ないの？」
やっぱり…。そんなことを言われるかなって思ったんだ。
「…うん」

「そっか～。じゃ、俺と３０センチくらい、差があるんだね」
「１７７センチ？聖君」
「１７８センチかな。２年になってから、また伸びたんだよね」
「え？そうなの？私、中３の頃から変わってないよ？」
「成長期終わっちゃった…とか？」
「うん、そうかも」
ガク…。こういう話は、落ち込んじゃう。
「でも、背が小さいのも、可愛いじゃん」

…可愛い？本当に？聖君の顔を見ると、優しく微笑んでて、私も思わず、つられて笑ってしまった。

公園に着くと、ベンチがあって、そこに聖君が腰掛けた。私もその横に、座った。ちょっと恥ずかしかったけど…。

「夕日、綺麗だね」

聖君は、真正面を見ながらそう言った。

「うん。ほんとだ」

本当に綺麗な夕日だった。

「徐々に、日が短くなってるよね」

「うん」

「文化祭、いつだっけ？」

「え？うちの学校？１１月の最初」

「そっか、あと１ヶ月くらいだね」

「うん」

「葉一や、基樹と行くからね」

「うん」

「制服見に…」

「え？何それ？」

「基樹とかと言ってるんだ。どんな制服なんだろうって。ちょっと楽しみ」

「ええ？平凡だよ？紺のボレロに、紺のスカートで、ブラウスには赤のリボンするだけで」

「へ～～。赤のリボン…。ところでボレロって何？」

「ブレザーが短くなったみたいなやつ…」

「へ～～。どんななのかな？」

「聖君の学校は？ブレザー？」

「そう、グレーのブレザー。女子もね。女子はこのパンツの柄で、スカートなんだ」
「チェックの柄なの？可愛いよね」
「う～ん、そうかな？女子もネクタイなんだよ。リボンの方が絶対可愛いよね？」
「どうかな～？わかんないや」
「やっぱ、楽しみだな」

制服が…？もしかして、女子高に来れるのを喜んでるの？とは、さすがに聞けなかった。でも、聖君の制服姿が、かっこよくって、それを思わず口にしてしまった。
「制服、かっこいいね」
「え？ああ、これ？そう？よくあるパターンでしょ？」
「うん。でも、私服もいつもかっこいいけど、制服もかっこいいよ、聖君。ちょこっと大人っぽくなるよね」
「え？そうかな」
「うん…」
かっこいいよ。めちゃくちゃ…。

「……。えっと…」
聖君は、少し照れたようだった。そっか…。聖君でも照れるのか…。私は、なんだか嬉しくなった。下を向きながら、ちょっとにやけるのをこらえていた。
すると、いきなり、聖君の顔がすぐ横にきた。
「え？」
すんごいびっくりして、私は慌てて、顔を遠ざけた。聖君は、すぐにまた、体制を元に戻して、下を向いたまま、黙っていた。

な、なんだったんだろう、今の。心臓がばくばくしている。なんで、顔を近づけたのか。また、からかうつもりだったのか。でも、

何も言わないし…。頭の中がぐるぐるになった。
その時、ふわ…。唇にふわって感触。いきなり、聖君の顔が目の前にきてた。
エ～～～～～～～～～～～～ッ？！
あまりにも突然すぎて、さっきみたいに、遠ざけることもできず…。っていうか…。
今のは、キス？！！！！！！！
な、何してるの？って言ったつもり…。でも、口からは、
「○▽×■☆！」
言葉になってなかった。ううん、声すら出ていなかった。
「だって、最高のキスのチャンスだったじゃん、今…」
ちゃ、ちゃ、チャンスって……！！ってまた、言おうと口をあけても、声が出てこない。
「あ、さっき、一瞬、気をぬいたでしょ？一回目は、回避できたけど、そのあとまた、俺がキスしようとするって思ってなかったでしょ？」
「もう！！！」
やっと、声が出た。もう、信じられない！！いきなり過ぎる。顔から火が出る。私は顔を両手で押さえた。きっと、真っ赤なんてもんじゃない。
「あはは、可愛いよね。本当にさ」
「もう…」
両手で押さえてるから、小さな声しか出なかった。
もう…。からかってるの？本気なの？可愛いって、本当なの？
なんか、わからなくなる…。ぐるぐるだ。
でも、聖君は、そんな私の気持ちなんておかまいなしに、いろん

な話をしてきた。
「そういえばさ、今日さ…」
って学校であった話とか、おじいちゃんは、ヨットに乗ってるんだって話とか…。
初めは恥ずかしさで、下を向いたまま、聞いていたけど、聖君のいろんな話が聞けて、だんだんと嬉しくなってきて…。
いつの間にか、私も、話をしていた。

「猫、飼ってるんだよね？なんて名前？」
「しっぽって言うの」
「へえ、可愛いね。しっぽが長いの？」
「ううん、全然ないの。短いの。なのに、お母さんがしっぽってつけたの。変でしょ？」
「あはは。変だね。猫は1匹だけ？」
「ううん、もう1匹。それは、茶太郎…。でも、ほとんど白い猫で、背中の一箇所が茶色いの。これも、お母さんがつけたの」
「お母さん、ネーミングセンスあるね」
「え？ないんじゃない？普通つけないよ」
「だから、いいんじゃん」
「そうかな～」

「桃子ちゃん、兄弟は？」
「妹がいる。ひまわりっていうの」
「夏生まれ？」
「うん」
「桃子ちゃんは、春生まれ？」
「うん。3月。桃の花の季節…」
「ああ、やっぱり」

「聖君は、クリスマスイブだよね」

「うん。誕生日でも、クリスマスでもいいから、プレゼントちょうだいね」
「ふふ…。じゃ、両方あげようかな」
「まじで？」
「うん」
私がそう言うと、本当に聖君は、嬉しそうな顔をした。

「ひまわりちゃんは、年いくつ？」
「今、中２」
「じゃ、うちの杏樹よりも、一個上か」
「うん。でもね、妹なのに、私より背が高いの。１５８センチもあるんだ」
「へえ…。そうなんだ」
「お母さんも、背が高いの。すらってしてて…。私はおばあちゃん似なんだって」

「あはは。桃子ばあちゃん」
「え？私がおばあちゃんじゃないよ」
「ごめん、でも、おばあちゃんになった桃子ちゃんも、可愛いだろうなって思ってさ」
「え～～。どうして、そんなのイメージするのかな。犬に似てるとか、綿菓子とか…」
「あはは…。だって、似てるから。そんなイメージあるんだもん」
私がふくれっつらをしていると、
「あ、その顔も可愛い」
って聖君が言った。それを言われるたびに私は、真っ赤になってる。

「ほんとなのかな…。もしかして、からかって遊んでる？」
「うん、ちょっと。だって、すぐに真っ赤になるから面白くて」
「やっぱり～～？酷い…」

「あはははは…」
え〜〜?笑ってるし…。本当に私のこと好きなのかな?それすら、疑っちゃうよ。

そんな話をしているうちに、日がすっかり暮れてきて、聖君は、
「送ってくね」
と、私の家のまん前まで、送ってくれた。それから、
「じゃ、またね」
と、すごくさわやかに、聖君は言って、来た道を戻って行った。

家に入り、部屋に行き、ベッドに寝転んで、今日聖君と話した内容を、思い出した。まだまだ、信じられない。あのキスさえ、ふわってした感触だけで、夢でも見たのかなって、そんなふうにも思えてくる。
明日になったら、目が覚めたら、全部夢でしたってことは、ないよね。
全部、私の妄想でしたなんてことは、ないよね。
今日がエイプリルフールってこともないよね。
どっきりじゃないよね…。
いろんなことをあれこれ、考えながら、また、聖君の言った言葉を思い出していた。

第１０段階　好きな人とのメール

しばらく聖君とのことを思っていたけど、お母さんが呼びに来て、夕飯を食べに下に行き、すぐにお風呂に入った。
それから、部屋に戻り、聖君にメールをしてみようかって思った。
＞今日は、ありがとう。
それだけの短い文だけど、他に思いつかず、ドキドキしながら、そう書いて送った。聖君、メール返してくれるかな…。今、何しているのかな…。

＞こっちこそ、楽しかった。サンキュー。今、何してるの？
わ！すぐに、聖君から、メールが来た…！私もすぐに、返信した。
＞夕飯食べて、お風呂に入ってた。聖君は？
＞俺は、勉強中！すごい？えらい？
わ、勉強中に私、メールしちゃったんだ。悪いことをしたと思い、
＞ごめん。邪魔したね。勉強続けて。
と、メールをすると、
＞うそうそ！勉強してないよ。全然頭にはいらなくて。今日はもう、勉強できなさそう。
って、返ってきた。

＞え？そうなの？なんで？
って、聞いてみると、
＞そりゃ、やっぱり、桃子ちゃんのこと考えちゃうから…。なんつって（＞▽＜）
っていう、顔文字まではいったメール…。
ああ、また…。こうやって、きっと、からかってる。でも、嬉しい。でも、絶対にからかってる…。しばらくどう返すか悩んじゃって、

＞冗談ばかり！そういうの、本気にしちゃうから、やめてね。（＜
|＞）
と、返した。

＞冗談じゃないし、ほんとだし。だから、本気にしていいし。
また聖君から、すぐに返信がきた。
ええ…？ほんとに…？からかってるんじゃないの？じゃあ、私も、
＞私も、ご飯も食べれなかった。
っていうメールを送ってみた。
＞なんで？
聖君が、今度は聞いてきた。
＞だって、聖君のこと思うと、胸いっぱいになって、お腹も空かな
いから。
ものすごい恥ずかしいことを、書いていると思う。でも、送信を
押しちゃった…。ああ！

しばらく、返事が返ってこなかった。ああ、呆れてる？送らなか
ったら良かったかも…。って落ちこんでいたら、返信が来た。
＞て、照れます…（＾＾〃
また、顔文字もはいっている可愛いメールだった。
照れますって…。可愛い。なんか、聖君のイメージがどんどん変
わっていく。
嬉しいやら、可愛いやらで、私はしばらくにやけていたけど、返
信しなくっちゃって思って、さっきの聖君から来たメールの真似を
してみた。
＞でも、ほんとのことだし。

また、しばらくメールが来なかった。でも、少しすると、
＞もう、あとは寝るだけ？
ってメールがきた。

＞ううん。髪を乾かして、明日の用意をしたら。
＞ああ、そっか。まだ、髪濡れたままなんだ。長いから乾かすの大変だね。

＞聖君は、もう寝るだけ？
＞これから、風呂入る。あ、そういえば、夕飯もまだだった。
＞え？お腹空かないの？
＞さっき、チーズバーガー食べたから。
＞ああ、そっか。それでも、夕飯も食べるの？
＞食うよ。余裕で入る。

＞そうだよね、よく食べるよね、いつも。それでも、痩せてるよね。
＞俺、痩せてる？
＞ごめん。痩せてるんじゃなくて、太ってないって意味で。
＞でも、けっこう筋肉はこう見えてもあるよ。腹筋は割れてないけどさ。あ、それとも、もっとマッチョな方が好き？
＞マッチョは苦手かも。
＞そうなんだ。じゃ、どんなやつが好み？

好み…？えっと…。しばらく悩んだけど、どう考えても、こうしか浮かばなくて、素直に恥ずかしいけど、送ってみた。
＞私の好みのタイプは、聖君かな。
また、しばらくメールが返ってこなかった。あれれ？それから少しして、
＞だ、だから…、そういうの、照れます。俺！（＞人＜）
っていうメール。か、可愛い…。なんか、めちゃくちゃ、聖君って可愛い…。

＞じゃあ、聖君の好みのタイプは？
まさか、私の名前は書いてこないだろうなって思ったけど…、

＞えっと…。自分でもわかんない。今まで好きになっていた子は、けっこう元気で明るい子。
と、書いてあった。
ああ、墓穴。落ち込む…。私と真逆かもしれない。そうだよな…。だって、菜摘のことが好きだったんだもんね・・・・・。

じゃ、私のことは?ってまた、不安になる。しばらく返信を送れないでいると、また聖君からメールが来た。
＞でも、桃子ちゃん好きになってるし、だから、タイプって別になかったのかも。
ほんと…?なぐさめの言葉じゃなくて…?
携帯の画面を見ながら、私はしばらくぼ〜〜ってしていた。なんて返信しようかな…。なんて…。本当に?って聞いてみるか。それとも…。

＞私ももっと、明るくて元気な女の子になりたいな。
そうしたら、聖君の好みのタイプになれる…。そんなことを思って、メールした。すると、
＞今のまんまでいいよ。俺には、十分です。
っていう返事。俺には十分…?どういうことかな。そのまま、聞いてみた。
＞俺には、十分ってどういうこと?
しばらくして、返信がきた。
＞だから、今のままで、十分、可愛いってこと。

可愛い?本当に?私なんかの、どこが可愛いんだろう…。
＞明るくもないし、内気だし、とりえないし、コンプレックスだらけだよ?
＞それでも、可愛いと思っています、俺。(＾＾ゞ
……。聖君のメールは、可愛いだけじゃなくて、あったかいし、

優しい。思わず、涙が出そうになった。

＞ありがとう。
ってメールを返すと、
＞どういたしまして。
って返って来た。それから、
＞髪乾かした?ちゃんと乾かして、寝ないと風邪引くよ。じゃ～ね（＾＾）
っていうメールが来て、そのあと、メールが来なくなった。

私は、髪が塗れたまま、ベッドに横になり、もう一回メールを見直した。嬉しくて、嬉しくて、嬉しくて、涙が出た。ドキドキして、ぎゅって携帯を胸に抱きしめた。

信じられない。聖君からメールが来ることだけでも、信じられない。そのうえ、こんな可愛いメールで、すごく嬉しいことがたくさん書いてある…。

全部を保存した。この言葉はすべて、宝物だ。きらきら輝く、そして優しい宝物だ…。

それからも、聖君はよく、メールをくれた。顔文字の入った、可愛いメールだし、写メも入っている。意外だったな。こんなメールをくれるなんて思ってもみなかったから。

ある日、葉君からも写メが送られてきた。聖君と基樹君のふざけあって笑っている写真だった。すぐに、聖君に、葉君から写メをもらったよって、メールをしたら、
＞どんな写真?!
って、メールが来た。だけど、私は、
＞内緒。
と、送った。そうしたら、

＞え～～～～～～～～～～～～（（＞д＜））
それから、メールが来なくなって、１０分後、
＞げ～～～。その写真は即行、消去すること！
って、メールが来た。どうやら、葉君にその写メを送ってもらったらしい。大笑いしている、聖君。可愛いんだもん。絶対に消去なんてしないんだ。

＞今度の、土曜日うちの店に遊びに来ない？
聖君から、そんなメールが突然来た。わあ…。私一人で行くのは初めてだ。緊張する！でも、もちろん行くってメールした。
そして、土曜日、改札口で聖君は待っていてくれて、一緒にれいんどろっぷすに行った。

「こんにちは」
お店に入ると、聖君のお母さんもお父さんもいた。それから、私と同じ位の背丈の、真っ黒に日焼けした、ショートカットの女の子がいた。
「うわ～～～～！可愛い～～～！」
いきなり私を見るなり、そう叫んだから、ものすごくびっくりしてしまった。

「あ、妹の杏樹。杏樹、桃子ちゃん…」
聖君が、すんごい簡単に紹介してくれた。
「こんにちは、はじめまして。桃子ちゃんですね。可愛い～～。名前も可愛い。お兄ちゃんにはもったいない。可愛い～～！」
「……」
ああ、どう反応したらいいのか…。すると、聖君が杏樹ちゃんの後ろから、
「うっせーよ、お前は～～」
って、頭を軽くこついていた。

「だって、こんな可愛い人が、お兄ちゃんの彼女だなんて、信じられないよ」
「おいっ！」
また、聖君は、杏樹ちゃんの頭をこつんってしてた。いいな…。
お兄ちゃんっていうのも、いいな～～。
聖君は、きっと優しいお兄ちゃんなんだろうな～。

それから、二人でゲームセンターに行き、ゲームをした。聖君は何をやっても、高得点。私は何をやっても悲惨な結果だった。
ゲームセンターをあとにしながら、私は聖君に、
「杏樹ちゃんのこと、可愛がっているんだね」
ってちょっと、羨ましそうに言った。すると、
「桃子ちゃんのことも、可愛がってますよ。俺」
って言いながら、頭をなでなでされた。ええ～～？私は、子ども？犬？
「犬じゃないもん」
って言うと、あははって笑われた。

浜辺に行き、手をつないで歩いた。それから石段に座り、しばらく二人でぼ～～って海を眺めた。
「海って、ほんとあきないよな」
聖君が、そうつぶやいた。
「うん。そうだね」
「寒くない？」
「うん。大丈夫…」
もう、すっかり秋の涼しい風になっていた。

「菜摘から、メールがあったんだ」
「え？菜摘ちゃんから？」

「うん。月曜日、一緒に学校行こうねって」
「…そうなんだ」
「葉君と、蘭と、基樹君と今日は、遊びに行くって」
「ああ、４人で会ってるみたいだね」
「うん…。良かったよね」

「そうだな。もう、大丈夫かもな…」
「聖君と、仲良くねって書いてあった」
「え？」
「聖君の彼女は、桃子だったら許すって…」
「ふうん。そっか…」
聖君は、遠くを見ながら、そう答えた。

「妹二人から、お許しが出たって事か～～」
「え？」
「あはは…。杏樹も、桃子ちゃんのこと気にいってたから。あ、うちの親もだけど」
「あんなに可愛い可愛いって言われて、びっくりしちゃった」
「だって、可愛いじゃん。桃子ちゃん」
聖君は、私の方を見ながらそう言った。私は照れて、
「わかんないや。それ…」
って、下を向いてつぶやいた。

「絶対、女子高で正解」
「え？」
いきなり聖君がそんなことを言うから、また私は顔をあげた。
「共学だったら、大変だったよ、きっと。俺、身が持たないよ」
聖君は、ちょっと照れくさそうな顔をして、そう言った。

「なんで？」

「やきもち、やきっぱなしだったよ」
「え？やきもち？やきもちなんて、聖君、やくの？」
驚いた。
「やくよ。思い切り俺、やきもちやきだったみたい。自分でも知らなかったけど…」
聖君は、ぼりって頭を掻いてそう言った。
「そ、そうなんだ」

嬉しい…。でも、信じられない。ほんとに？なんかもう、信じられないことばかり起きるよ。
「で、でも…。私、聖君以外の人、どうでもいいから。そんなにやきもちなんてやかなくても…」
「え？」
ちらって、聖君を見たら、頭をがりがり掻いて、照れていた。
「あ～～。そういうの、俺照れます…」
この前の、メールみたいなことを聖君は言った。そんな聖君も、可愛いいな～～。

そして、しばらく海を見ながら、いろんな話をして、それから、聖君は駅まで送ってくれた。
6時から聖君は、お店のお手伝いをしているから、あまり遅くまでは一緒にいられない。それでも、私には十分すぎるほどの、幸せな1日だった。

次の土曜日には、聖君と、多摩動物園に行った。ゴリラやサルを見たり、ライオンバスに乗ったり。お弁当を二つ作っていき、お昼は一緒にお弁当を食べた。
まだ、私と聖君は、他のみんなと一緒に行動していなかったけど、今度は6人で来たいねって話した。

動物園でも、手をつないで歩いた。聖君はいつも、ゆっくりと歩いてくれてた。片方の手はジーンズのポッケに入ってて、もう片方の手でつないでくれる。

いっつも、聖君の方から、

「はい」って手を出してくれる。まだ、私の方からは、手をつなげない。どうしても、恥ずかしくて…。

聖君は、いっつも優しくて、楽しく話をしてくれる時もあるけど、たまに、ベンチに座ると、目をつむって、風を感じたり、緑を見たり、空の雲の流れを、見ている時があった。それは、海でも同じだ。

そういえば、花火も、ひたすら見て喜んでいたっけ。そういう時の聖君は、言葉数が少なくなる。

私も、そういう時には一緒に、風を感じてみたり、緑を眺めたり、雲の流れを目で追った。それと、聖君の顔を交互に見ていた。聖君は、そんな時にも、優しい表情をしていた。

思い切り、蘭や基樹君とはしゃいでた時には、見なかったな…、こういう静かな聖君。いつも明るく、はしゃいでいたから。

初め、聖君が静かな時、私といてつまらないのかなって思ったけど、そうじゃなかったんだな〜。

「今日の空、秋晴れってやつだね、すんげえ気持ちいい」

「うん…」

「この動物園いいね。自然たくさんで…」

「うん、子供の頃、よく両親に連れてきてもらった」

「そうなんだ。じゃ俺が、海や水族館行ったのと一緒だね」

「うん」

「いいよね。俺、子供生まれたら、動物園、家族でお弁当持って来たいよ」

「え？」
「よくない？そういうの。俺、動物園ってあまり来たことないよ。ま、水族館が近くにあったからかもしれないけどさ」
「…子供が生まれたらとか、考えるの？」
「え？考えない？結婚とか…」
「け、結婚？！」

「あれ？女の子って考えないの？」
「考える…けど。なんか、思い切り妄想って言うか」
「あ！それ聞きたい！！！！」
「やだ。言わないよ～～」
「いいじゃん。減るもんじゃなし。妄想なんでしょ？じゃ、なんでもありだよ。例えば、アラブの石油王と結婚とかさ。ハリウッドスターと結婚とかもありだし」
「そんなの考えたことないよ～～」
「あれ？そう？」

「聖君は、あるの？スターと結婚とか…」
「ないない！」
「でしょ？」
「俺は…、そうだな。多分、早くに結婚して、早くに子供が出来て、子供といっぱい遊んで…とか。あ、でも、その前にちょっとやりたいことがあるからな～」
「何？やりたいことって？」
「父さんと、いろんな海に行って、潜ること。世界中行きたいね」
「…スキューバダイビング？」
「うん。それ、父さんの夢でもあるんだ。俺、大学行ったら、さっそく行きたいって思ってるんだ」
「へえ…。そうなんだ」

「父さんは母さんも連れて行くって言ってた。母さんは潜れないから、まあ、観光は一緒にできるか」
「ふうん…。いいね。家族みんなで行くんだ」
「あ、結婚してもできるか。俺も奥さん連れて行ったらいいんだもんね？」
「え？うん…。そうだね」
ドキってしちゃった。私、一緒に行けるのかな…とか。でも、結婚なんてまだまだ先だし、それが私かどうかなんて、わからないし…。

「桃子ちゃんは、やりたいこととかってあるの？」
「私は、まだ決まってない」
「そうか。そうだよね。まだ高1だもんね」
「うん…。だけど…」
「ん？」
「聖君のお母さん見てて、いいなって思ったんだ」
「なに？何が？」
「カフェとかやるの…。可愛いお店いいな。私そんなにお料理嫌いじゃないし」
「うん。今日のお弁当も美味しかったよ」
「ほんと？」
「ほんと！」

嬉しい…！！！
「あのね…。私お菓子作るのも好きなんだ」
「へえ。そうなんだ」
「うん…。クッキーとか、ケーキとかもたまに作る」
「え？まじで？それ、食べてみたい」
「うん。じゃ、今度クッキー作ってくるね」
「まじ？すげえ。楽しみ！」

「あ、でも、そんな期待しないで…」

「うん、わかった。あ！そうだ。俺のおばさん、父さんの妹なんだけど、パテシエだよ。すんげえケーキ美味しいんだよ」
「え？！本当？」
「うん。前はれいんどろっぷすでも、おいてたけど、今は伊豆のばあちゃんの店で働いてる」
「いいな～～。食べてみたい」
「あ、じゃ、行こうよ。いつか、ばあちゃんの店」
「え？伊豆でしょ？」
「うん。来年の夏、きっと俺また、行くと思うよ。あ、そだ、俺受験か～～。でも、1日か2日くらいなら、気晴らしに行けるかな」

「来年の…、夏…？」
「うん。ずいぶん先の話になっちゃうけどね」
「その時まで、私…」
「え？」
「彼女でいられるかな？」
「へ？」
私はなんだか、不安になった。こんな私でも、ずっと彼女でいられるんだろうか…。

「……。え～～と…。俺多分、そんなに簡単に別れるつもりはないけど」
「うん。ごめんね。変なこと言っちゃった」
「うん。ほんとだよ…」
「ごめんね」
「いいよ。そんな未来の話ばっかりしても、しょうがないよね。今は今」
「え？」

「今を、生きることの方が、大切だもんね」
「今？」

「あ、これ、父さんや母さんがよく言うんだ。今を生きるってことが大事なんだって。先のことよりも、今目の前のこと、楽しんで、受け止めて、今を感じて、生きていけってさ」
「今を感じて？」
「うん。例えば今日みたいな綺麗な空とか、雲とか、風とか、緑とか。今しか味わえないこと、たくさんあるじゃん。桃子ちゃんが作ったお弁当の味とか、今日の桃子ちゃんとか…」
「今日の？」
「そ。また先週とは違ってる」
「え？私違ってる？」
「同じ日がないように、同じ桃子ちゃんはいないんだよね。だから、毎回新鮮」
「……」

そうか。そんな風に思ってたんだ。あ…、だから？
「だから、さっきも、目をつむったり、空を見上げたりしてたの？」
「うん。桃子ちゃんも一緒に、感じてた？もしかして…」
「うん。まねしてた」
「やっぱり？静かに目を閉じたり、黙って空見てたから、一緒に感じているんだろうなって思った」
「そっか…。それでなんだ…」
「え？」
「時々、聖くん静かなの」

「ああ、まあね。友達といる時には、あまりしない。あ、葉一とはするかな。なんか葉一は黙ってても平気だから」
「…平気？」

「遠慮がいらないって感じかな。他のやつだとつい、はしゃいで明るくしちゃう。バカやったりして、盛り上げちゃうんだよね。学校でもそうかな」
「そうなの？会った時も、蘭や基樹君といつも、はしゃいでた」

「ああ、そうそう。いつも、そんな感じ。まあ、それも俺の1部だろうけどさ。あれはあれで、楽しいし。でも、俺、けっこう静かな時も多いんだ。家にいたら静かだし。父さんや母さんとも、海行くと、ぼ～ってしていたりするし。あ、話をする時には、けっこうすることもあるけど」
「じゃあ、私といる時も、自然体でいるの？」
「え？」
「静かでいる時多いし…。初めは、私といてもつまらないのかなって思ってたけど、最近違うのかなって、さっきも思ってたところ」

「え？つまらないって思ってたの？」
「私はつまらなくないけど、聖君がそう思ってたのかなって」
「あはは！思うわけないじゃん！見てるだけでも桃子ちゃん、面白いのに」
「……」
お…。面白いって…？
「そうだな。俺が静かな時は、さっきみたいに、今を感じてる時と、あとは、桃子ちゃん、可愛いって思って見てる時かな」
「え？！」
「なんか、隣にいるだけで、けっこう嬉しいしさ。満足しちゃうんだよね」
「……」

わあ～。なんか、嬉しいことといっぱい言ってる。でも、聞いてて恥ずかしい…！でも、私も、一緒にいるだけで、すごく幸せ。

「さて、あとはどこ回る？なんの動物が見たい？」
「コアラ！！」
「え？コアラいるの？」
「うん！」
二人でまた、手をつないで、歩き出した。なんだか私は嬉しくて、
「早くコアラ見に行こうよ！」
って、走り出していた。

第１１段階　好きな人の別の１面を知る

１１月になり、聖君、葉君、基樹君がうちの学校の文化祭に来た。私と菜摘がウエイトレスをしているときで、なんだか、ウエイトレス姿を見せるのが、恥ずかしかった。

菜摘は普通にデニムのエプロンをしてたけど、私はひらひらの白のエプロンに、ひらひらの白のレースのカチューシャまでさせられていたから。

その日なんだか、聖君はあまり、機嫌がよくなくて…。どうしたのかなって思っていたら、

「他のやつにそういう格好、あまり見せないで」

ってぽつりと、低い声で言った。あ！やきもちなのかな。他の男子にも声かけられていたから…。

「ごめんね」

と謝ったけど、内心、嬉しかった。

休憩の時間が来て、菜摘、葉君、聖君と私で、回ることにした。なんか、菜摘は明るかったけど、無理をしているようにも見えた。

私と聖君のことを、やたらとからかい、そのたびに聖君は、まるで杏樹ちゃんにこつくみたいに、菜摘の頭をこつんってしていた。

「杏樹ちゃんといるみたい」

思わず、私はそう言ってしまった。でも、菜摘は、

「聖君のこと、兄貴って呼ぼうかな」

そんなことを言い出した。

そして、葉君と付き合ってるんだ、だから、二人で行動するねと言って、葉君と腕を組んで行ってしまった。

葉君と付き合ってるのは、本当みたいだった。でも、やっぱりま

だ、聖君の前では、無理をしているみたいだ。
それからは聖君と二人で、文化祭を回った。焼きそばを食べたり、ジュースを飲んだり…。

そして、今度は聖君の学校に行きたいって言ってみた。11月の終わりに文化祭があるんだそうだ。そうしたら、聖君は、そんなに楽しいものじゃないよと言った。
「クラスの出し物もないよ。俺らのクラス、やけにやる気のないやつが集まってるし。俺、部活もしてないし。ただ…」
「ただ?」
「ちょっと、体育館で、出し物する程度」

「え?何をするの?」
「……。すげえ下手くそだから」
「何?」
「俺、バンド組んでて、演奏する予定」
「え?!」
バンド?知らなかった、それ。初耳!

「軽音に入ってる友達がいて、よく一緒にカラオケにいって、歌うたったりしてて。去年も頼まれたんだけど…。俺、文化祭だけ、借り出されるんだよね」
「何の楽器?」
「ああ、俺はボーカル」
「歌うの?!聞きたい!!!!」
「駄目!絶対、駄目!」

「なんで?聞きたいし、見たいよ。そのバンドには、葉君と基樹君いないの?」
「いないよ。俺だけが、飛び入り参加、みたいな感じ」

「見たいな～～」
「わかったよ。みんなで、来る？」
「うん！」
すんごい楽しみ～～！！聖君の新たな部分、また見ることが出来る。学校にいる聖君は、どうなんだろう？わくわくする。

校門で聖君と別れた。その時ちょうど、クラスメイトの子がいて、聖君を見て驚いていた。彼氏？かっこい～～って…。そうだよね。他の子が見ても、かっこいいと思うよね。
なんだか、そういうことを言われると、本当に私、聖君の彼女なのかなって思ったりもする。
聖君は、そんな友達の「きゃ～～」っていう声にも振り返らず、そのまま去っていった。
多分、多分だけど、照れていたんだと思う。いつものように…。

１１月最後の週の土曜日、聖君の高校の文化祭の日がやってきた。私と蘭と、菜摘はその日を心待ちにしてて、わくわくしながら学校に向かった。行くまでの間も、聖君の歌、楽しみだねってずっと言っていた。
学校に着くと、葉君が待っていた。基樹君は、文化祭実行委員会というのに、入っているらしく、あとで、合流すると言ってた。聖君のライブの時には、一緒に見れるって。

葉君が私たち3人のことを、案内してくれた。私たちの学校とは、まったく違う雰囲気。男子がいると、こんなに活気が出るのか。
葉君から少しでも遅れを取り、後ろから歩くと、
「ねえ、そこの彼女。俺らのクラスに来ない？」
とか、
「案内してあげるよ」
と声がかかる。腕までつかまれ、

「よ、葉君！」
と私は、助けを求めてしまった。

「桃子！」
「桃子ちゃん！」
菜摘と、葉君に助けられた。
「桃子ちゃん、俺と、菜摘の間に歩きなね。変なのにつかまっちゃったら、俺があとで、聖に半殺しにあっちゃうよ…」
「ご、ごめんなさい」

「そういう聖君は、彼女ほっておいて、何してるの？」
蘭がそう聞いた。
「リハーサルとか、バンドの準備してる。あと、３０分もしたらライブ始まるからさ」
葉君が、そう答えた。
「そうなんだ」
「人気あってさ。午前、午後の２回も出るらしいよ」
「バンド人気あるの？」
「うん、去年でてやたらと受けたから」
「へ～。楽しみだね、桃子」
菜摘がそう言った。
「うん…」

楽しみだけど、それだけ女子に人気があるってことだよね。ちょっと複雑…。
「あ、言っとくけど、あいつ、男子に人気あるんだよ」
私の不安を察知したのか、葉君がそんなことを言い出した。
「え？」
「なんか、男から見てもかっこいいみたいな。後輩にも人気あるしさ」

「へ〜〜。いつもの聖君とは、違う感じ？」
蘭が葉君に聞くと、
「うん。多分ね」
と、葉君は笑って答えた。
どんななんだろう。そういえば、聖君もいつもの俺とは違うって言ってたっけ。

体育館に着くと、すでに満員。私たちは、生徒の間をぬって、少しでも前に出ようって、出て行った。それでも、中間までいけないくらい、人がたくさんいた。
椅子は横に何列か並んでて、そこには、先生や、父兄の人が座っていた。生徒はみんな、立っていて、今か今かと始まるのを、待っている様子だった。

5分前、アナウンスが流れた。
「お待たせしました。軽音楽部のライブが、あと5分で始まります。みなさん、前の人を押したり、物を投げたりしないよう、また、先生方、父兄の皆様、椅子に乗らないよう、気をつけてください」
先生が椅子に乗る〜〜？面白いことを言うなって思っていたら、
「去年、いたんだよね。ノリノリで椅子に乗っちゃったおっさん。どっかのお父さんみたい。それ見て、あやうく、聖のお父さんも乗りそうになって、隣にいた、聖のお母さんに止められてた」
って、葉君が教えてくれた。え〜〜、そんなにノリノリになっちゃうの？
どんななの？まったく想像が付かない。

5分が立ち、会場全体が暗くなった。そして、いきなりのドラムの音。それから、ギターの音が鳴り響き、ぱっとステージが明るくなった。
マイクスタンドを持って、横を向きながら、静止している聖君が、

ステージの中央にいて、スポットライトを浴びていた。
それとともに、すごい黄色い声。
「きゃ～～～～～～！」
ええ？ええ～～？
私も菜摘も、蘭もびっくりしてしまった。

そのあとに、女子からの、
「聖く～～～～ん！」
の声と、男子からの、
「聖～～！」
「聖せんぱ～～～～い！」
っていう声と…。とにかく、すごい声援が飛ぶ。

そして、聖君は、歌い出した。制服のＹシャツに、制服のパンツ。ネクタイはだらって垂れてて、Ｙシャツのボタンは、少し外れていた。
それに、髪…。ところどころが、金色で、いつもサラサラなのに、何かで固めているみたいだった。
歌い方も、すんごいさまになってて、声もすんごいかっこよくって、歌もすんごい上手で、どこが「下手」なのよって思った。

私の周りを見ると、聖君をハートの目で見ている女子が何人もいて、以前もてないって言ってたけど、どこが？って思った。それに、男子にも人気があるみたいだけど、しっかりと、女子から黄色い声援があがっているじゃないか。
とにかく、みんなノリノリ。隣で菜摘も、蘭も、
「聖く～～～ん、かっこいい～～～！！！」
と叫びながら、のっていた。

ええ～～～～～～～～・・・・？

葉君は、リズムに合わせてゆれながら聞いていた。
私は初め、圧倒されてしまい、目が点。でも、聖君を見ている間に、どんどん引き込まれ、聖君しか見えなくなった。
かっこいい。すんごい、かっこいい。かっこよすぎるよ…。
いつもの、あんな可愛い顔文字のメールを送ってくるような、聖君とは別人だ。

「学校では、硬派で通ってて…」
て言ってたけど、ほんとだ。男子から人気があるのも、後輩から人気があるのも、わかる気がする。
だって、絶対に男子から見てもかっこいいもの。

3曲を歌い、
「ありがと〜〜〜!」
って言って、聖君はさっさとステージから、去っていったけど、アンコールの声がやまず、もう一回バンドのメンバーが出てきた。
そして、最後に聖君が出てくると、また、
「きゃ〜〜〜〜!」
の歓声。もう、芸能人並み。

「え〜〜、どうもありがとうございます。もう1曲歌いたいと思います。あ、午後もステージあるんで、そんときにも見に来てください。んじゃ、アンコールの歌は、『根性なし』!」
「きゃ〜〜〜!」
と、また黄色い歓声。
そして、またマイクを持って、聖君がノリノリで歌い出した。ものすごくかっこいい、ロック歌手みたいだ。

終わって、また両手を振って、さっさとステージから去っていっ

た。
「聖く〜〜〜ん！」
まだ、叫んでる女子がいたけど、みんなぞろぞろと、体育館を出て行った。

「は〜〜〜〜〜」
私、菜摘、蘭の3人はため息をついた。そしてしばらくその場で、ぼ〜〜ってしてた。そこへ、
「あ！いたいた！やっと会えた」
と、基樹君がやってきた。
「基樹〜〜！どこにいたの？」
と、蘭が大声で言った。

「みんなどこにいるんだろうって、探したけど、ステージ始まったから向こうで観てたよ。あ、どうだった？桃子ちゃん、聖のやつ」
「え？」
私は声にもならないくらいの感動をしてて、何も言えなかった。その代わり、菜摘と蘭が、興奮しながら、
「すごかった！かっこよかった！びっくりしたよ。いつもの聖君じゃないよ」
ってさわいだ。

横のほうにまだ、何人かの女の子がいて、私たちを見た。
「基樹君、知り合い？」
と、一人が聞いてきた。
「ああ、うん、まあ。ちょっとね…」
基樹君は、少し、困った感じでそう言った。いつもの基樹君なら、蘭のことを、
「俺の彼女」
とか、元気に言いそうなのにな。

「聖は？こっちに来るの？」
葉君が、基樹君に聞いた。
「ああ…。来るんじゃね？」
ちょうどその時、横にいた女の子が、
「あ！聖君…！」
と言った。その女の子が見ている方向を見たら、聖君が一人で、こっちに向かって歩いてきていた。さっきのまんまの格好で…。

「よ！聖！お疲れさん。今日もかっこよかったぜ」
と、基樹君が聖君と、ハイタッチをしていた。
「聖、すげえ、何この頭。どうしたの？」
葉君が、笑いながら聖君に聞いた。
「これ？バンドの連中が勝手にいじってさ」
聖君は、そう言ってから、額から流れる汗を手で拭いた。

「あっち～～～！なんか飲みたい。冷たいもん」
聖君がそう言うと、
「聖君…。これ、ペットボトルまだ、開けてないのあるから、飲む？」
隣にいた、女の子の一人が言ってきた。聖君は、その女の子の方を見て、
「ああ、いいや。水ならあるし」
と、片手に持っていた、水のペットボトルを聖君が見せた。あれ？ああいうの、ありがとうって受け取るかと思った…。

聖君は、その女の子たちが、
「かっこよかったよ」
「その髪似合うね」
「午後も見に来るね」

と声をかけても、
「ああ」
「そう？」
「うん」
と、すんごい言葉数が少なくて、それも、ほとんど女の子の方も向かずに返事をしてて、すぐに基樹君と、葉君に話をし出した。

「もうどっか、回った？」
「まだ。俺、実行委員だよ。午後からじゃないと、時間取れない。お前のステージだけ、様子見ってことで、見に来れた。あ、蘭、悪いけど、午後から落ち合おう。それまで、こいつらと行動してて」
「うん、いいよ。お昼は？」
「昼は一緒に食える」
そう言うと、基樹君は、体育館から出て行った。

女の子たちはまだ、横にいて、
「え～？もしかして、基樹君の彼女？」
と小声で話をしていたが、丸聞こえだった。
「さて、どこ行く？それより、お前ずっと今日その頭？」
葉君が、聖君に聞いた。
「うん、午後もあるから。メッシュって取れんの？これ」
と、聖君が言うと、
「髪洗えば、取れるんじゃない？」
と、菜摘が言った。

すると、また横にいた、女の子たちが、ひそひそ話をした。
「まさか、聖君の彼女？」
どうやら、菜摘のことを言ってるらしい。
「あ！違います！私は葉君の彼女です」
と、菜摘は明るくその子たちに言った。すると、その女の子たちは、

「あ」
と、こっちを見て、ちょっときまずそうな顔をした。でも、すぐにまた、小声で、
「違うじゃん。やっぱりいないんじゃないの？彼女。大丈夫だよ」
と言っていた。みんな、聖君のファンか、それとも、あの中に聖君のことが好きな子でもいるのか…。

聖君を見ると、そんなのまったくおかまいなしで、水をぐびぐび飲んでいた。
「回るって言ってもな～～。そんなに面白いところ、ないよ」
と聖君は、口からこぼれそうになった水を手で拭ってから、そう言った。
「どっかのカフェでも入るか。木戸のクラス、やってなかったっけ？」
「ああ、木戸がそういえば、カフェやるから来いって言ってたっけ。行くか？」
そして、5人で、ぞろぞろ歩き出した。

体育館から出て、渡り廊下を歩いていると、
「あ、聖先輩、かっこよかったです」
と1年生らしい男子が、声をかけてくる。
「おお！午後も見に来いよ！」
と聖君が、声をかける。さっきの女の子に話すより、ずっと、にこやかだ。

「おお！聖！かっこよかったよ！」
他の男子生徒も、声をかける。それに、
「サンキュー」
って笑顔で返す。どうやら、男子には答えて、女子には、無愛想みたいだった。

「ひ〜じ〜〜り〜〜〜〜!!!!!」
って走って飛びついてきて、聖君の髪をぐしゃぐしゃにしている人がいた。聖君のお父さんだ。
「やめろって!父さん!」
聖君が、そう言うと、
「この頭、最高な!これなら、いくらぐしゃぐしゃにしても、気になんないじゃん」
って聖君のお父さんは笑った。

その横で、聖君のお母さんも、
「かっこよかったわよ。お店があるからもう戻るけど、午後も頑張ってね」
と、聖君に言っていた。
「うん。サンキュ」
聖君は、小声でそう言った。

「あら、桃子ちゃんも見に来てたの?びっくりしたでしょう。この頭。私もびっくりよ」
「はい…」
私が、返事に詰まっていると、菜摘が、
「こんにちは!」
と声をかけた。

「菜摘ちゃん!久しぶり。またお店に遊びに来てよ」
と聖君のお母さんが、声をかけた。
「はい。ぜひ今度、行きます。それと、父が、聖君にうちに来てもらえって言ってました」
「そうなの?聖、ぜひ今度、お邪魔させてもらったら?」
「ああ、うん」

聖君は、小さくうなづいた。

「じゃあね、みんなゆっくりしてって」

そう言うと、聖君のお母さんとお父さんは、学校をあとにした。

「あ〜〜、ただでさえ、ぐしゃぐしゃなのに、父さんは、もう〜〜〜」

と聖君は、自分の髪を直していた。

「どうせ、ぐしゃぐしゃだから、いいんじゃないの?」

と、葉君が言った。

「だよな。鏡見てないし、どうなってんだか…」

「鏡見てないの?」

と私が聞くと、

「うん。ステージの裏で、いきなり、ディップで固められたから。どう?かなり変?」

聖君が、聞いてきた。

「ううん、かっこいいよ。今も大丈夫」

「…え?」

聖君が、耳を傾け、聞いてきた。あれ?声小さかったかな。私はもう一回、聖君に、

「かっこいいよ」

って言うと、また、

「え?」

って…。

「お前、しつこい、何度桃子ちゃんに言わせてんの?」

と、葉君が、聖君にそう言った。

「だって、さっきから、何の感想もないんだもん…」

「ごめん、かっこよかった。すごく…ね?菜摘。蘭」

「うん、いつもと全然違う。びっくりだよ。それに人気あるね、もてもてじゃん」
「う～～ん、そうなんだよね。なんか、男子生徒にもててるんだよね。俺」
と、聖君が言った。

校舎に入るとさらに、いろんな人が、
「さっきのステージ良かったよ」
とか、
「聖君、かっこよかったです」
とか、言ってきた。

先輩らしき人には、
「あざ～っす」
って頭を下げて、女子には、
「どうも」
って、一言だけ返す。

それに、声をかけないで、遠巻きにしている女の子もいっぱいいて、
「あ、聖先輩だ。かっこいい」
って声が、耳によく入ってきた。
それに加えて、
「あの一緒にいる子達、何？」
って声も…。

階段を上ると、すぐの教室に聖君と葉君が、入っていったので、私たちもあとに続いた。
「おお！聖！来たか～～。ステージどうだった？」
どうやら、さっき言ってた、木戸君って人らしい。

「おお。大成功」
と聖君が、ピースをした。

周りにいた女の子が、
「見たよ。かっこよかった」
とか、
「見に行きたかったな」
とか、声をかけた。でも、やっぱり、
「ああ」
「うん」
くらいしか言わない。この男子に対してと、女子に対しての差は…
何？

テーブル席が、3人がけしかなく、私たち3人と、聖君、葉君と別れて座った。聖君の隣には、木戸君って人が座り、あれやこれや話をしていた。

私たちは、それぞれ注文をした。そして、
「驚いたよね。なんか全然印象が違う」
と話をした。

「基樹が、俺らは硬派で通ってるからとか、バカなこと言ってるなって思ってたけど、ここまで、女子にクールだとは、思わなかったわ」

蘭が言った。
「本当に、基樹君も、なんかさっき、違ってたね」
「ほんとよ。私のこと、彼女だって紹介もしなかったし」

少し、聖君のところと離れているテーブル席で、私たちの話し声は多分、聞こえていなかったと思う。そこに、
「ね。3人で来てるの？案内しようか？」

と、隣の席に座った男子が言ってきた。向こうも3人だった。それも、勝手にテーブルをくっつけてくる。

「どこの高校？みんな可愛いね。知り合いでもいるの？」

と、一人が私に声をかけてきた。すると、

「ちょっと、わりい。俺らのつれだから、席変わってくんね？」

と、聖君がその男子に言った。

「え？うそ！聖先輩の？」

どうやら、1年生だったようだ。

「はい、どうぞ」

とその子たちは、席を立ち、聖君と葉君に席を譲った。

「何やってんの～～？なんで、ナンパされてるんだよ？！」

小声で聖君は、私に聞いてきた。

「え？」

私は困ってしまった。すると菜摘が、

「じゃ、兄貴がちゃんと、桃子にひっついてあげてたらいいじゃない？」

とけっこう、大きな声で言った。すると、周りがいっせいにこっちを向いた。

「聖君の妹？」

と、周りがざわざわし出した。そのうち、

「なんだ、妹だったんだ」

とか、

「妹の友達とかかな」

とか、小声で話し出し…。ここにも、聖君のファンはたくさんいるんだ。

聖君は、コーラを黙って飲んでいた。でも、少し機嫌が悪い感じだ。やきもち？それとも、何？

しばらくは、その店にいた。１２時近くになり、聖君の携帯がなり、どうやら、基樹君が今、いる場所を教えてっていう電話だったようだ。

５分も立たないうちに、基樹君が現れて、テーブルにつき、基樹君、聖君とで、わいわいとさわいでいた。そこに、木戸君も入り、もう一人二人と男子が混じり、ゲラゲラ笑いながら、話をし出した。

「お昼行かない？そろそろ」

と葉君が言った。

「ああ。お腹空いたもんね」

聖君も言った。そして、みんなで、移動した。

「料理部っていうのが、カレー屋やってるんだって。うまそうだからそこにしない？」

って基樹君が言って、みんなでそこに行くことにした。でも人気があり、少し教室の外で、待たされることになった。

その間も、いろんな人が聖君に声をかけて行き、聖君は、また、男子にはにこやかに、女子にはクールに答えていた。

すごい人気ものだ。でも、女の子には一貫して同じ態度だ。べらべら話をする女の子は、一人もいなかった。

カレー屋さんは、６人で一つのテーブルに座れた。そこで、今日初めて私は聖君の隣になれた。

聖君は、美味しそうにカレーをがっついた。たまに、声をかけてくる友達に、答えながらも。

「美味しい」

と言って、私も菜摘も、蘭も食べ出した。

聖君は、さっさと食べ終わり、私たちが食べ終わるのを待った。

その間は静かだった。隣にいる聖君は、いつもの優しい空気が漂っ

ていた。

カレーはけっこう辛くって、半分で私は断念。どうやら、本格的インドカレーらしい。

「もう、食べないの？」

と、聖君に聞かれた。

「うん。辛くって、もう駄目だ～～」

「辛いの苦手？」

「うん」

「じゃ、俺食っちゃっていい？」

「うん」

そう言うと、私の分も聖君はぺろって食べた。

「ああ、満足。これで、ようやく腹いっぱいだ」

聖君は、本当に良く食べる。そして、

「でも、桃子ちゃん、おなか空かない？なんか他に食いに行く？」

って聞いてくれた。

「ううん。大丈夫」

と答えると、

「ちゃんと食べないと、大きくなれまちぇんよ～～～」

と、頭をなでながら、またよちよちを聖君がした。

「もう！また子ども扱い…」

と、聖君に向かって言った時、私は動きが止まってしまった。

隣でそれを聞いていた、蘭も、菜摘も、葉君も、基樹君も、まったく気にすることなく、カレーを食べたりしゃべっていたが、その周りにいた人たちが、いっせいに、私と聖君を見ていたのだ。

「え？聖…？」

と、隣のテーブルにいた、聖君の友達らしき人が、目を点にしてい

た。
「聖先輩、うっそ～」
後ろのテーブルにいた、男子がそう言った。
「ええ？聖君…？」
ちょっと離れたところから、こっちを見ている女の子は、なんだか、ひいていた。

「あ…。やべ！」
小声で、聖君がそう言った。すると、
「あほ」
と、葉君が冷たく言い、
「ば～か、今さらおっせえよ」
と、基樹君も少しにやけながら、そう言った。

「聖の妹？」
隣のテーブルにいた、男子が聞いてきた。聖君は、その男子に向かって、
「桃子ちゃんのこと？」
って、私のことを指差して聞いた。
「そう、今、お前が、赤ちゃん言葉を使い、頭をなでた…、その子…」
と、目を丸くしたまま、その男子が聞いた。

「……。俺の、彼女…」
聖君がそう言うと、その教室にいたみんなが、いっせいに、
「え～～～～～～～～～？！！！！」
と、声をあげた。耳をふさがないと、うるさいくらいの大声だった。

隣の男子が、
「お前、彼女いたの？！っていうか、何？その不釣合いな、すんげ

え可愛い子！」
と、大きな声で、聞いてきた。
「うっせ～～よ。関係ないだろ、お前には」
「関係ないってお前、仮にも1年時のダチだろ？紹介しろよ」
「うっせ～、うっせ～～。なんでお前なんかに」
「なんだよ、いいだろ？どこの高校？高校生だよね？」
「はい…」
思わず私はそう、答えた。

「桃子ちゃんっていうの？ぴったりの可愛い名前だね」
その男子がそう言うと、
「お前、勝手に話しかけてるなよ。いいから、そっちのテーブルでカレー食ってろ」
聖君はそう言って、私にも、
「答えなくていいから、無視して。ああいうやつは」
って言ってきた。

聖君に話しかけてくる人はいなくなったけど、小声で、みんながしゃべっているから、周りがざわざわうるさかった。
「あ～～。墓穴。学校にいるってこと一瞬、忘れてた」
と、聖君はうなだれて、
「もう、こうなったらあれか、開き直るしかないか」
と、ぶつくさ言っていた。

「そうそう。彼女にでれでれのお前、見せちゃえば？」
小声で葉君が、そう言うと、
「うっせ～～。お前だって、でれでれじゃんかよ」
と、聖君は、葉君の足を蹴っていた。
「蹴るなよ、いてえ」
葉君が、そう言っても、

「ふんだ」
って、聖君は機嫌が悪かった。

第12段階　好きな人のことをまた好きになる

ああ、来て失敗だったかな。来るの嫌がってたもんな。悪いことをしたな…って私は思った。

でも、今さら後悔しても遅い。それに、歌を歌っているときの聖君、本当にかっこよくって、来て良かったなって思ったし…。

みんながカレーを食べ終わると、聖君は、

「あ、やべ。午後のリハーサルの時間になるや。ライブ終わったらまた合流しよう」

と言い、教室を出て行った。

「今度は前の方で見たいから、早めに体育館行かない？」

と葉君が言い出し、

「そうだね」

と、みんなで体育館に移動した。もう、ちらりほらりと人が来ていた。

前の方に座って、おしゃべりをしながら、ライブの時間まで待った。

「桃子ちゃん、ほんと、驚いたでしょ？あいつ、学校じゃ、あまり女子とも話さないし、彼女も作らないイメージあるんだよね。多分、彼女がいても、年上か、大人っぽいイメージあったんじゃないのかな」

葉君がそう言った。

「そ…、そうなんだ」

「でも、ま、もうばれたし。こうなったら、キャラも変えていけばいいんだよね。本来はおちゃらけてるし、アホだし、女の子好きだし、桃子ちゃんのことを可愛い可愛いって言ってる、でれでれなやつだしさ。学校でかっこつけすぎなんだよな～～」

と、葉君が言うと、
「それは無理なんじゃね?勝手にあいつのキャラ、周りが決めたところもあるしね」
と、基樹君がそんなことを言った。

「いいじゃん。かっこつけてる聖君も、かっこいいよね?桃子」
蘭が私に言ってきた。
「…うん」
「それに、今のままのほうが女子、寄ってこないんでしょ?」
蘭が葉君に、聞いた。
「まあね。それに、彼女がいるってわかった時点で、ファンはどっと減るだろうね」
葉君がそう言った。

体育館は、あっという間に人でいっぱいになった。そして、また、会場が暗くなり、ドラムの音、ギターの音が鳴り響き、スポットライトをあびて、聖君が登場した。
午前とは、違う曲を披露。さすが…。
ネクタイも外してて、シャツのボタンはほとんど全開。さっき、カレー食べてたときには、ちゃんとボタン閉まってたのにな。
女の子の黄色い歓声。午前中より増した気もする。

女子の目が、みんなハート。私もだ。目がハートで、見てるだけでドキドキしてた。
男っぽくて、かっこよくって、でも、綺麗で。こんな聖君は、本当に今まで観たことがなかったけど、きっと、もし、聖君との出会いが今日だとしても、一目惚れしてただろうな。

1番前のど真ん中で見ていたから、聖君からも、私たちが見えてたようで、何回か、蘭や菜摘が、

「聖君、かっこいい～～」
ってさわぐと、二人を見ていた。
でも、私はとても、恥ずかしくて声をあげられず、黙って目をハートにして見ていた。そんな私のことも、時々聖君は見た。
目がいつもとは違ってて、色っぽいやら、男らしいやらで、目が合うだけで、とろんって溶けちゃうんじゃないかと思った。これ、私以外のみんなも、同じように思ってるんだよね。きっと…。

ふたたび、アンコールも歌い上げ、聖君はステージを去った。
体育館から、人がどんどん減っていく中、スタージの横で、プレゼントを持ち、待っている女子が数名。
聖君が、出てくると、
「聖先輩、かっこよかったです。これ、使ってください」
と、手渡していた。でも、
「あ…。ごめん、受け取れない」
と、聖君は断った。
ええ?それもまた、衝撃的。ありがとって受け取ると思ったのにな。

そんな様子をぼ～～って眺めていたら、葉君が、
「あいつ、いつもあんなだから。ま、バレンタインのチョコは、ほとんど強引に渡されて、もらう羽目になってるけどさ」
と、私に言ってきた。
「え?」
それを聞いていた菜摘も、蘭も、意外だって顔をした。

聖君は、さっさとこっちに向かって歩いてきた。
「お前、前はだけたまんま」
葉君がそう言うと、
「あ、そうだった。わりい」

と言って、ボタンを閉めていた。良かった。ちょっと、目のやり場に困っていたんだ。

「それ、何の演出？」
と葉君が聞くと
「しらね～～。メンバーのやつらが、やれって言うからさ」
と、聖君が言った。いや、それ、かなりの女子が喜んでたと思う…けど。（私もか…）シャツを全開にして歌を歌ってる聖君、色っぽかったし…。

「は～～。終わった。来年は絶対に断るぞ。疲れた～～！」
聖君はそう言うと、大きなのびをした。
「さ、帰るか～～」
聖君がそう言うと、葉君が、
「え？」
って聞いた。

「俺のクラス何もしてないから、片付けもないし。ダンスパーティをこのあと、体育館でするらしいけど、出る気ないし、もう、帰ってもいいよな～」
「ああ、帰れ、帰れ。くそ。俺は実行委員だから、最後までいなきゃならんのじゃ～～」
「くじ運が悪かったんだよ。じゃ、基樹君、がんばって」
聖君は、基樹君にそう肩をぽんぽんとたたきながら言うと、そのあと私に向かって、
「荷物とってくるから、教室まで付き合って」
と言ってきた。

「あ、じゃあもう、別行動しない？二人で行って来たら？私、蘭と葉君と、もう、帰るよ」

菜摘にそう言われて、私と聖君は二人だけで、教室に向かった。
何人かの生徒が、また、聖君に声をかけ、聖君は、それに答えていた。

そして、聖君の教室に入ると、誰もいなかった。私が入り口付近で立ち止ると、
「入って」
と、私を教室にいれ、ドアをがらがらって閉めた。
それから聖君は、自分の机に私を連れて行き、荷物をまとめ、ブレザーをはおってから、机の上にひょいと腰掛けた。
私はその前に立って、どうしたらいいものかって、目が泳いでしまった。
違う学校の教室…。どうも、きまずい。

聖君のクラスの周りは、何も催し物をしていないようで、とても静かだった。
「で、感想は？」
聖君が、聞いてきた。
「え？」
「今日の、感想」
「聖君のライブ？」
「そう、正直にね」
「かっこよかったよ」
「ほんとに？」
「うん」

「でも、驚いた？いつもと違って」
「うん、すんごい驚いた」
「いつもの俺とどっちがいい？」
「…。どっちも」

「どっちも？」
「うん。かっこいい聖君も、可愛い聖君も」

「可愛い？俺がぁ？」
「うん…。顔文字のメールとか、可愛い」
「あ、あれね…」
聖君が、少し照れた。それから、私の方を向き、私の背中に両手を回した。そして、聖君の方に引き寄せ、顔を近づけてきた。

キス…だよね…？
私は、この前のように、逃げるのは駄目だよねって、思い切り目をつむり、固まっていた。ドキドキして、体全体に力が入ってたと思う。
かすかに、聖君の唇が触れた。
一瞬、恥ずかしさのあまり、逃げようかとも思ったけど、ちょっと、引き気味になったのを聖君が感じたのか、背中に回している聖君の腕で、さらに私は引き寄せられてしまった。

キスが終わっても、恥ずかしくて目を開けないでいると、聖君が、もう一回キスをしてきた。
え…？あ！もしかして、私が目を開けなかったから？！
もしかして、催促してるように見えた？！ど、どうしよう…。

今度は終わってすぐに、目を開けた。でも、聖君と目が合って、ものすごく恥ずかしくなって、目をふせた。
「真っ赤だ」
聖君が、笑いながら言った。
え～～～！何か、言い返そうと思ったけど、何も言えなかった。

聖君は、

「誰かが入ってきたらやばいから、もう帰るか…」
って言って机から降り、鞄を持ち、私の手をひいた。でも、教室のドアをがらりと開けた瞬間、手を離した。
そして、両手をパンツのポッケにつっこみ、私の速度に合わせて、歩き出した。

廊下にはあまり人がいなかったけど、下の階に行くと、また人がたくさんいて、私と歩いている聖君を見て、
「聖君の彼女みたいだよ」
と、ひそひそ声が聞こえた。そんなの無視して、聖君は、歩いていた。

校舎を出て、校門を出て、ようやく人がいなくなった。
「疲れてない？」
聖君が聞いてきた。
「私は大丈夫、でも、聖君の方が疲れてない？」
「う～ん。まあね。でも、けっこうライブで歌うと、発散できるんだよね」
「もう、芸能人みたいだったよ」
「まじで？あははは」
聖君は、少し照れくさそうに笑った。
「ほんと、プロになれるよ。絶対、売れると思う」
「あはは…。そうかな。でも、あんまし興味ないな」
聖君は、また笑ってそう言った。

そして、二人で並んで、駅まで歩いた。
駅で、逆方向だから、別々のホームにいた。前のホームに聖君がいて、こっちを見ていた。
私の乗る電車の方が先に来て、電車に乗り込んで、ホームに立っている聖君を見ると、私を見ながら手を振っていた。私も聖君に向

かって、手を振った。

電車に乗っていると、メールが来た。菜摘だ。聖君のライブの時の写メが送られてきた。いったいいつ撮ったのかな？私は、くぎづけになっていたから、写メを撮る余裕さえなかったし…。

その写真の聖君をずっと見ながら、私は家に帰った。

夜には、聖君からもメールが来た。

＞葉一が写メ送ってきた。見たい？

聖君のライブのだって思って、すぐに、

＞見たい！

と送り返した。すると、送られてきたのは、私の写真だった。それも、目をとろんとさせた、横顔。

＞俺のライブを見てる時の桃子ちゃん…だってさ。

と、説明が書いてあった。

うわ～～～～～～～～！！

すごい恥ずかしい写真！！！なんで？いつ？いつ撮られてたの～～？全然気が付かなかったよ～～～。

＞恥ずかしいから、消して！！！

と送ると、

＞や～～だよ～～～～

と、返信が来た。

ああ…。ほんと、目がもろにハートって感じで、うっとりしちゃってる。めちゃくちゃ、恥ずかしい写真！手なんて、両手を胸の前で組んじゃって、どっかにいっちゃってるって感じの写真。

＞一生のお願いだから、消して。

＞しょうがないな～。
ああ、消してくれるの？良かった。
＞消してもいいけど、俺の目には焼き付けとこうっと。
ええ～～～？！！
＞この写真は、すぐに忘れて！
＞しょうがないな～。じゃ、この写真は忘れる。

ほんと？良かった。と、ほっとしていると、
＞でも、舞台から見えてた、桃子ちゃんの顔は忘れられないな～。
とメールが来た。
＞え？！どんな顔？
＞この写真みたいな、うっとりして俺のこと見ていた顔（＾＾）

え～～～？ああ、そうか。まん前で見てたんだっけ、私…。私がどんな顔で見てたか、表情もまる見えだったんだ～～～～！！恥ずかしいよ～～～。

＞それも、忘れて！！！！！
＞忘れたくても、もう、脳裏に焼きついてるから無理。
と、すぐに返事が来た。
＞一生のお願いはさっきつかったから、もう駄目だよ。
と、またすぐにメールが来た。

ああ～～～～～～～。そうか。聖君の顔がよく見えたってことは、そうか。私の顔もだったんだよね。きっと、この写真みたいな顔でずっと、見ていたんだよね。私…。

しばらく、返信ができなかった。すると聖君から、今度は電話が来た。
「もしもし…」

「もしもし、桃子ちゃん？」
「うん…」
ああ、なんだか、恥ずかしくて、話すのも恥ずかしくて。
「返事全然来ないから、めいっぱい恥ずかしがっているんだろうなって思ってたけど…。そう？」
「うん…」
見抜かれてる…。
「あはは…。やっぱり」
「……」
笑われてる…。

「やっぱいよね～～」
「え？何が？」
「俺のこと、惚れ直しちゃった？」
「うん…」
「あ？やっぱり？！」
「うん。でも、周りの女の子もみんな、目をハートにして見てたよ」
「そうなの？他の子なんて、わかんないや」

「……」
「帰り、なんかちょっと、桃子ちゃん変だったけど…」
「え？私が？」
「うん。なんとなく…。元気がなかったような…。だから、疲れたのかなって思ってたけど」
「疲れてないよ。圧倒されただけ」
「圧倒？」
「ごめん、違うかな。圧倒じゃなくって、えっと…」
なんだろう、なんて言えば1番いいかな。

「驚かせちゃった？俺、全然違ってたでしょ？」
「うん。びっくりした」
「やっぱりな～～」
「でも、本当にかっこよかったよ？」
「……」
聖君の方が無言になった。

「聖君、人気あるね。男子からも女子からも…」
「文化祭の時だけだよ」
「そうかな。実は影でこっそり見ているような、女の子がたくさんいたりして」
「あはは。そんないないって。俺、もてないから」
「そうかな…」
「……」

「私、そんな人気者の聖君の彼女でもいいのかなって、思っちゃった」
「へ？」
「なんか、不釣合いっていうか…」
「ええ？まじで言ってんの？周り、騒いでたじゃん。俺になんで桃子ちゃんみたいな、可愛い彼女がいるんだって。不釣合いなのは、俺の方じゃない？」
「ま、まさか！めちゃくちゃ、かっこいいのに」
「……」
また、黙ってしまった。

「桃子ちゃん、それ…」
「え？」
「照れるから、やめてね」
あ、照れてたのか…。

「うん…。でも、照れてる聖君は、可愛いよね」
「だ～～～！可愛いもやめて！」
「うん…」
やっぱり、可愛いい…。

「あのさ、じゃあ、俺のことあきれちゃったとか、印象悪くなっちゃったとか、そういうのは…、ない？」
「ないよ。全然」
「まじで？」
「ないよ。なんで？」
「あ…。うん、ちょっと心配だったから」
「何が？」
「いや、いつもと違う俺のこと見て、どう思うかなって」

「え～？どんな聖君だって、私好きだよ。それどころか、もっと好きになっちゃったかもしれない…」
と、言ってから、わあ、恥ずかしいことを言ったって、思った。聖君は、また照れるからやめてって言うかと思ったけど、
「サンキュ…」
って、照れくさそうに言った。

電話を切ったあと、私は菜摘が写メで送ってくれた、聖君を見た。いつもの聖君とは違う聖君。でも、やっぱりどの聖君も、聖君なんだな…。
こんな聖君も、大好きだな。
知れば知るほど、好きになる。嬉しいな。もっと、いろんな聖君が知りたい。写真もいっぱい取れたらいいな。

これからも、いろんな聖君を知っていくんだろう。そのたびに私は、こうやって驚かされ、そして、ドキドキするんだろうか。

もしかしたら、弱い聖君や、落ち込んでる聖君にも会うかもしれない。だけど、そんな時には、私が聖君の力になれたらいいなって思う。

聖君が、そばにいてくれるだけで、嬉しいように、聖君も同じことを思っててくれたら嬉しいな。

そんなことを思いながら、その日は、眠った。夢にも聖君が出てきてくれたらいいなって、そう思いながら。

第１３段階　好きな人が家に来る

１２月、聖君の誕生日が近づいてきた。
「兄貴の誕生日、何あげようかな～。桃子は何をあげるの？」
学校からの帰り道、菜摘に聞かれた。
「うん、実はもう編み出してるんだ」
「手編みのセーター？」
「セーターは間に合いそうもないから、手袋とマフラー」
「え？そんなに？」
「だって、誕生日と、クリスマスのプレゼント…」
「あ～、そっか～。両方あげるのか～！」
聖くんの誕生日は、クリスマスイブだから…。聖なる夜に生まれた聖君。プレゼント喜んでくれるかな…。

菜摘は、兄貴っていつも聖君のことを呼ぶようになってた。聖君の学校の文化祭が終わってすぐ、聖君は、菜摘の家に遊びに行ったらしい。その日の夜に電話があって、
「すげ～～！緊張した！！」
って、聖君はさわいでた。でも、菜摘のお父さんも、お母さんもすごく喜んでくれたって、聖君は嬉しそうだった。
「良かったね」
って、言ったけど、ほんのちょっと羨ましさもあったりして。いつかうちに来て、母や父に会ってくれることもあるのかな…。

私は母にどこかに行く時、必ずどこに行くか、誰に会うかを報告する。それから、どんな交友関係かも話している。前に好きになった人のことも、母になんとなく話したっけ。電車で会うだけなんだけどって…。その後、まったく会わなくなっちゃったって言ったら、もっと早くに、行動に出たらよかったのに、桃子はおくてね～って

言われたっけな～。

聖君のことも、なんとなく話していた。最近、菜摘や蘭と一緒にみんなで会ってる男の子で、すごく優しい人なんだよって…。

私は、葉君や、基樹君の話もしてるのに、母にはすぐにぴんときたみたいで、

「聖君には、告白したの？」

とか、

「前みたいに、行動しなかったら、また駄目になっちゃうかもよ」

なんて、言われてたんだ。それを聞いてた妹のひまわりは、

「お姉ちゃんから、告白なんて無理無理！」

って、言ってたっけな～。

ひまわりには、もう彼氏がいる。それも、付き合ってと言われたらしい。それを聞いて、本当に驚いた。彼氏が前に遊びに来たことがあるけど、ひまわりよりもちょっと背も低く、可愛い感じの子だった。母は、すんごく喜んで、お茶だのお菓子だの出して、いろいろと話をしていたっけ。

でも、そんなだったから逆に、家にきづらくなったようで、それ以来、来ていないな…。

「桃子が彼を連れてくる日は、いつになるのかしらね」

って、その日、母に言われたっけ。

もし、聖君を連れて来たら、あの時みたいに、お茶だのお菓子だのを出して、ずっと話し込んだりするのかな。それはちょっと、嫌かも…。っていうか、聖君も嫌がるかも…。

だけど、母には聖君と付き合ってることもまだ言ってない。

聖君と初めて二人きりで会った日、母には聖君の悩み事をいろいろと聞いてて、今日もそれで会ってくると言って出かけたし。（実際、そうだと私も思いこんでいたし…。）その悩み事も、母にはお

おまかだけど、話していたし。
だから、その後聖君に会ったとしても、悩み事相談でもしてるんだろうなって、思ってるようで、
「そろそろ、告白したら？」
といまだに言ってくる。もう付き合ってるんだとは、どうしても言えない。どう切り出していいかがわからない。そのきっかけを失ってしまって、言えないままなんだ。

でも、マフラーを編んでいたら、聖君にあげるんだって母にはすぐにばれてしまい、
「じゃ、その時、告白ね？」
って言われてしまった。う～～ん、どうしよう。いつ言ったらいいのかな…。なんだか、秘密にして付き合ってるみたいで、気が引ける。

その週の土曜、聖君と映画を観にいく約束をした。そして、映画館近くで待ち合わせをして、映画館に行ってみると、すごい混みよう…。
「げ！次の回のはもう売り切れだ。そのあとだと、俺、時間間に合わなくなるな…」
ああ、お店の手伝いをしに、帰るんだもんね…。
「わりい、インターネットで席予約しとけば、良かったね。まさか、こんなに混んでるとは思わなかった」
「うん、いいよ。全然」
「他のでも観る？っていっても、あまりいいのやってないよね…」
「映画観ないでもいいよ」
「じゃ、来週にする？来週は席をちゃんと取っとくよ」
「うん…」

あ～～。なんか、こうやっていつも、聖君に甘えている気がする

な〜〜。
「じゃ、今日どうする？ぶらぶらその辺でも、歩く？」
「うん」
それからなんとなく、ぶらぶら歩いて、なんとなく家の近くにある大きな公園に行った。そして、ベンチに座り、二人でぼ〜〜ってしてたけど、急に冷たい風が吹き出した。
「さむ！桃子ちゃん、寒くない？」
「うん…。ちょっと」
「どっか、お店入る？お茶でもしようか？」
「うん」

そう言ってぶらついたけど、公園の近くには何もなくて、
「くしゅん！」
私がくしゃみをすると、
「寒い？」
と、また聖君が心配そうに聞いてきた。
「だ、大丈夫…」
「もしかして、風邪気味？」
「え？」
「ちょっと鼻声だし…」
「そ、そうかな…」
実は、そうなんだけど…。聖君に会いたいから、黙ってたんだ。
でも、返って聖君に風邪うつしても、悪いよな…。

「ちょっと、鼻風邪ひいたかも。ごめんね、聖君にうつしたら、悪いよね。私、今日は帰ろうかな」
「…。うん。もっと悪くなるとやばいし…。今日寒いし、帰ってあったかくした方がいいよ。あ、俺は馬鹿だから風邪引かないし、うつるかもなんて心配はいらないけどさ！」
と、聖君は笑いながら言ってくれた。

ああ、本当に、優しいよね…。でも、まだまだ一緒にいたいよ…。
でも言えない…。

家の前まで送ってくれて、
「じゃ、俺帰るね」
って聖君が、そう言った時に、家のドアが開いた。
「また、いらしてくださいね～～」
と、母の声。ああ、今日エステのお客さんが来ていたんだっけ。エステが終わり、ちょうど帰るところなんだ。
お客様を送った後に、母は私と聖君に気がつき、
「あら？お友達？」
と聞いてきた。

「あ、聖君」
「あら、まあ…」
母は少し、驚いていた。
「あ、どうも…。はじめまして。俺、じゃなくて僕は、桃子さんとお付き合いさせてもらってる、榎本聖といいます！」
聖君は、いきなり直立不動になってそう言うと、ぺこって深くお辞儀をした。
「え？！お、お付き合い？」
母はもっと、驚いて目を真ん丸くしながら、私と聖君を交互に見ていた。

「あ、あの…、紹介しなくちゃって思ってたんだ。ごめんね、言わなくて…」
私が、しどろもどろになってると、母が、
「玄関先で、なんだから家にあがって！」
と、強引に聖君を家に入れてしまった。

「お、お邪魔します…」
聖君は、少し戸惑いながら、家にあがった。ああ…。きっと、これから母は、お茶だのお菓子だのを出してあれこれ、話し出すんだ。どうしよう…。聖君、嫌がらないかな…。帰ったほうが良かったって、後悔しないかな。
でも、まだ聖君といられるのは、正直嬉しい。

母は思ったとおり、紅茶とお菓子を持って、リビングにやってきた。
「あ、おかまいなく…」
と、聖君が言ったけど、
「たいしたものがなくって、ごめんなさい。来るってわかっていたら、ケーキくらい用意したのにね」
と母は、そう言いながら、紅茶とお菓子をテーブルに置いた。それから、聖君の真向かいの椅子に、腰掛けた。

「いただきます」
と言うと、聖君は、紅茶を一口飲んだ。
「榎本聖…君」
「え？はい」
「桃子とお付き合いっていつから？」
「あ…、えっと、秋です。１１月くらいかな」
「じゃ、ほんとにごく最近？」
「はい」
「そう～～」
母は、なんだか嬉しそうだった。

聖君はちょっと、部屋を見回して、
「あの、何か自宅で仕事してるんですか？」
と聞いてきた。

「あ、エステをね、してるのよ。さっきの人もエステのお客様なの」
「へ〜〜！だから、桃子ちゃんのお母さん、肌奇麗なんだ」
「え？あら…。聖君は、お世辞が上手なのね」
「え？いえ…。俺、いや、僕はあまり、お世辞って言えないんです」
聖君は、頭をぼりって掻きながらそう言った。

それから、母は嬉しそうに、聖君にいろいろと聞きだした。年齢や、学校、兄弟、住んでる場所。
「江ノ島なの？いいわね。海の近く？」
「はい」
「お父さんは何をしてらっしゃるの？」
「父は、ウェブデザイナーです」
「え？」
「あ、ＩＴ関係の仕事してます」
「そう…」

「母は、カフェをしてます」
「え？」
「そこで、僕も夜はバイトしてるから、あまり遅くはなれないんですが…」
「え？じゃ、あまり引き止めちゃ悪いわね」
「あ、でもまだ、平気です。ここを４時に出れば…」
「え？じゃ、まだまだあるわね、時間」
「…でも、そんなに長居したら悪いっすよね？」
「うちはかまわないわよ。もうエステのお客も来ないし」
「そうなんすか…」
また、聖君はぼりって頭を掻いた。もしかして、困ってる？早くに帰りたい…とか？

「桃子ちゃん、調子はどう？」

聖君はいきなり、私を見てそう言ってきた。
「え?あ…大丈夫」
「あら。桃子、どうしたの?」
母が聞いてきた。
「ちょっと、風邪をひいたかもしれなくて…」
「あら、そうなの?」
「でも、大丈夫」
そう言うと、聖君は、
「じゃ、その…」
と、何かを言いたそうにした。帰ると言い出すのかな?

「ずうずうしいこと言ってもいい?」
「え?」
「桃子ちゃんの部屋、行ってみたいなって…」
「え?」
え…?
「あら、どうぞ。そうよね。二人のほうがいいわよね。私、邪魔したわよね。あ、お茶とお菓子、部屋に持って行ったら?桃子」
と母が、そう言った。

「ま、待ってて。ちょっと片付けてくる!」
私は大慌てで、部屋に行き、編みかけのマフラーをクローゼットに閉まった。それから、少しベッドの上を奇麗にして、リビングに戻った。
リビングに戻ると、大笑いをしている聖君がいた。
「え?どうしたの?」
驚いて聞くと、
「あはは!桃子ちゃんのお母さん、最高!腹いて~」
と、お腹を抱えていた。母も、涙を流して笑っていて、
「聖君のほうが、笑わせてくれるわよ」

と言っていた。な、何？何があったの～～～？

聖君と部屋に行った。聖君は部屋に入ったとたん、

「わ！」

って、何か驚いていた。

「え？何？！」

なんか変だったかな？

「すげ！女の子の部屋って感じ！杏樹の部屋、シンプルで、こんなじゃないから驚いた」

そう言うと、聖君は少し、固まってしまっていた。

「あ…、そのクッションに座る？」

と言うと、ようやくクッションに聖君は座った。

「クッションもピンクなんだ…。な、なんか変な感じ」

確かに…。ピンク色のクッションに聖君が座ってるのは、変な感じだ。

「あ～～、でも、桃子ちゃんらしい部屋だよね！」

聖君はしばらく、部屋を見回していた。

「…、桃子ちゃんのお母さん、面白いね」

「おしゃべりなんだ。前にね、ひまわりが彼氏を連れてきた時も、べらべらしゃべっちゃって、彼氏困っちゃってて…。それ以来もう、連れてこなくなったよ」

「へえ、そうなの？俺、けっこうはまったけど…」

そうなんだ。聖君も嫌がると思ったのにな…。

「ひまわりちゃん、彼いるんだ」

「うん」

「へ～～」

「……」

いきなり、意識をしてしまった。私の部屋に聖君がいる…。私が

黙り込むと、聖君は、頭をぼりって掻いて、
「えっと…」
と、困った表情になった。

「やっぱ、ずうずうしかったね。部屋まで来て…」
「え?ううん」
「……。ほんとに、風邪、大丈夫?」
「うん」
「あ〜〜。なんてういか、この前、菜摘ちゃんち行ったじゃん」
「え?うん」
「菜摘ちゃんの部屋にも、寄ったんだけどさ」
「え?!」
菜摘の部屋にも?

「アルバムとか見せてくれて…。なんか、そんなに意識しないでいられて…って妹だし、当たり前か」
「……」
でも、なんか複雑だな…。
「そんな感じで、桃子ちゃんの部屋も来ちゃった。でも、全然、違ってた」
「菜摘の部屋は、水色で統一されてて、ちょっと男の子っぽい部屋だもんね」
「あ…。うん、部屋の感じもなんだけど」
「?」
「気持ちがね、まったく…。今、俺、すげえ緊張してて」
「え?」

なんで?!
「…やっべ〜〜!!!!」
聖君が、うつむいてしまった。

「ど、どうしたの？」
「桃子ちゃんの部屋って、桃子ちゃんの匂いがするんだね」
「え？！」
「あ、当たり前か…。ごめん、変なこと言ってる、俺…」
え…。え～～？！

聖君は、すっくと立ち上がり、
「やっぱ、俺帰るね。ごめんね、あがりこんじゃって」
と言って、ドアを開けて出て行ってしまった。
「あ、見送る！」
私も慌てて、追いかけた。それから、一階に下りて行き、聖君は、
「お邪魔しました」
と言うと、さっさと玄関に行ってしまった。

「あら？もう帰るの？」
母が慌てて、キッチンから出てきた。
「はい。突然、お邪魔してすみませんでした」
「いいのよ。またいらしてね」
「はい」
聖君はぺこってお辞儀をすると、私に向かって、
「あったかくして、風邪、早くに治してね」
と、笑って言ってくれた。そして、玄関を開けて、出て行った。

聖君が、家をあとにしてから、母がリビングのソファに腰掛け、
「びっくりしたわ～。いつの間に、お付き合い始めたの？」
と、私に聞いてきた。
「１１月かな」
「告白したの？」
「ううん」
「じゃあ、告白されたの？」

「ううん」
「じゃ、どうやってお付き合いが、始まったの？」
「説明が難しいかな」
私がそう言うと、母はしばらく黙った。

それから、ぽつりと、
「桃子にまさか、あんなにかっこいい彼氏が出来るとはね～」
と言われてしまった。
「わ、私もそれは思う…。いまだに、信じられない」
「……。聖君、かっこいいし、話も面白いし、優しそうだし…。文句のつけようがないわね」
そう言うと、母はちょっとため息をついた。
「お父さんが知ったら、かなりショックだわね～」
「お父さんに、言う？」
「うん。言っちゃう」
「え？」
「反応見てみたいし。今度はお父さんがいる時に、来てもらおうね」
「ええ？」
ちょっと、父のショックを受けた顔は見たくない気もする。でも、聖君に会って欲しいような、そんな気もしていた。

夜、１０時過ぎに聖君からメールが来た。
＞今日は、ほんと、ごめんね。
何が、ごめんなのかな？
＞何が？
わからないから、正直に聞いてみた。
＞部屋、あがりこんじゃって。
＞ううん。全然。
そうすぐに返信したけど、聖君からしばらくメールが来なかった。

聖君こそ、どう思ったのかな。母のことも、悪くは言わなかったけど、本当は嫌じゃなかったのかな。

＞うちにあがってって言ったのは、母のほうだったし。

そうメールを送ると、聖君はすぐに電話をくれた。

「あのさ…。さっき母さんに、桃子ちゃんちに行った話をしたら、粗相しなかったかってかなり言われた。俺、なんかお母さんが嫌がるようなこと、してないよね？」

「うん。お母さん、聖君のことすごく気に入っちゃってた」

「まじで？！」

「うん」

「良かった～～～！！俺、お母さんの話にまじ、大笑いしちゃって、すげえ失礼なことしたかなって思って。そのうえ、部屋まであがっちゃって、ずうずうしい人って思われてないかって、ちょっと心配してたんだ」

え～～？聖君、そんなこと心配したりするの？

「全然、大丈夫だよ」

「良かった。ほら、お付き合いするなら、もっとしっかりした人にしなさいって、お付き合いを反対されたりしたら、大変だしさ。まじで、良かった」

反対～～？絶対にありえない。だけど、そっか…。そんなこと、聖君は思ったりもするんだ。意外だな…。でも、ちょっと嬉しいな。そんな聖君のことも知れて…。

「反対どころか、本当に聖君はかっこいいし、話も面白いし、優しそうだし、文句のつけどころがないって、お母さん言ってた」

「まじで？めちゃ嬉しい。じゃ、お付き合いしてるのも、もちろん賛成してくれたってことだよね」

「うん」

「桃子ちゃんは？呆れてない？」

「？何を？」
「だって、俺部屋にまであがって」
「うん、全然。でも、なんで緊張してたの？」
「え？だって、桃子ちゃんも緊張してたでしょ？静かだった」

ああ。そっか。わかっちゃったのか…。
「うん。ちょっとね…。聖君が、部屋にいるのが、なんか信じられなくなって」
「何それ」
こんなこと言って、笑わないかな…。呆れないかな…。
「この前、夢を見たの。私がまだ片思いしてて、私の部屋で聖君のことを思ってて、落ち込んでる夢。それが、今は部屋に聖君が来たりしてて…、なんだか信じられないような、変な感じがしたんだ」
「落ち込んでる？」
「初めのうちはね、会ってもあまり話も出来なかったし、笑顔も向けてもらえなかったから、夜、落ち込んだりしてたんだ」
「え？そうなの？」
「うん」

「…。笑顔向けてなかったって…、俺、そうだった？」
「う、うん…」
「…ごめん」
「あ、謝らなくても…。だって、その頃菜摘のことが、好きだったんだもんね？」
「……」
聖君が、黙り込んでしまった。あ、私変なこと言ったかな…。
「じゃ、じゃあさ、あの桃子ちゃんの部屋で、俺のこと思っててくれたわけだ」
「え？うん」
「……」

また、黙り込んでしまった。どうしたのかな。やっぱり、言わない方が良かったかな。

「あ～～～」

「え？」

「……。なんか、照れるって言うか…。そうだよね、俺と会った時から、俺のこと思っててくれたんだよね。なんか、そういうの知ると嬉しいっていうか…」

「え？」

「今も？」

「え？」

「今も、俺のことを、その…。思っちゃったりしてくれてる？」

「…うん。いつも思ってるよ」

って、言ってからまた、ああ！恥ずかしいこと言っちゃったって思ったけど、もう遅い。

「……。そっか…。ああ、俺馬鹿だよね。自分で聞いてて、照れてどうすんのって…。うん…。でも、俺も…」

「……？」

俺も…？

「俺も、桃子ちゃんのことばっかだな…」

「え？！」

「あ～～～～～～～～～。いい、今のは忘れていい！ごめん、変なことといっぱい言ってる。そろそろ、風呂入ってくるから、切るね」

「え？うん」

「おやすみ！」

「うん。おやすみなさい」

聖君は電話を切った。私は思い切り、余韻に浸っていた。

聖君も、私のことを思っててくれる時間があるの？そう思うと、

嬉しくて、胸がいっぱいになった。

第１４段階　好きな人の嬉しい言葉

翌週こそ映画に行こうと言ってたのに、聖君のほうが、風邪でダウンをしてしまった。まさか、私の風邪うつしたかな。

＞馬鹿は風邪引かないっていうけど、馬鹿でも引く風邪、あるんだね。でも、ごめんね、映画行けなくなった。

前日にそんなメールが来た。

＞明日、お見舞いに行くね。

＞いいよ、うつると悪い。

＞私の風邪がうつったのかもしれないもん。

＞多分、違う。熱出てるし、風邪の種類が違ってると思うよ。

そう言われたけど、私は、ヨーグルトのムースを作って、お見舞いに行った。すると、れいんどろっぷすのドアに「臨時休業」のふだが下がっていた。

店の窓から、私が見えたのか、聖君のお母さんがドアを開け、

「お見舞いにわざわざ、来てくれたの？」

と、優しい表情で聞いてきた。

「はい。あの、聖君は？」

「寝込んでるのよ。実は、主人も、パートの人まで風邪引いてるから、お店休みにしたの。私以外、みんなダウンしてるんだもの。あ、杏樹は元気に、部活しに行ってるけどね」

「そうなんですか…。寝込んでるって、熱？」

「もう下がってきてるから、大丈夫よ。でも、こんな時が１番うつる可能性が高いのよ。だから、会わないほうがいいわ」

そうか…。会えないのか。

「じゃ、これ…。ムースなんです。食べやすいかなって思ったんですけど」

「ありがとう！冷蔵庫に閉まってくるわ。ちょっと待ってて。時間あるでしょ？」
「はい」
聖君のお母さんは、店の奥のキッチンに行くとすぐに、戻ってきて、
「じゃ、お買い物付き合ってくれないかな」
と、私に言ってきた。
「はい」
私は、晩御飯の買い物か何かかなって思い、軽い気持ちで、はいって応えた。

でも、聖君のお母さんはしっかりとコートをはおり、
「じゃ、行きましょうか」
と、奇麗な鞄を持って、ブーツまで履き、すっかりよそ行きの格好をして、お店に鍵をかけた。
「どこに行くんですか？」
「藤沢あたりがいいかしら」
「え？」
そう言うと、江ノ島の駅まで颯爽と聖君のお母さんは、歩き出した。

聖君のお母さんは、お店にいる時も素敵な格好をしている。真っ黒なエプロンがとても似合っていて、優しく微笑む姿が、私は好きだった。
でも、今日みたいな、コートと、ブーツ姿も奇麗で女らしくて、素敵だ。とても美人だし、聖君は、本当にお母さん似だ。笑った仕草や、照れた仕草は、どことなくお父さんにも似てたけど…。あ、血はつながってないけど、やっぱり仕草は似てくるものなのかな。

藤沢に着くと、

「こっち、こっち」
と、お母さんは、洋服屋さんに入っていった。そこは、可愛いレースや、ひらひらのワンピースがたくさん売っていた。
「こんな感じの、桃子ちゃんに似合いそう！！！」
え…？！
「ピンクが似合うかしら。あ、でも白も似合う！」
え…？
「今日着てるピンクのカーディガンをはおったら、絶対に可愛いわよね。それで、ブーツとかも履いたりして。あ、ブーツはない？」
「持ってます」
「そう？！」

お母さんの目は、きらきらと輝いていた。
「女の子と、洋服買いに来るの、夢だったのよ」
「でも、杏樹ちゃん」
「あの子、洋服にまったく興味ないの。男の子が着るようなのしか、着ないからつまらなくって」
そう言うと、聖君のお母さんは、あれこれ、私に服を当て出して、
「やっぱり、これ！白のワンピース可愛いわね。冬に白っていうのもいいわね！」
と、私を試着室に連れて行き、
「着てみて」
と、手渡された。

い、いいのかな…。戸惑いながらも着てみると、本当に可愛いワンピースで…。
「ああ！やっぱり似合う。これ、これにしましょう」
「え？」
「そうね。早いけど、クリスマスプレゼントっていうことで。ね？」
「ええ？そんな、悪いです」

「いいのよ。気にしないで。私のわがままだから。ね？」
ええ…。いいんだろうか。でも、あまりにも目を輝かせているし、断る方が悪いような気がしてきた。

結局そのワンピースを買ってもらい、そのうえ、カフェで一緒にお茶までして、私は帰ってきた。
カフェでは、聖君のお父さんとの馴れ初めを聞いた。
驚いた。聖君のお母さんが、自殺をしようとしていただなんて。でも、それをまったく、辛かった思い出としてではなく、聖君のお父さんとの劇的な出会いとしてとらえてて、すごいなって私は、感動してしまった。

翌日の朝、聖君からメールが来た。
＞昨日、来てくれたんだって？それで、母さんと買い物に行って、服を母さん買っちゃったって。
＞そうなんだ。プレゼントしてくれたの。すごく嬉しかったけど、いいのかな？
＞ごめん！母さん、前に、桃子ちゃんと洋服を買いに行きたいって言ってたけど、勝手なことするなって言っておいたんだ。なのに、連れ出したんだってね。ごめんね。
＞そんな、私の方こそ、お見舞いに行ったのに、買い物に行っちゃって。
＞あ、そうだ、ムース食べたよ。うまかった。ありがとう。
＞風邪、もう平気？
＞うん、熱下がったし、今はまだ、喉痛いけど。

＞良かった。でも、ぶり返したら大変だし、無理はしないでね。
＞うん。ありがとう。昨日も、わざわざ、ありがとう。ほんと言うと、会えなかったのは、ちょっと寂しい（；；）
え？ええ？！そんなことを、聖君が言ってくれるなんて…。（そ

れもまた、可愛い顔文字つきだ！）ああ、どうしよう。どう返したらいいんだろう。う〜〜〜ん。
＞私も、会いたかったな…。

送信してからまた、ああ、恥ずかしいことを送ってしまったって思った。でも、
＞早くに元気になるよ。来週は絶対に会おうね！
と、聖君は、すぐに返信をよこしてくれた。嬉しかった。
聖君からのメールは、全部保存してある。消えないようにして、時々読み返したりして…。文字からも、聖君の優しさや、あったかさが思い切り伝わってくる。
私、出会った時よりも、もっともっと、好きになってるな〜…。

月曜、学校に行くと、蘭がなにやら怒っていた。どうも、基樹君と喧嘩をしたようだった。
「もう〜〜、別れる。あんなやつ〜〜」
いったい何が原因なの？と聞いても、
「話したくもない」
と、相当頭にきてるようだった。菜摘があとで、蘭がいない時にこっそりと、
「どうやら、メールするって言っておきながら、来なかったみたいだよ。たったの、そんなことで、あんなに怒らなくてもね〜〜」
と教えてくれた。

「メール？基樹君から？」
「そう。基樹君って、けっこう面倒くさがりみたいで、メールもまめにくれないみたい。葉君は、きちんとメールすると、返信してくれるけど…。あ、兄貴はどう？あの硬派で通ってる兄貴のことだから、面倒くさがって、くれないんじゃない？」
「え？そ、そうでもないかな」

さすがに、可愛い顔文字まで入ったメールをくれるよとは言えなかった。でも、
「そうだね。私がメールしても、けっこうすぐに返事してくれるし。まめなほうだよね」
と言われてしまい、ああ、そっか、私にだけまめにくれるわけじゃないんだなって、思ってしまった。

これ、私の悪い癖だ。いまだに、私は自分が特別だと思えないでいる。自分が聖君の彼女でいることが、どこかで信じられないでいるんだ。
聖君は、本当に優しい。なのに、どこかでまだ、片思いでいるような気持ちになる。メールもくれるし、毎週会ってるのにな…。
こんなことをもし、菜摘に言ったら、思い切り怒られそうな気もして、言えなかった。

翌日もまだ、蘭は怒っていた。基樹君と派手に喧嘩もしたらしい。喧嘩…。したことないけど、もし、聖君が怒っちゃったりしたら、私だったら怖くて、すぐに謝りそうだ。なにしろ、いまだに嫌われるのが怖い。
蘭は、どうやら、言いたいことを、本当にずばずばと基樹君に言ってるようだ。それは基樹君も同じみたいだった。菜摘はよく、似たもの通しだよねってそんな二人を見て言っていた。

3日たって、いきなり蘭が機嫌をよくして学校に来て、
「日曜、トリプルデートしない？」
と言ってきた。
「え？」
私も菜摘も驚いてしまったが、どうやら、仲直りをしたようだった。その提案にみんなが乗り、みんなで久しぶりに、カラオケに行くことになった。

日曜日、みんなで会って、ぞろぞろとカラオケボックスへ移動した。そう、前にも来た、あの店だ。
「派手に喧嘩したんだって？」
聖君が、蘭にそう言うと、
「ええ？なんで知ってんの？」
と、蘭がちょっと基樹君を睨んでいた。
「ああ。基樹じゃないよ。俺は、菜摘ちゃんに聞いたの」
「菜摘～～～！ばらしたの～～？」
「だって、あまりにも派手だったから、本当に別れちゃうのかなって思って、兄貴に基樹君の様子聞こうと思ってさ」
「なんで、聖君？葉君に聞けばいいじゃん」
蘭がそう言うと、
「葉君にも聞いたけど、葉君、クラス違うから、わからないって言うから」

菜摘が言い終わる前に、聖君が、
「いいじゃん。彼氏に相談もいいけどさ、兄貴にだって、相談したい時もあるよな？」
と、菜摘の方を向いてそう言った。
「え？うん」
菜摘も、聖君の方を見て、安心したように笑って答えた。それから、少し二人で、何か話していた。時々、菜摘が大笑いをして、聖君は、頭をこついていた。
それを横から、葉君が、優しい表情で見ていた。

私は複雑だった。葉君みたいに、あんなに優しく二人を見ることはできないなって、そんなことを思っていた。だって、菜摘に今でも、やきもちをやいている自分がいるんだもの。
私といる聖君と、菜摘といる聖君をどっかで、比べている。あん

なふうに、笑ってるかな。嬉しそうでいるかな。

菜摘はきっと、嫌われることはないだろうな。だって、血のつながってる妹だもの。縁が切れるってことは、絶対にないんだ。

でも、私は…？

ああ、馬鹿だな。なんでこうもまた、暗いことを考えて、勝手に落ち込むんだろうか、私は。

カラオケボックスに着くと、すぐに聖君が歌を予約した。それから、葉君や、基樹君にも入れろってリモコンを渡して、すぐにマイクを持って、歌い出した。

すんごく上手だった。そりゃそうか。ステージでの聖君も、上手だったもんね。

前にみんなで来た時には、まだ、菜摘のことで悩んでいた時で、静かにしてたけど、今日は基樹君や蘭と、大騒ぎをし始め、ノリノリで歌いまくるわ、みんなが歌ってると盛り上げるわ…。

「そういえば、桃子ちゃん、歌ってないじゃん。ほら、リモコン、蘭、桃子ちゃんに渡して」

基樹君が突然、そう言った。でも、蘭は、

「桃子はいいのよ」

と、そう言ってくれた。

「なんで？桃子ちゃんにはなんで、歌わせないの？桃子ちゃんだって歌いたいよね？」

と基樹君が、今度は私に言ってきた。

「私は…」

歌、下手だし。って言うのを、聖君の前で言うのが、恥ずかしかった。だけど、下手な歌を聞かれる方が、もっと嫌だ。

「桃子は、歌うよりも、聞いてる方が好きなんだよね？」

菜摘がそう言ってくれた。
「特に、ほら、兄貴！桃子に兄貴のバラードでも聞かせてやってよ」
菜摘がそう言うと、
「バラード？んなの歌えるかよ」
と、聖君は、また菜摘の頭をこついた。

菜摘は、私の気持ちを汲み取ってくれて、あんなふうに言ってくれる。いつもだ。いつも、明るく冗談交じりに言ってくれる。それが菜摘の優しさだ。
それから、菜摘が歌を入れて、ノリノリで盛り上げて歌い出した。私はそれを黙って見ていた。
聖君を見ると、嬉しそうに手をたたきながら、菜摘が歌っているのを盛り上げていた。

ふと、またよぎる。私は、いったいどこを好きになってもらえたんだろうか。聖君は、可愛いと言ってくれた。どこをとっても可愛いんだって…。嬉しかったけど、でも、やっぱりよくわからない。
ただ、可愛いってだけなら、子供を見て可愛いと思うのと同じじゃないのかな。

2時間はあっという間に過ぎ、カラオケボックスを出て、ぶらぶらとみんなで歩き出した。
「さむ！今日の風も、冷たいね～～」
と、聖君が、両手をジャケットのポケットにつっこんで、そう言った。
「兄貴、風邪、もう大丈夫なの？」
菜摘が聖君に聞いていた。
「ああ。うん。もう大丈夫」
聖君が風邪引いてたのも、知ってるんだ。

「馬鹿でも引く風邪だったね」
と、葉君が静かにそう言うと、
「うるへ～～～。馬鹿じゃないから引いたんだよ！」
と、聖君が、足で葉君の足をこつきながら、言い返していた。
「どっかで、お茶する？」
蘭がそう言うと、
「うん、ちょっと休んだら、俺もう、バイト行かなきゃ」
と聖君が、そう言った。

ファーストフードの店に入った。そこで、それぞれが飲みたいもの、食べたいものを買い、席についた。基樹君が、蘭に何かを言って、二人で大笑いをしていると、その横で聖君もふざけて、３人でわいわいと話し出した。
菜摘はそこに入って、笑ってみたり、葉君に話しかけて、笑ってみたりしていた。
私は、なんとなく、その輪に入れず、ただ、みんなのことを眺めていた。
あれ？なんだか、夏に６人で会ってた時みたいだ。その時に時間が戻ったみたいだ。それとも、私が聖君の彼女になったのは、やっぱり夢か幻だったのかな…。

ぼ～ってしながら、みんなを見ていると、聖君が突然、
「あ！クリスマスには、れいんどろっぷすにみんな来てよ」
と言い出した。
「え？もしかして、クリスマス会？」
「俺の誕生日会」
「何それ？小学生じゃあるまいし」
「はは！いいじゃん。ま、メインはクリスマスでもいいや、誕生日ってのは、ついでにでも」
と、笑いながら、聖君は言う。

「でも、誕生日は、イブでしょ?兄貴。イブにパーティ開いた方がいいんじゃないの?」
と、菜摘が言うと、
「あ〜〜ほ!」
と言って、聖君は、菜摘の頭をまたこついた。
「え?」
菜摘が、不思議そうな顔をすると、
「聞くだけ、やぼ。そんなのさ、彼女と二人きりになりたいに決まってるじゃん」
と、基樹君がそう言った。

「あ、そっか。桃子とデートか!」
菜摘が納得したようにそう言うと、
「イブくらいは、カップルの邪魔はしないよ。菜摘ちゃんは葉一とデートしたいでしょ?」
と、聖君が菜摘にそう言った。
「え?そうじゃなくて、兄貴が桃子と二人で祝いたいんでしょ?」
菜摘がそう言うと、聖君は、
「うっさいよ。いいんだよ。別にそれは」
と、ちょっと面倒くさそうに菜摘に言っていた。

別に、どうでもいいことなのかな?
あ、いけない。イブは二人で過ごせるってことだよね。喜ぶところだよ、ここは…。

「じゃ、俺、そろそろ行くよ。みんなはゆっくりしてって」
聖君は、そう言うと、店を葉君と出て行った。葉君も夜は、バイトをしているらしい。
あ、聖君と今日、二人で話も出来なかったな…。

「私も、そろそろ帰るね」
私がそう言うと、菜摘も帰ると言い出し、結局蘭と基樹君だけ残し、みんなばらばらに帰っていった。

夜、お風呂から出ると、携帯に着信があるのに気がついた。聖君からだった。すぐに電話をしたけど、聖君は電話に出なかった。寝たのかな?それとも、お風呂かな。
ベッドに横になり、携帯を手に持ち、私は聖君からの電話を待った。
…私、彼女なんだよね?天井を見ながら、そんなことをつぶやいた。

なんとなくうつらうつらしていると、携帯が鳴った。
「あ!」
でも、メールだった。
＞もう、寝ちゃった?
時間を見ると、11時過ぎていた。
＞起きてるよ。
それだけを送った。
＞今日の、白の服、母さんが買った服?
あ、聖君、わかってたんだ。
＞うん。そう。変だった?
＞可愛かったよ。似合ってたよ。母さんに言ったら、喜んでたよ。着てもらえて嬉しいってさ。
＞こっちこそ、お母さんにありがとうって伝えて。
＞うん。わかった。

それから、メールをしないでいたら、聖君からも、メールは来なかった。
「はあ…」

この漠然とした不安はなんだろう。天井を見ながら、もう1度つぶやいてみる。

「私、彼女だよね？」

ワンピースのことだって、気づいてくれた。そういうのも、ちゃんと見ててくれてたのに…。可愛いって言ってくれたのにな…。こんなふうにメールをくれることだけでも、以前に比べたら、すごいことなのにな…。

１０分位して、また、携帯が鳴った。

＞おやすみ。いい夢見てね。もう落ち込んだりする夢じゃなくてさ。

と、聖君からのメールだった。

あ、この前の、落ち込んでる夢を見るって、覚えてたんだな。

＞ありがとう。もっと、幸せな夢を見るね。

＞そうそう。俺とデートしてる夢ね！他のやつとじゃ絶対駄目だよ。

え…？

いきなり、こういうメールがきて、私はまた、どうやって返そうか悩んでしまった。たまに、聖君はこういう、ふざけた感じのメールをくれる。からかって、私の反応を見て、楽しんでいるのかもしれない。

＞どんなデートの夢にしようかな。

どう返していいか、わからないから、そんなことを聞いてみた。

＞どこに行きたい？

逆に聞かれた。

＞ディズニーランドか、海か、また、水族館でもいい。やっぱり、どこでもいい。聖君となら。

思ったままを書き、また送信してしまった。あ…。またやった。

それから、またしばらく返信が来なかった。

５分位して、

＞ね、そういうのってさ、書いてて、照れたりしない？
という、メール。
……！ええ？！これ、もしかして呆れてるの？それとも、嫌がられたりしてる？
なんだか、ショックで、何を書いて送っていいか、わからないでいた。しばらくすると、また聖君からメールが来た。

＞すんごい変なこと、聞いてもいい？前から思ってた。桃子ちゃんは、すんごい素直で、思ったことをそのまま口にしたり、表現するんだって、思ってたけどさ。それ、ほんとのほんとの本心だよね？
え？ええ？ど、どういうこと？それに私って、そんなに素直？思ったことそのまま、出しちゃってる？

頭が真っ白で、聖君が何を聞きたいのかも、何を言いたいのかもわからなくて、返信できないでいた。なんだろう。聖君、どうしてそんなこと聞いてくるの？
なんて答えたいいの？でも、何か、何か返事をしなきゃ。

また、携帯が鳴った。
＞でさ、もう一つ聞いてもいい？俺のこと、まじで好き？
ええ？！
＞どこが好き？
ええ？！！！！！
この質問攻めは何？何～～～？

落ち着いて、返信することにした。よくわからないけど、聞かれてることにちゃんと、答えなくちゃ。
＞本当に、聖君のことは、好きです。
まず、そう書いて送った。ドキドキした。何分かしても返事はなかった。

＞聖君のどこが好きかって聞かれても、嫌いなところもないし、きっと会った時よりも、もっと好きになってると思うし、知れば知るほど、好きになってるし。

ああ、なんか変だ。うまく書けない。書き直そうとして、間違って送信を押した。

ああ～～！またやった！慌てて、中止を押そうとしたけど、もう送信されてしまった。

5分しても返事は来なかった。なんだか、心臓がばくばくして、汗まで掻いた。聖君は読んで何を思ってるの？どうしよう。

このまま、返事が来なかったらどうしよう。今頃読んで、呆れてたらどうしよう。嫌がられてたら、どうしよう。

携帯が鳴った。思わず、私は驚きで飛び上がった。開けて読むのが怖くなった。

なんて書いてある？聖君は、どう思ってるの？怖いけど、勇気を出して、読んでみた。

＞やばいんですけど。

たった一言、そう書いてあった。え？え？え？何がやばいの？！

すぐにまた、携帯が鳴った。気になって、すぐに開いた。

＞やべ～～！やばすぎるって！

え？え？え？

どうしよう。何がやばいの？って聞いてみようか。でも、聞くのすら怖い。でも、でも、勇気を持って…。

＞何がやばいの？

と、書いてえいって、送信を押した。ドキドキ、バクバク。そうしたら、すぐに返事が来た。

＞そりゃ、嬉しすぎて（＞＜）

……え？？？！

＞く～～～～～！！！！俺、今、部屋で暴れてます。嬉しすぎて。

ええ？！えええええ？？？？！

＞桃子ちゃん、あのさ、もう俺の本性というか、バカなところも、全部見せてると思うけど、それでもこんなあほなやつでも、好きでいてくれてるの？

えっ？！

＞俺、かなりあほでしょ？カラオケでも見たと思うけど、はしゃぐ時はいつもあんなだよ。それに、桃子ちゃんの可愛いワンピース着てるの見て、にやけてたりするし、今日、鼻の下伸びてるって、何回も葉一に言われてた。俺、そんなにしまりのない顔してた？

えっ？！！！！ええ？そ、そんなの気づいていない。

＞だから、ちょっと桃子ちゃん、呆れてないかなって思って、本当にまだ、俺のこと好きでいてくれてるかなってちょこっと、心配になって。でも、本心なんだよね？さっきのメール。

え～～～～～～～！！！！！！！

＞桃子ちゃん、さっきから返事ないけど、って俺がどんどこ送ってるからか。ごめん。返事ください。

きゃ～～～～～～～～。

きゃ～～～～～～～。何？さっきからの聖君からのメール。なんで、こんなに嬉しいことがいっぱい書いてあるの？

えっと、えっと…。ああ、どうしよう。送らないと…。でもなんて？

＞本心だよ。

それだけ送った。送ってから、ぼたぼた携帯に涙が落ちた。聖君。嬉しいのは私の方。

＞私も、不安だった。だって、やっぱり、聖君が私のどこを好きになってくれてるのか、わからなくて。本当に、私が彼女なのかなって、そんなことも思っちゃって。

泣きながら、そう書いて、また送信した。

聖君が、返事をくれた。

＞桃子ちゃん、自信持っていいよ。もっともっと。

そのメールでも、涙が溢れた。そしてまた、すぐにメールが来た。

＞こんなこと書くの、めちゃ照れるけどさ、もう、こうなったら白状するよ。俺、多分、桃子ちゃんが想像してるのをはるかに超えるくらい、桃子ちゃんのこと好きだから。

＞聖君。ほんと？

＞信じていいよ。これ、本心だから。

＞ほんとに、ほんと？ほんとにほんとにほんと？

＞あはは！そんな桃子ちゃんも、可愛いよね。めっちゃ好き！

え、え～～～～！！！

＞やばいくらい好き！

……。だ、駄目だ。涙で携帯の画面も見えない。私は思い切り、声をあげて泣いてしまった。

嬉しくて、嬉しくて、嬉しすぎて。

＞ありがとう。

どうにか、それだけ打って、送信した。

＞桃子ちゃんも、俺のこと好きになってくれてありがとう。

そのメールでまた、私は泣いてしまった。嬉しくっても、こんなに泣いちゃうんだね、初めて知ったよ。

第１５段階　好きな人の誕生日を祝う

聖君の誕生日、私は二つプレゼントをバッグにつめて、待ち合わせ場所へ行った。それも５分以上も早くに着いてしまった。
待ち合わせ場所で、駅の改札口を見ながら、私は今までのことを思い返していた。
初めて会って、すぐに惹かれた。一目惚れだった。それから、みんなで江ノ島の海にまた行き、再会した。でも、聖君は、私のことなんて視界にも入っていなかった。

ああ、花火大会の日、浜辺で置いていかれて、一人っきりになったことがあったっけ。それから、海では、５人が泳いでるのを見て、寂しくなってたっけな。
聖君の笑顔が、私に向けられたらいいな…。とか、そんなことを思ってた。なのに、今は聖君の誕生日を二人だけで祝えるんだ。
あ～～～～。信じられない！小さく手を、つねってみた。痛い。やっぱり現実だ。

待ち合わせ時間ぴったりに、聖君は現れた。思い切り可愛い笑顔で、走ってくる。
「待った？」
「ううん」
私はなんだか、照れてしまって、下を向いた。聖君の笑顔はいつも、まぶしいんだもん。
「今日は、夜のバイトもないから、夜までゆっくりしてられる。あ、でも桃子ちゃんのほうが、門限あるよね」
「うん。でも、電話したら、少し遅くまで大丈夫かも」
「ほんと？じゃ、夕飯も食べていける？」
「うん」

二人で、みなとみらいの駅からエスカレーターに乗り、大きなクリスマスツリーを見て喜び、そのまま、赤レンガのほうまで、ぶらぶらと歩いた。

聖君は、外に出ると、

「さむ！」

とまた、寒がって、それから片手をジャケットのポケットにつっこんだ。

「手」

と聖君はそう言って、もう一方の手を、私に差し出してきて、私が手をつなぐと、そのまま、ジャケットのポケットに私の手まで入れてしまった。

「あったかい？」

「え？うん…」

わ～～～～。なんか、照れる！

それから、歩く早さを私に合わせて、聖君は話をし出した。

「あ、言ったっけ？犬を飼ったって」

「聞いてない」

「真っ黒な犬がうちに来たんだ。名前はクロっていうんだけどさ」

「クロ？」

「俺が小さな頃も犬飼ってた。ラブラドール。やっぱり黒くて、名前はクロ」

「そうなんだ」

「すげえ、可愛い。ほんとはさ、俺桃ちゃんって名前にしたかったんだけど」

「え？」

桃ちゃん？！

「だって、桃子ちゃんに目がそっくりなんだよ」

……。犬みたいって言いたいの？もしや…。
「でもさ、母さんが、桃子ちゃんと区別つかなくなるから、その名前はやめようって」
ど、どういう意味～～？
「今度遊びに来た時、見せるから」
「うん…」
そう言ってから、聖君は私の顔を覗きこんだ。
「何？！」
「やっぱ、そっくり～～！あはは…」
「……」

赤レンガ倉庫についてから、ご飯を食べた。
目の前のテーブルには、外人の親子が座ってて、子供が金髪で、ビー玉みたいな、ブルーの目をしていた。そして、時々こっちを見ては、にっこりと微笑む。
「あの子さ、あの男の子。きっと桃子ちゃんに気があるんだよ」
聖君が、小さな声でそう言った。
「え？ないよ～～。それにどう見てもまだ、３歳か４歳」
「うん。だからさ、きっとあの子、同じくらいの年なのかなって、桃子ちゃんのこと見て錯覚起こしてて…」
「それ、どういう意味？」
「あはは！うそうそ。ただね、誰から見ても、桃子ちゃんは可愛いってことだよ」
「……」
喜んでいいんだか、どうなんだか…。

私はどっちかって言うと、注文したものを持ってくる、可愛らしい店員さんが、聖君を見て、顔を赤くしてる方が、ずっと気になった。
「今の店員さん、聖君のこと見て、顔赤くなってたよ」

「ええ？ないない。それこそないって」
「そうかな～～。聖君、誕生日のプレゼントも、たくさんもらったんじゃないの？」
「もらってないよ」
「え？そうなの？学校一昨日までだったよね？最後の日にもらわなかったの？」
「……」

あれ？黙っちゃった。さては、もらった？
「受け取らなかった。一個も。いつもそうしてる」
あ！そっか。文化祭行った時も、そうしてたっけ。
「どうして、もらわないの？」
「…。悪いじゃん」
「え？なんで？」
「うん…。なんかさ、気を持たせちゃうみたいでさ…。それに、俺も、そのプレゼント、どうしていいかわかんなくなるしさ」
「え？」

「例えば、桃子ちゃんからのだったら、すげえ嬉しいし、使ったり、持ってたりしたいって思うし。でも、あまり知らない人だと、捨てるに捨てられないし、でも使うのにも気がひけるし」
「そっか…」
「それにさ、桃子ちゃんも嫌でしょ？」
「え？何が？」
「俺が他の人から、何かもらったりするの…。やじゃない？もし桃子ちゃんが他のやつから何かプレゼントされてたら、俺嫌だな」
「…。う、うん。嫌かも…」

そうか。そんなことまで、考えてくれてるんだ。あ、そうだ。プレゼント、今渡そうかな。

なんて思ってたら、聖君が、
「もう出ようか？」
と言って、席を立ってしまった。

それから、お店をぶらぶら見て、みなとみらいの町を、ゆっくりと歩きながら、ランドマークまで歩いてきて、タワーに上った。さすがにイブだけあって、カップルだらけだった。
もう、徐々に外は暗くなってきていた。そしてだんだんと、夜景に変わっていった。
「奇麗だね…」
私のすぐ横に並んで、聖君がそう言った。
「うん…」
幻想的で、ロマンチックだ。夜景を聖君と見ている、それだけでも、なんだか夢心地だ。

「桃子ちゃん、はい。これ…」
「え？」
ポケットから、小さな箱を聖君が取り出した。
「クリスマスプレゼント…」
「あ。ありがとう…。開けてもいい？」
「うん」
ドキドキしながら、私は箱を開けた。中には、すごく可愛いネックレスが入っていた。
「わ、可愛い」
これ、聖君が一人で買いに行ったのかな…。

箱から出して、窓ガラスに映しながら、ネックレスをつけようとすると、
「つけようか？」
と、聖君が、ネックレスをつけてくれた。

わ…。聖君の指が、首に当たる…。ドキって胸が高鳴った。
「あ、ありがとう」
つけてもらったネックレスを、窓ガラスに映して見た。
「可愛いね、これ」
「うん、すごくよく似合う。良かった、それにして」
「一人で買いに行ったの？」
「いや、父さんと」
「え？！」

「父さん、母さんにピアスあげるって言うから、俺も桃子ちゃんにプレゼント買いに行こうかなって、なんとなくそう言ったらさ、一緒に行くかって」
「そうなんだ」
「父さんも、これが桃子ちゃんに似合うって言ってたんだ」
「そうなの…？」
わあ。なんだか、嬉しい…。

あ、そうだ。私も今、プレゼント渡しちゃおう…、そう思って、鞄からプレゼントを取り出した。
「はい…。これ…」
「え？わ！サンキュー。何？何が入ってるの？」
「マフラーと、手袋」
「二つも？」
「うん。誕生日と、クリスマス」
「あ！そっか！」
聖君は、袋から手袋とマフラーを出すとすぐに、はめたり、巻いたりした。
「あったけ～～！」
すごく可愛い笑顔で、聖君が笑った。

「あれ？これは？」
袋の中にまだ、小さな袋があり、それを取り出しながら、聖君が聞いてきた。
「あ、クッキーなの。前に言ってた」
「ああ。作ってきてくれたの？」
「うん」
「やった！今、食べていい？」
「うん」
聖君は、袋を開けて、一つ取り出すと、そのままぱくって口にほおりこんだ。
「うめ！」
また、すっごく可愛い笑顔でそう言った。

ああ、なんだか、すごく幸せだ。聖君、おしゃれだから、手編みなんて嫌がったら、どうしようとか、思ってたんだ。
でも、目の前の聖君は、本当に嬉しそうだ。目を細めて、手にはめた手袋を見たり、マフラーに頬ずりしたりしている。

「桃子ちゃん、編んでくれたの？これ」
「うん」
「すげ～～。桃子ちゃんて器用だよね。それに、この前のムースとか、弁当も旨かった。今日のクッキーも。料理、上手だよね」
「上手じゃないよ。ただ、好きなだけで」
「上手だって！もう今すぐにでも、お嫁さんになれちゃうね」
「え？！」
ドキ！わ…。冗談で言っただけだよ。何、そんな言葉で私、動揺してるの…。

「絶対に桃子ちゃんと結婚するやつ、幸せ者じゃん」
「……」

あ…、あれ？
「そう思わない？」
「…。わ、わかんない。どうかな」
それ、聖君じゃないの？なんて言えない、聞けない…。
「幸せ者だよ。旨いご飯食えて、こんなふうに、マフラーとか編んでもらえてさ。それに、こんな可愛い…」
え…？

「……」
突然、聖君が黙った。それから、後ろを向いてしまった。
「やべ～～～」
そう言うと、しばらく聖君は、窓の外を見ていた。窓ガラスに映った顔は、なんだかにやけていた。
「……」
何を考えてるのかな…。
「それ、俺だったらいいよな…」
突然、小さな声で聖君がつぶやいた。
「え？！」
その逆に、私は思わず大きな声で、聞き返してしまった。

「あ、なんでもない。単なる妄想」
「え？」
私は、もう一回聞き返した。
「夕飯、どうしようか？」
聖君は、こっちをくるりと向き、聞いてきた。
「なんでもいいよ」
「じゃ、早めに店、どっか入ろう。きっとイブだし、混んじゃうよ」
「そうだね」
私たちはタワーを下りて、レストランに入り、夕飯を食べ、そして駅に向かい、そこで別れた。

聖君は、家に着くとすぐにメールをくれた。
＞外、寒かったけど、桃子ちゃんがくれたマフラーと手袋のおかげで、超あったかかった。サンキュ！
そんなことが書いてあった。
ああ…。めちゃめちゃ、嬉しい。しばらく、その言葉をかみしめ、それから返事を送った。
＞ネックレス、お母さんとひまわりも似合うって言ってくれたよ。ありがとう。
聖君はしばらく、返信をしてこなかった。１０分位してから、
＞また、明日会えるね。
と、それだけ、メールに書いて送ってきた。
＞うん、また明日ね。
そう送ると、すぐにおやすみってメールが来た。私もおやすみって送り返した。

翌日は、クリスマス。私は、菜摘や蘭と待ち合わせをして、それから、れいんどろっぷすに向かった。菜摘は、聖君にあげるプレゼントを持っていた。
「あれ？なんか身軽じゃない？小さなバックだけなの？桃子」
と、菜摘に聞かれた。
「うん、プレゼントは、昨日渡しちゃったし」
「あ。そっか…」
私は、昨日もらった、ネックレスをしていたけど、菜摘にも蘭にも、黙っていた。なんでかな？なんとなく、内緒にしておきたかった。

れいんどろっぷすにはもう、葉君も基樹君もいた。それに杏樹ちゃんと、そのお友達も数名。きゃっきゃって言いながら、聖君と話をしていた。

「いらっしゃい！」
私たちのことを、聖君のお母さんが元気良く、出迎えてくれた。
「桃子ちゃんだ～～～！」
杏樹ちゃんが、私のところにやってきて、
「お兄ちゃんの彼女なんだよ！」
と、お友達に紹介していた。

「え～～～！可愛い～～～！」
…。わあ…。中学1年の子達に、そんなことを言われてしまった。
そして、みんなで、お料理を食べたり、ケーキを食べたりして、楽しんだ。
8時になる前に、杏樹ちゃんのお友達のお母さんたちが迎えに来て、帰っていった。
「そろそろ、私たちも帰ろうか」
と、菜摘が言い出し、聖君、葉君、基樹君が、駅まで送ると言って、一緒にお店を出た。

「ちょっと、海沿いの道、歩いていかない？」
基樹君の言葉にみんな、うなづき、ぞろぞろと海岸に向かって歩き出した。
浜辺に着くと、北風が吹いていて、かなり寒かった。
「さむ～～～」
葉君と、基樹君が、背中をまるめた。
「あれ？いつも1番に寒いって言うくせに、今日は言わないんだ」
と、葉君が、聖君に聞いた。

「だって、ほら、これ！」
聖君は、私があげたマフラーと、手袋をしていた。
「それ、手編み？もしかして、桃子ちゃんが作った？」
「そう！」

葉君にそう返事をして、聖君が、
「ほ〜〜れ、いいだろ」
と、見せびらかしていた。

「桃子、さすが！そういうの得意だもんね」
蘭が私に、そう言ってくれた。
聖君は、基樹君や、葉君にひやかされていて、それを、うっせ〜〜ってけちらしていたら、そのうち3人で、浜辺を走り出し、追いかけっこまでしてしまっていた。
それを見ていた、蘭と菜摘は、
「一つ上とは思えないほど、幼稚だよね」
と、笑って言った。
私は、ただただ、笑ってる聖君が可愛くて、幸せだった。

聖君の、17歳の誕生日を、一緒に祝えた。
来年はどうなのかな…。隣にいられたらいいな…。
本当は、もっと先もずっと先も、こうやって一緒にいて、聖君のことを見ていたい。

私と聖君の物語は、まだまだ、始まったばかりかな。うん。きっと、そうだよね。これからも続くんだよね。
永遠に続いてくれたら、いいな…。浜辺を大笑いして走ってる聖君を見ながら、私はそんなことを思っていた。

第１５段階　好きな人の誕生日を祝う（後書き）

ここまで、読んでくださって、ありがとうございます。この回で、永遠のラブストーリーは終わりますが、すぐに、第２部を書きたいと思っていますので、これからもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5305l/

永遠のラブストーリー　～片思い編～

2011年7月9日03時29分発行